

YUN-KANG

VOLUME IV

雲岡石窟

第四卷

PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYŪSHO

YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE
FIFTH CENTURY A.D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL
SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE
TŌHŌBUNKA KENKYŪSHO 1938-45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO
AND
PROFESSOR TOSHIO NAGAHIRO

VOLUME IV
CAVE SEVEN
TEXT

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
KYOTO UNIVERSITY
MCMLI

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

西曆五世紀における中國北部
佛教窟院の考古學的調査報告

東方文化研究所調査

昭和十三年—昭和二十年

水 野 清 一

長 廣 敏 雄

第 四 卷

第七洞 本文

京都大學人文科學研究所

1952

例 言

本書は『雲岡石窟』全十五巻のうち、第四巻にあたり、第七洞の調査と研究とをとりまとめたものである。

この洞は主として昭和十五年(1940)昭和十六年(1941)に、もと所員羽館易氏が所員岡崎卯一氏もしくは所員戊亥一郎氏を助手として寫眞を撮影し、昭和十四年(1939)、當時京城博物館の米田美代治氏および本所々員北野正男氏が主として測量し、一部を長廣が擔當した。製圖はもっぱら北野正男氏によって作成された。拓本は昭和十三年(1938)と昭和十四年(1939)に徐立信氏が作製した。

本書の記述は著者二人の共同執筆である。英文翻譯のうち、解説は京都大學文學部教授長尾雅人氏と William Fernstrom-Flygare 氏の共譯であり、本文は國立博物館原田治郎氏の譯であるが、全體にわたり Flygare 氏に校正、その他の援助をうけた。

本書の刊行は、本所の出版費をもとにし、その後、文部省當局および京都大學の配慮によって、すくなくとも經費の追加をうけて達成されたものである。

以上の諸氏ならびに諸機關に對し心からの感謝の辭をさしげるとともに、過去十數年間の調査と研究に有形、無形、さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し、さらに本巻の編輯に獻身的努力をはらわれた齋藤菊太郎、陳顯明の兩氏その他に對し、深甚の謝意を表したい。

1952年2月

著 者

目 次

例 言	vii
序 章 雲岡石窟裝飾の意義	i
第一章 第七洞前室	17
第二章 第七洞主室北壁	20
第三章 第七洞主室東壁	22
第四章 第七洞主室西壁	24
第五章 第七洞主室南壁	29
第六章 第七洞主室天井	33
終 章 第七洞の特徴	37
圖版解説第七洞	43

實 測 圖 目 次

I. 第七洞 橫斷面圖 (米田美代治測,北野正男製圖)	17, 20
II. 第七洞 縱斷面圖 (米田美代治測,北野正男製圖)	17, 20
III. 第七洞 正立面圖 (北野正男測並製圖)	19
IV. 第七洞 前室東壁立面圖 (長廣敏雄測,北野正男製圖)	18
V. 第七洞 前室西壁立面圖 (長廣敏雄測,北野正男製圖)	18
VI. 第七洞 門口展開圖 (長廣敏雄測,北野正男製圖)	19, 29
VII. 第七洞 明窓展開圖 (長廣敏雄測,北野正男製圖)	19
VIII. 第七洞 主室北壁立面圖 (米田美代治測,北野正男製圖)	20
IX. 第七洞 主室東壁立面圖 (米田美代治測,北野正男製圖)	22
X. 第七洞 主室西壁立面圖 (北野正男測並製圖)	24
XI. 第七洞 主室南壁立面圖 (米田美代治,北野正男測,北野正男製圖)	29
XII. 第七洞 主室天井平面圖 (北野正男測並製圖)	33

參照頁

拓 本 目 次

		参照頁
RUB. I	A.特殊龕 (主室西壁第一層南龕)	56
	B.楣拱龕 (主室東壁第三層南龕)	51
	C.天蓋龕 (主室南壁第三層東龕)	59
	D.尖拱龕 (主室西壁第二層南龕)	54
	E.帳幕 (主室北壁上層龕東部)	50
	F.マニ寶珠 (主室南壁中央)	58
	G.多臂神寶冠 (門口西側)	46
	H.多臂神寶冠 (門口東側)	46
	I.菩薩寶冠 (主室南壁第四層東龕)	59
RUB. II	A.楣 (主室南壁六天龕)	57
	B.帷帳と傍柱 (主室南壁六天龕)	57
	C.蓮瓣文帶 (主室東壁第四層)	51
	D.蓮瓣文帶 (主室南壁第四層西龕)	60
	E.半パルメット並列文帶 (主室西壁第二層)	54
	F.半パルメット並列文帶 (主室南壁門口拱梁)	58
	G.菩薩蓮座 (主室南壁第四層東龕)	59
RUB. III	A.重層柱 (主室東壁第三層中央)	52
	B.拱柱 (主室南壁第二層西龕)	61
	C.拱柱と拱端交龍 (主室西壁第二層中央)	55
	D.重層柱 (主室西壁第一層中央)	55
	E.重層柱 (門口西側北面)	46
	F.重層柱 (門口西側東面)	46
	G.重層柱 (門口東側西面)	46
	H.重層柱 (門口東側北面)	46
RUB. IV	A.樹下思惟の比丘 (明窓東側)	47
	B.樹下思惟の比丘 (明窓西側)	47

挿 圖 目 次

第 一 圖	雲岡佛龕各種	2
	a) 尖拱龕 雲岡第八洞東壁 b) 楣拱龕 雲岡第五洞東壁	
	c) 天蓋龕 雲岡第八洞東壁 d) 屋形龕 雲岡第十二洞東壁	
第 二 圖	各地尖拱龕	3
	a) インド石窟明窓 (E. B. Havell, <i>The Ancient and Mediaeval Architecture of India</i> , Fig. 17)	
	b) ハッダ塔基佛龕 (J. Barthoux, <i>Les fouilles de Hadda</i> , Tome I, Fig. 23)	
	c) ハッダ塔基佛龕 (<i>Ibid.</i> , Fig. 28) d) ハッダ塔基佛龕 (<i>Ibid.</i> , Fig. 175)	
	e) キジイル合唱洞 (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , II, Fig. 8)	
	f) キジイル海馬洞 (A. Grünwedel, <i>Altbuddhistische Kultstätten</i> , Fig. 228)	
第 三 圖	各地楣拱龕	4
	a) ハッダ塔基佛龕 (J. Barthoux, <i>Ibid.</i> , Fig. 127)	
	b) ガンダアラ浮彫 (A. Foucher, <i>L'art gréco-bouddhique</i> , Fig. 160)	
	c) バアミヤアン佛龕 (A. et Y. Godard et J. Hackin, <i>Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān</i> , Pl. XXVII)	
	d) キジイル海馬洞 (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , Pl. XIX, XX)	
第 四 圖	各地天蓋	5
	a) ガンダアラ浮彫 (A. Foucher, <i>Ibid.</i> , Fig. 156) b) ガンダアラ浮彫 (<i>Ibid.</i> , Fig. 233)	
	c) キジイル孔雀洞 (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , Pl. I, II.)	
	d) 雲岡第七洞南壁 e) 雲岡第六洞南壁	
第 五 圖	繪幕各種	5
	a) 雲岡第十九洞 b) 雲岡第一洞 c) 雲岡第七洞	
	d) バアミヤアン53メートル大像窟 (A. et Y. Godard et J. Hackin, <i>Ibid.</i> , Pl. XIX)	
第 六 圖	アフガニスタン佛立像 (ギメエ博物館蔵)	6
第 七 圖	各地方格蓮華文	7
	a) バアルフット (L. Bachhofer, <i>Early Indian Sculpture</i> , Pl. 28)	
	b) アマラアヴァティ (<i>Ibid.</i> , Pl. 112) c) マツラア (<i>Ibid.</i> , Pl. 87)	
	d) ガンダアラ (A. Foucher, <i>L'art gréco-bouddhique</i> , Fig. 236)	
	e) ベエグラアム (J. Hackin, <i>Recherches archéologiques à Bēgrām</i> , Fig. 227)	
	f) ニヤ (A. Stein, <i>Ancient Khotan</i> , Pl. VIII)	
	g) ロウラン (A. Stein, <i>Serindia</i> , Pl. XXXII)	
第 八 圖	各地蓮瓣文	8
	a) マツラア (L. Bachhofer, <i>Early Indian Sculpture</i> , II, Pl. 106)	
	b) アマラアヴァティ (<i>Ibid.</i> , Pl. 129) c) ガンダアラ (A. Foucher, <i>Ibid.</i> , Fig. 192)	
第 九 圖	キジイルの三つ葉四出文	8
	a) カアシャパ洞 (A. Grünwedel, <i>Altbuddhistische Kultstätten</i> , Fig. 174 c)	
	b) 紅窮隆洞 (<i>Ibid.</i> , Fig. 186) c) 環くひ鳩洞 (<i>Ibid.</i> , Fig. 259)	

第十圖	各地波狀唐草文	9
a)	サアンチイ (L. Bachhofer, <i>Ibid.</i> , Pl. 57)	
b)	ガンダアラ (A. Foucher, <i>Ibid.</i> , Fig. 174)	
c)	ベエグラアム (J. Hackin, <i>Ibid.</i> , Fig. 112)	
d)	ハッダ (J. Barthoux, <i>Ibid.</i> , Fig. 172)	
e)	キジイル (A. Grünwedel, <i>Alt buddhistische Kultstätten</i> , Fig. 424)	
f)	ロウラン (A. Stein, <i>Serindia</i> , Pl. XXXI)	
g)	キジイル (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , Fig. 79)	
第十一圖	キジイルのパルメット並列文 (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , Fig. 34)	9
第十二圖	キジイルのパルメット環つなぎ文	10
a)	渡海洞 (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , Fig. 32)	
b)	餓鬼洞 (A. Grünwedel, <i>Alt buddhistische Kultstätten</i> , Fig. 390 c)	
c)	かぶと洞 (<i>Ibid.</i> , Fig. 167)	
第十三圖	敦煌唐草各種	10
a)	第120 N 洞 (P. Pelliot, <i>Touen-houang</i> , Pl. CCLIX)	
b)	第137 洞 (<i>Ibid.</i> , Pl. CCXCV)	
c)	第110 洞 (<i>Ibid.</i> , Pl. CXC)	
第十四圖	各種獸面	11
a)	漢銅器	
b)	雲岡第七洞	
c)	ガンダアラ石彫 (A. Foucher, <i>Ibid.</i> , Fig. 408)	
第十五圖	雲岡拱端禽獸形各種	11
a)	第十六洞	
b)	第十六洞	
c)	第六洞	
第十六圖	山嶽と樹木	12
a)	雲岡第十三洞明窓	
b)	敦煌第135 洞 (P. Pelliot, <i>Ibid.</i> , Pl. CCLXXX)	
c)	キジイル溪谷洞 (A. Grünwedel, <i>Alt-Kutscha</i> , Fig. 42)	
d)	中央アジア出土銀皿 (<i>Artibus Asiae</i> , X, Fig. 3)	
e)	金錯博山爐 (<i>Archives of the Chinese Art Society of America</i> , III, Fig. 1, 3, 4)	
f)	秦式鏡 (<i>Artibus Asiae</i> , X, Fig. 5)	
第十七圖	漢魏御蓋貴人畫像 (紹興畫像鏡)	13
第十八圖	漢代流雲文 (漢尙方流雲文鏡)	13
第十九圖	第七, 第八洞平面圖	15
第二十圖	第七洞 前室 東壁 浮彫本生圖 (長廣敏雄測, 北野正男圖)	16
第二十一圖	第七洞 明窓 東壁 横斷面圖 (長廣敏雄測, 北野正男圖)	18
第二十二圖	第七洞 明窓 東壁 比丘縱斷面圖 (長廣敏雄測, 北野正男圖)	19
第二十三圖	第七洞 主室 西壁 第二層北龕 右脇侍像 (北野正男測並圖)	24
第二十四圖	第七洞 主室 西壁 第三層北龕 交脚佛縱斷面 (岡崎卯一測, 北野正男圖)	25
第二十五圖	第七洞 主室 西壁 第二層北龕 坐佛縱斷面 (岡崎卯一測, 北野正男圖)	25
第二十六圖	第七洞 主室 西壁 第三層南龕 佛坐像 (北野正男測並圖)	26
第二十七圖	第七洞 主室 南壁 中央供養六天第四像 (北野正男測並圖)	28
第二十八圖	第七洞 主室 南壁 第三層西龕 佛坐像 (北野正男測並圖)	30

第二十九圖	第七洞 主室 南壁 第二層東龕 佛坐像 (岡崎卯一測,北野正男圖)	31
第三十圖	第七洞 主室 南壁 第二層西龕 佛坐像 (北野正男測並圖)	32
第三十一圖	第七洞 主室 天井飛天走向圖	34
第三十二圖—第三十四圖	第七洞 主室 天井 圖版說明圖	62, 63
第三十五圖	第七洞 主室 東壁 第一層北龕 復原圖 (北野正男圖)	79

序 章

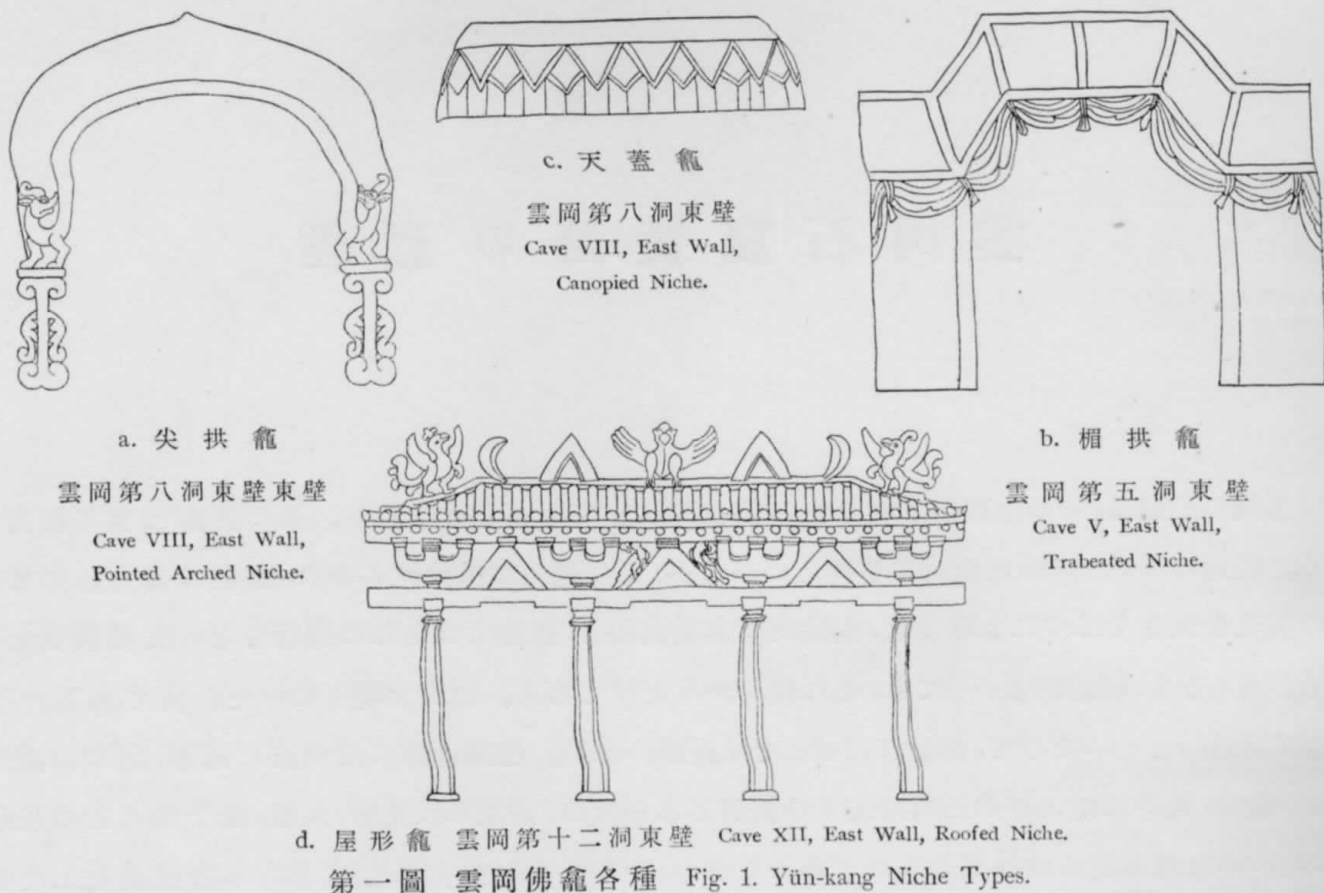
雲岡石窟裝飾の意義

1

雲岡の石窟は、その全面がさまざまな裝飾によってかざられてゐる。その裝飾は實に豊富である。裝飾のモチーフは比較的單純といへるが、その適用は柔軟性があり、變化に富む。いま石窟の裝飾を大きく二つにわけると、構造的な建築裝飾と、構造にはなんの關係もない文様裝飾となる。もつとも、構造的といつても、それはみかけだけである。岩山を鑿りぬいた石窟であるから、形態が構造的といふだけで、構造にはまったく關係がない。建築裝飾には周壁に龕形、洞口に龕形類似の裝飾、天井に格天井や三角持送りの裝飾があらはれ、佛像には光背、天蓋、獅子座などの莊嚴がつく。みな基本的には外來のものでありながら、いちじるしく中國化し、また木造建築化したのが目につく。文様裝飾には蓮華あり、唐草あり、動物あり、樹木、山嶽もあるが、壓倒的に多いのは蓮華、唐草文様であつて、はなはだしく中國化しながらも、なほ全體にあたへる印象は、充分に斬新であり、また異國적이다である。

建築裝飾の中核をなすものは佛龕である。佛龕は尖拱龕と楣拱龕とが、その基本形式であつて、そのヴァリエーションとして天蓋だけの佛龕もまゝある。¹⁾ 第九、第十洞にあらはれる屋形龕は、中國における新形式で、第七、第八洞にはまだあらはれてゐない。尖拱龕と楣拱龕の二つが、その基本形式であることは、すでにガンダラにおいても、あきらかに看取することができる。(Fig. 1)

尖拱龕の根源は、もとよりバラッパル丘のスタマ洞をはじめとする、インド石窟の洞口である。²⁾ そこには一般的に尖拱の、いはゆる蓮華拱がみとめられる。(Fig. 2) また、それがヴィハアラ窟の僧房入口をかざるものとして、並列してあらはされることもある。³⁾ それから、欄杆と結合して列龕意匠となり、その他の壁面に適用されることも多い。⁴⁾ しかし、こゝではまだ、尊像がおさめられるといふことは、めつたになつた。⁵⁾ 尊像をおさめて、文字どほり佛龕としたものは、ガンダラでは、塔基の各段に佛龕をならべるのがふつうであつた。その例は、⁶⁾ ^{Kaibar} カイバル峠の ^{Ali Masjid} アリ・マスジドの塔、それからハッダのかずかずの塔⁷⁾ にみとめられる。それにたゞの尖拱龕と三つ葉の尖拱龕とがある。⁸⁾ しかし、いづれも拱額の幅がせまい。そのなかは、せいぜいたるきのはしがでゝゐるか、鋸齒文のかざりがある程度である。拱端のまきかへつた例はあるが、それが唐草になったり、獸形になった



例は、ほとんどない。⁹⁾ たゞ鳥頭獸身になった例が、アフガニスタンのベグラムにちかいショットラクからでゝゐる。かうなると、雲岡の獸形、鳥形の拱端は、こゝからでたことになる。中央アジアにもこの例はない。しかし、キジルのものをみると、拱端を唐草にしたものがある。¹⁰⁾ またキジルの壁画では、拱額内をしきって、斜格子状のかざりをほどこし、拱額の幅のかなりひろいものがある。拱端に獸形、唐草をほどこしたことは、けっして中國における發明ではないが、拱額をひろくし、こゝに坐佛あるひは供養者の列像を作ったものは、まったく他にはない。中國獨特の尖拱額である。

楣拱龕も尖拱龕と相ならんで、ガンダアラ以來ある。Fig. 3 (a) はむしろ簡略化されたもの、(b) は柱をもった例である。(c) の複雑な方が、より原義的なものであらう。佛傳像の添景としてあら

1 佛像のあるところ天蓋があるから、佛龕やうにならぬ天蓋もあるわけである。しかし石窟では、まづ壁面をたひらにしてから、彫刻をはじめるので、天蓋を彫っただけ、佛像を彫りだしただけ、それだけの龕形ができるのである。

2 本書第六卷, Fig. 10 3 本書第六卷, Fig. 9

4 J. Fergusson and J. Burgess, *The Cave Temples of India*, London 1880, Pl. VIII, X, XV, XXVI.

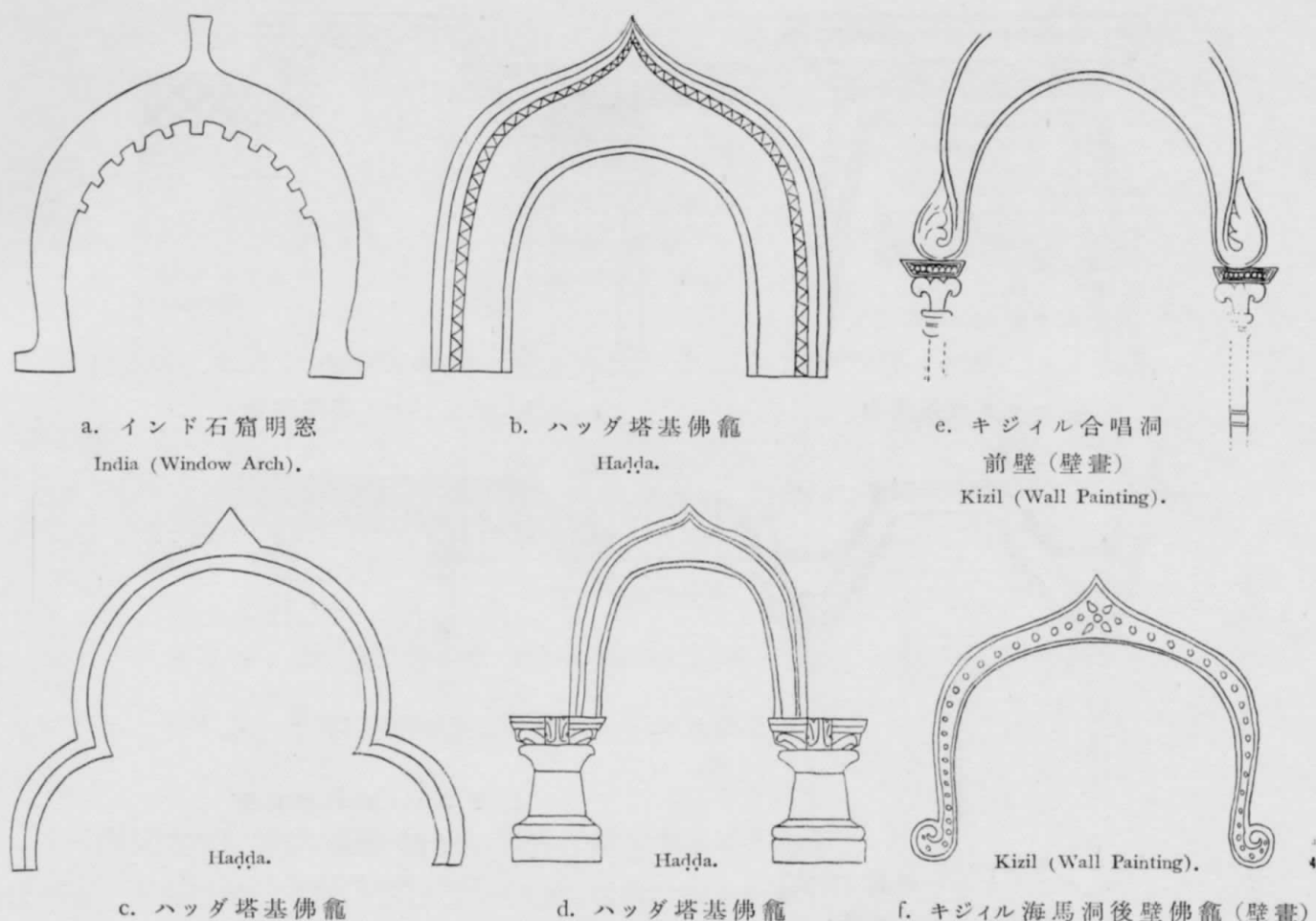
5 *Ibid.*, Pl. XI, XVII, XXVII. たゞパアルフットの欄楯の圓形飾には、尖拱の龕形があり、そのなかにすわった人物のおかれてゐるものがある。これは尊像ではないが、さういふものゝ先驅とかんがへられる。A. Cunningham, *The Stupa of Bhārhut, A Buddhist Monument ornamented with Numerous Sculptures*, London 1879, Pl. XXX 4.

6 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra*, Tome I, Paris 1905, Fig. 81.

7 J. Barthoux, *Les Fouilles de Hadāda* (Mémoires de la délégation archéologique Française en Afghanistan, Tome IV), Paris 1933, Fig. 123, 126, 138, 143, 150, 175. 8 A. Foucher, *Ibid.*, Fig. 323.

9 Jacques Meunié, *Shotarak* (Mémoires de la Délégation archéologique Française en Afghanistan, Tome X), Paris 1942, Pl. XV.

10 この龕細工のやうなかざりは、すでにガンダアラにもあるが、拱額に適用されたものはない。これはのち敦煌にはいり、龍門古陽洞にまでその傳統をみる。



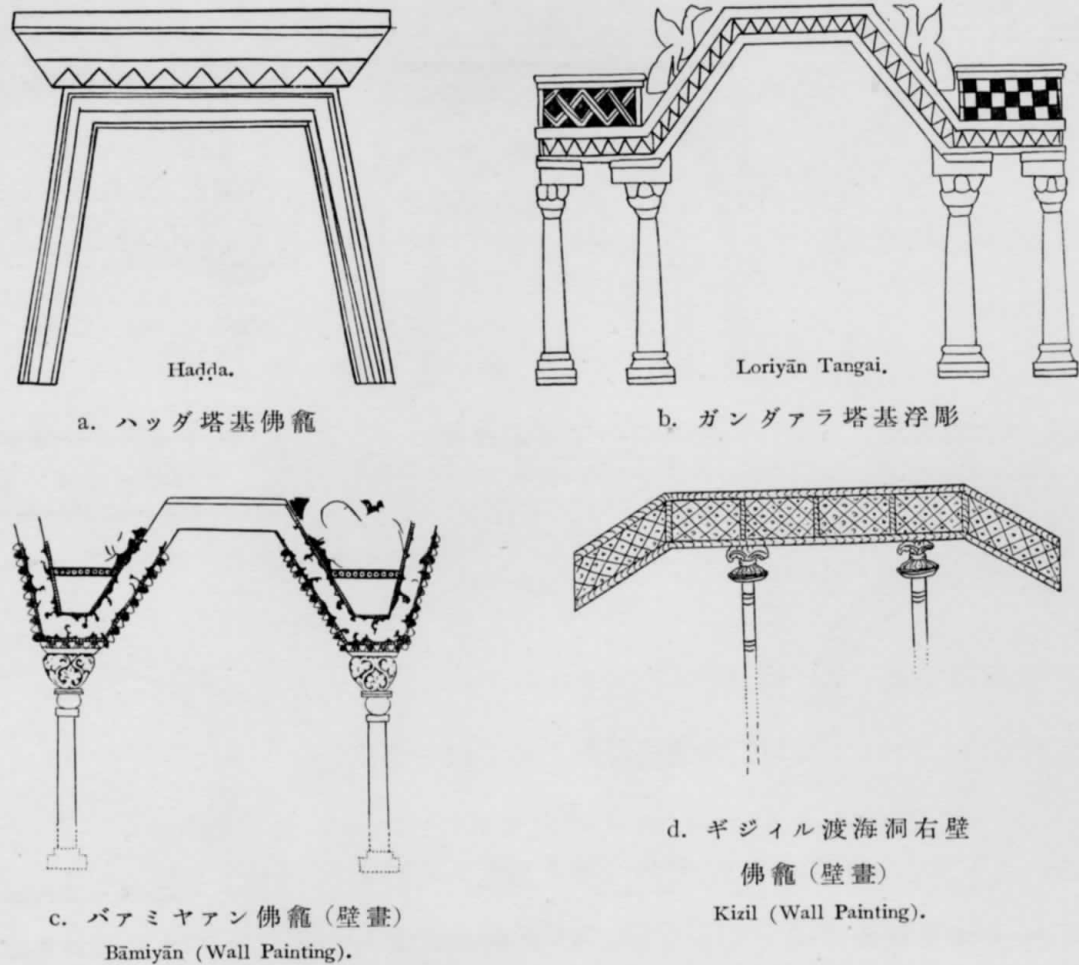
第二圖 各地尖拱龕 Fig. 2. Niches of Pointed Arch Type.

はされたときは、とくに屋内をあらはす場面である。屋外の場合には、これをもちひない。だから、なにかの建造物をあらはしてゐることは確實で、その中央の梯形は、なにか水平の突出部、あるいは、くぼみをパースペクティヴにみたものととられる。一種の遠近描寫法である。とくに中央アジアの壁畫の一例をみれば、このことは明白である。これにはしばしば、欄杆をもったバルコンと、そこから上身をあらはす人物像とを結合させてゐる。もとより、そのしたを柱でうけるのが、當然であるけれども、中央アジアにくると、柱はしばしば省略されてゐる。²⁾それは尖拱龕のばあひと同様である。そして拱額の幅はひろくなり、框にしきつたさまは、まったく雲岡と同様になり、その棧には連珠文のかざりさへみられるのである。しかし、こゝにも雲岡のやうに、飛天をいれたものはまだあらはれてゐない。

屋形龕は前述のごとく、中國における發生であるが、しかし、これもけつして突如として中國であらはれたものでなく、そのもとをいへば楣拱龕にある。楣拱龕は、さきにいったごとく、原義的には建造物をあらはすものであつた。楣拱は平頂の屋根、それをパースペクティヴにみたものである。

¹ A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Berlin 1920, Pl. XXII, XXIII, XXXIII. A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkestan*, Berlin 1912, Fig. 90, 91.

² A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Pl. IX, X. A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 90, 354.



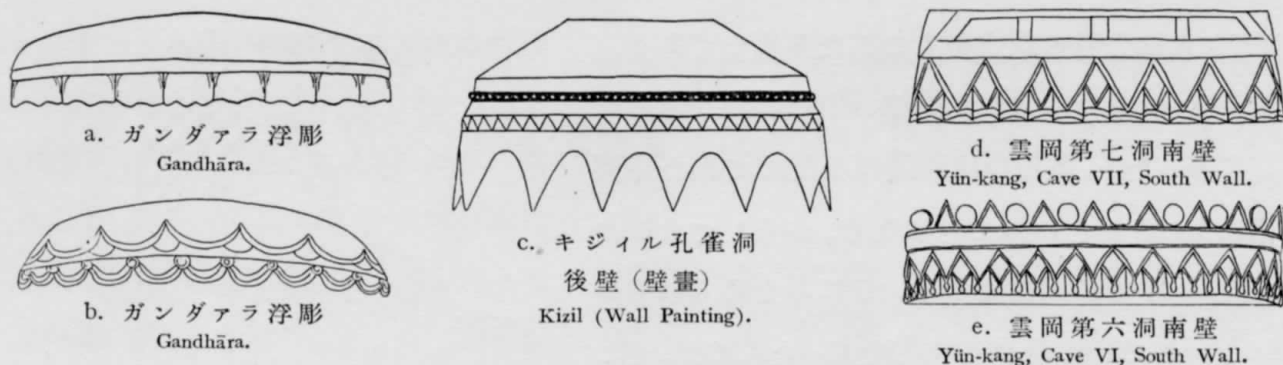
第三圖 各地楣拱龕 Fig. 3. Niches of Trabeated Type.

さうして、それはつねに傍柱をともなつてゐた。だから、その梯形にかへるに、中國の瓦屋根をもつてすれば、當然にかうなるのである。だから中國の新案といふよりは、翻案といった方がよい。

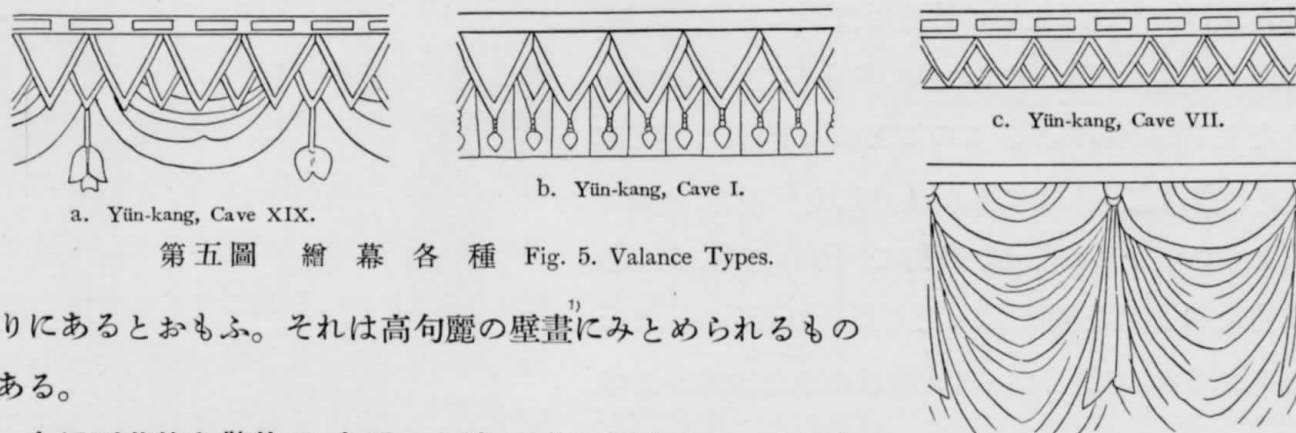
龕裝飾について問題になるのは、洞口裝飾である。第三十五洞、第三十九洞(塔洞)などは、半バルメット並列文の尖拱額をもつてゐるが、初期の洞口についてはよくわからない。西方でもインドの石窟以外は不明であり、中間に比較の資料がないことは残念である。しかし、その意匠は龕形の一つとみられるもので、ほとんど尖拱龕と同巧である。

天井裝飾の格天井は、傳來とも固有とも斷定できないが、三角持送り天井が、西方傳來のものであることは、第五卷(p. 31)でのべたとほりである。しかし、これも西方傳來のまゝでなく、ひとつは石に鑿りこんだために、またひとつには土著のものでないために、かなりの變改を餘儀なくされてゐる。

天蓋、光背になると、もとより佛菩薩に附隨したものであるから、西方的なのは當然である。いまガンダアラと、中央アジアの天蓋をならべてみると、雲岡の梯形にいちばんちかいものは、やはりキジイル孔雀洞の壁畫である。(Fig. 4) それが第六洞その他におけるやうに、葱頭と三角のかざりがついたのは、あきらかな中國化のあらはれて、そのもとづくところは、家屋の屋根、帳牀の屋頂か



第四圖 各地天蓋 Fig. 4. Canopies.



第五圖 繪幕各種 Fig. 5. Valance Types.

ざりにあるとおもふ。それは高句麗の壁畫に¹⁾みとめられるものである。

なほ天蓋的な裝飾が、各壁の上端、天井に接するところにあはれる。それは第十九洞、第五洞のやうに、弧形に幕をひきし²⁾ぼり、それに三角垂飾をくはへたものであったり、第七、第八洞のやうに、それを略したものであったりする。それは意匠において天蓋に似、意味において天蓋に似、たゞ適用したばしよが、ちがふのみである。これの石窟への適用は、すでにバミヤンの五十三メートル大像窟にみとめられる。こゝでは天蓋のやうな、三角垂飾がないだけである。(Fig. 5)

光背は、まるい圓光もあれば、舟形の舉身光もある。この第七、第八洞では、光背のなかに、なにも裝飾をほどこさないものが多い。たゞ、主室と前室との北壁に裝飾のある光背があるが、これはむしろ例外である。その他の洞では、おほむね豊富なかざり文様がある。外帯は火焰、まれには半バルメット並列文、内帯は禪定佛、あるひは飛天、あるひは火焰、さうして中心は蓮華である。光背が外來だといつても、はたしてかういふ光背はどこにあるだらうか。ガンダハラの光背はおほむね無地、たゞその末葉のアフガニスタン出土品に、鋸齒文を外縁にもち、あるひは火焰をもったものがある。³⁾(Fig. 6) もとより、鋸齒文にしても、火焰にしても、赫灼たる光明をあらはしたものである。しかも、それには圓光と、舉身光とをかさねた重光さへある。いつから、かういふ火焰がはじまったかは不明であるが、法顯がセイロン島、無畏山の青玉像について「七寶の炎光あり」といつてゐるの

¹⁾ 池内宏、梅原末治『通溝』、卷下、東京 1915、Pl. III, IV, XXXVIII. 葱頭の初見は雲岡あたりからで、それ以前の例をみないが、西方では楯拱龍のうへに圓拱龍形がならび、葱頭の起源をおもはすものがある。A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 90, 92. なほ本書、第七卷、Pl. 19 を参照せよ。

²⁾ J. Meunié, *Shotorak*, Pl. X, XI, XVI, XXI.

は、すでに火焰光背の成立をものがたるものである。さうすると、さういふ火焰光背が、西暦400年ごろのセイロンにあったか、あるひは法顯のみなれてゐた中國の佛像にあったかといふことになる。かうして火焰光背の成立は、すでに五世紀のインドにみとめられるかも知れないが、飛天、坐佛の内帶をもったものは、どこにもない。たゞ、さきにあげたアフガニスタンの光背 (Fig. 6) のやうに、火焰の外縁のほかに供養天人が、左右から二人むきあつてゐたり、坐佛が左右にすわつてゐたりする例がある。このことの可能性は、すでにハッダの龕内龕外上隅にあらはされた供養者、坐佛¹⁾などによつて祭せられるが、帶狀にかういふ像、あるひは坐佛をおさめた例は、まったくないのである。たゞ中央アジアも、南道のコウタン附近のラワク塔^{Rawak}および、^{Khādalik}カダリク廢寺からの塑像をみると、光背に火焰も坐佛もある。そのうへこの坐佛の背には、蓮華をおうてゐる²⁾。ラワクの塔は500年ごろ、カダリクの遺蹟は600年ごろのもの³⁾。いづれも雲岡よりはあたらしいけれども、中國の光背形式が逆に影響したとおもへない

から、その程度の坐佛、飛天、火焰、蓮華の結合は、すでに西方のどこかに、あつたものとみえる。しかし、それにしても、雲岡の光背にみるこれら各要素の緊密な構成は、中國獨特のものとおもはれる。たゞ、これが雲岡において突然できたものか、雲岡以前にすでにできあがつてゐたものかについては、のちの吟味をまちたい。

佛座については蓮華座^{padmāsana}があり、須彌座^{simhāsana}があり、獅子座⁴⁾がある。蓮華座も獅子座も、すでにガンダラからあり、獅子のみない、たゞの五成の須彌座もある。けれども、ガンダラに多かったのは、四脚の座牀式のもので、これは雲岡にない。たゞ、キジルの壁畫にみる方臺に縛のかゝつたやうな



第六圖 アフガニスタン佛立像
Fig. 6. Standing Statue of Buddha from Afghanistan
(Collection of Musée Guimet).

1 J. Barthoux, *Ibid.*, Fig. 123, 138.

2 A. Stein, *Ancient Khotan*, Oxford 1907, Pl. LXXXIII, LXXXVII. A. Stein, *Serindia*, Oxford 1921, Pl. XV, XVI.

3 ラワクの塔は3—7世紀と推定されてゐる。(Ancient Khotan, p. 501) しかし、この五銖を北魏の五銖とみ、500年ごろと推定する。カダリクの年代はむつかしいが、唐錢(開元通寶, 乾元重寶, 大暦元寶)が出土し、唐代まで存続したことはあきらかである。これら塑像の年代はやゝさかのぼるものかとおもふ。(Serindia, p. 159)

4 A. Foucher, *Ibid.*, Fig. 405, 406, 407, 408, 411, 412.

5 *Ibid.*, Fig. 421, 423, 424.

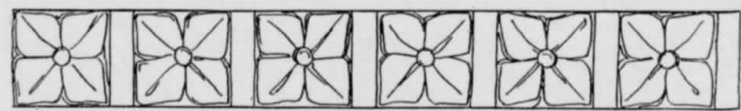
臺座は、まれにある。²⁾ 雲岡では五成の須彌座も、兩側の出入が、よりつよくなって、まさに須彌座の名にふさはしく、胴ぼそになってゐるし、獅子座もたんなる座牀の脚でなく、祠堂に侍する兩虎のごとく、完全³⁾に獨立した獅子像になってゐる。

2

裝飾文様は植物文様が旺盛で、動物文様はすくない。第七、第八洞でみるのは蓮華文、蓮瓣文、三つ葉四出文、三つ葉環つなぎ文、半パルメット波狀文、半パルメット並列文である。(本書、第五卷、Fig. 14) これらは單純で、西方的であるが、第九、第十洞になると環つなぎ文がさかんで、複雑になる。(第六卷、Fig. 28) それが第五、第六洞になると、もっぱら環つなぎ文の隆盛をみる。

蓮華文は、もとより佛教の當初からさかんで、あるときは佛降誕のシムボルとして、⁴⁾ またあるときはたゞ再生のシムボル、もしくはたゞ聖なる華として理解された。佛降誕のシムボルとしての蓮華は、インド本土以外ではあまり明瞭でない。しかし、蓮華の使用はけっしておとつてゐない。し

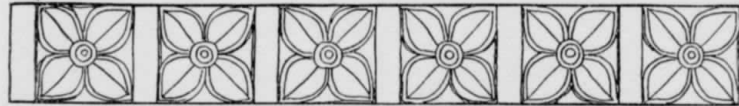
たがって、その變化も實に多いわけであるが、雲岡のごとく瓣がとがり、もりあがった二つの肉より



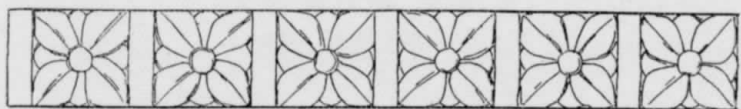
a. バールフウト Bārhit.



b. アマラヴァティ Amarāvati.



c. マツラ Mathurā.



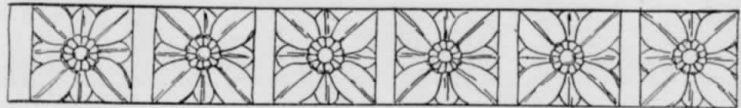
d. ガンダラ Gandhāra.



e. ベェグラーム Bēgrām.



f. ニヤ Niya.



g. ロウラン Lou-lan.

第七圖 各地方格蓮華文

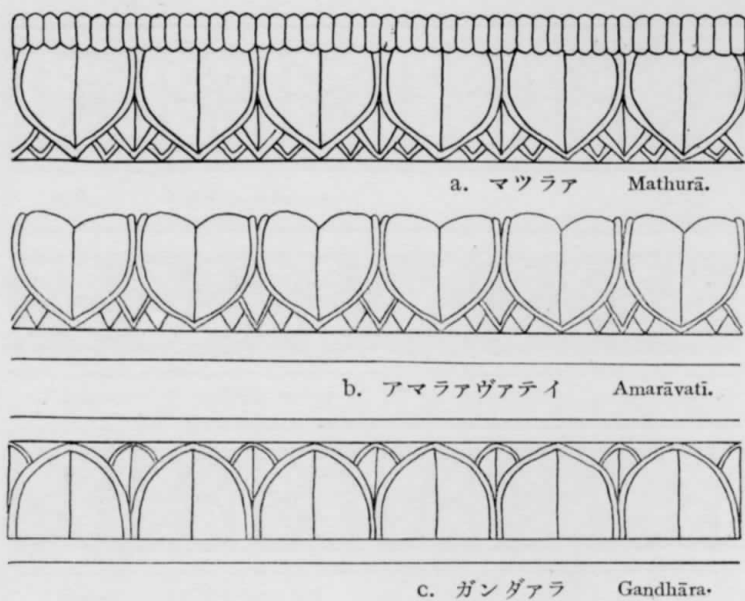
Fig. 7. Lotus Blossom Patterns.

1 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 339-341, 343-344, 350-353.

2 雲岡第十洞主室南壁第二層左右にある。本書、第七卷、Pl. 36, 37.

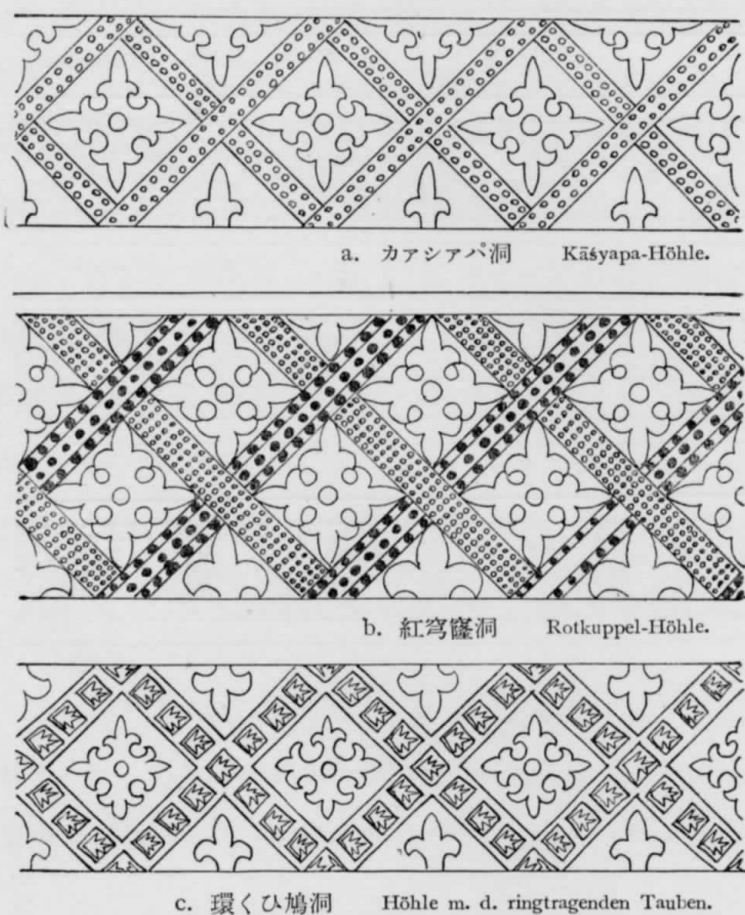
3 『列仙傳』(龍溪精舍叢書所收)によると、歷陽にあった彭祖の祠には兩虎が左右に侍つてゐたといふ。漢代以降の墳墓や祠堂に石獅子の配されるものがある。この問題については水野「六朝佛教藝術における漢代の傳統」(東洋史研究、第一卷、第四號)京都1936をみよ。

4 A. Foucher, *On the Iconography of the Buddha's Nativity*. (Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 46), Delhi 1934.



第八圖 各地蓮瓣文

Fig. 8. Lotus Petal Patterns.



第九圖 キジルの三つ葉四出文

Fig. 9. Kizil Patterns of Radiating Trefoils.

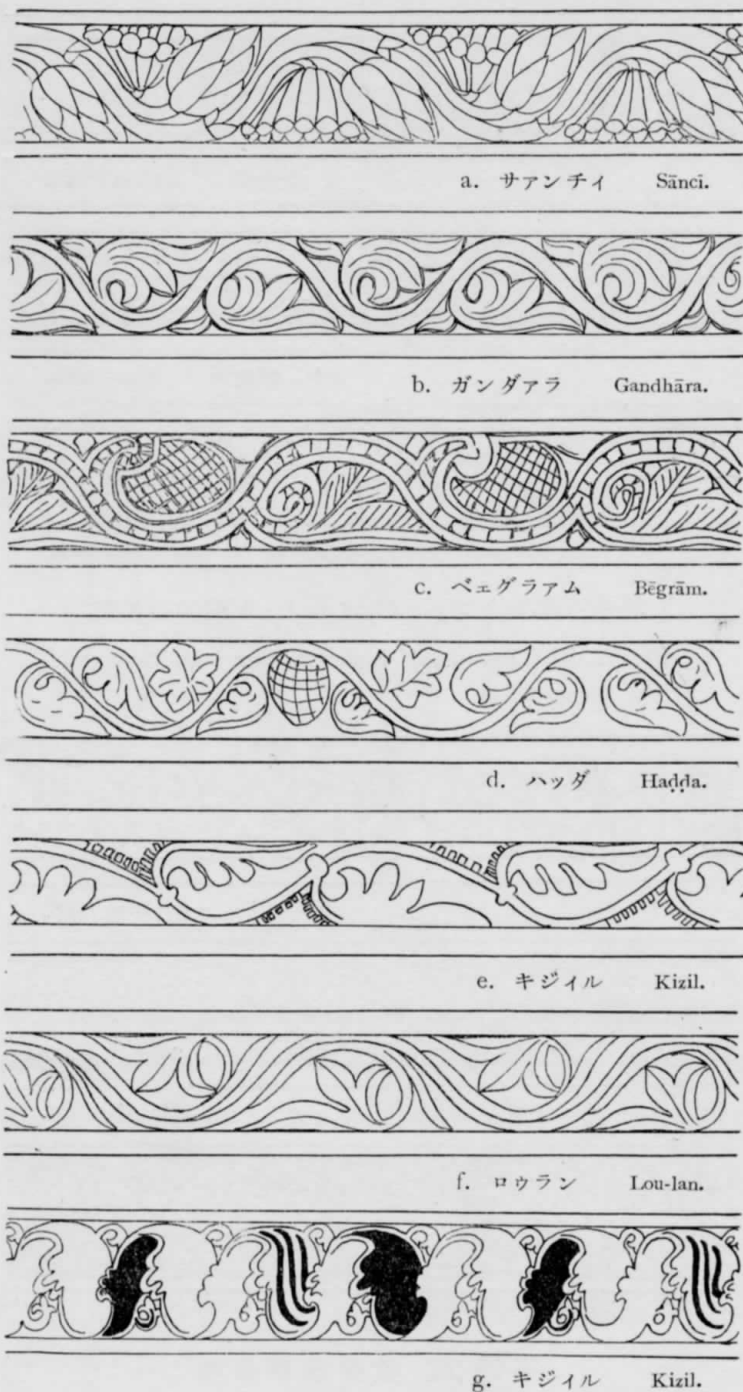
1 A. Stein, *Ancient Khotan*, Pl. LXXXVII. A. Stein, *Serindia*, Pl. VIII, IX, X.

2 ガンダラには垂下した蓮瓣文は臺座以外にほとんどない。蓮瓣文帯は、みな、うへにむかつてゐる。そしてアカンサス文帯と関係のあることをしめしてある。

なるものは、はたしてどこに由來するのであらうか。北道のキジル、クムトラの壁畫ではまるい瓣をみる。二つになった瓣は、インド以來往々あるけれども、肉のもりあがつたものは、南道コオタン附近のヨトカン、ラワク塔址、アクシル、アク・テレク、カラ・サイ等の塑像にみるのみである。これらの遺蹟の年代をきめることは困難であるが、中國からの逆影響は、こゝにかんがへがたいから、雲岡の蓮華文も、中央アジアの塑像に、そのもとをみとめるべきであらう。これに反し、正方形の框にもった正四角の蓮華文は、西方いたるところにみいだされる。バールフット、アマラヴァティ、マツラア、ガンダラ各地の石彫、ベエグラームの象牙細工、中央アジアのニヤ、ロウランの木彫にある。(Fig. 7) しかも、雲岡では第七洞とか、第八洞とか、西方の色彩のつよい石窟においてあらはれるのは、このかんたんな裝飾文様も、あきらかに西方の傳來にもとづくことをしめしてゐる。とともに、西方そのまゝでないことは、第七洞のばあひでも、第八洞のばあひでも、これに結合して斜蓮華文があらはされてゐて、もう一步すすんだ、こゝろみのあることを知る。(第五卷, Fig. 14) 帶狀の蓮瓣文も、西來の意匠であるが、その蓮瓣の特徴は、やはりまるい蓮華文にみたごとく、雲岡獨特であつて、またその適用のしかたがはでゝある。(Fig. 8)

三つ葉四出文は、ガンダアラにみないやうであるが、中央アジアのキジールには、さかんにでゝくる。(Fig. 9) かならず斜格子にしきられ、その方形内に對角線にはめられてゐる。織物の文様のごとくで、地文様になったものがある。帶狀になったものも、かならずなゝめの位置にすゑられてゐる。雲岡のは對角線におかれたことは、たしかにその系統をひくが、方形は、たいてい正位置におかれてゐる。

唐草の波狀文は、古くからインドにあった。サアンチの石刻などをみると、唐草といへないほど寫實的で、こまかく、また複雑である。ガンダアラの石刻になると、寫實的で細密なものゝほかに、簡素に便化されたものがある。これは波狀の空白のなかに、をれかへった葉が、雲岡の半パルメットにちかいかたちをとつてゐる。ペエグラアムの象牙彫りでは、かなりサアンチふうであるが、三葉からなる半パルメットの出現をみるし、ハッダのストッコでは、この半パルメットが葡萄の葉の側面形らしく解されてゐる。しかし、もともとはアカンサスの側面形といふべきもので、アカンサス正面形の半分である。といふか、ガンダアラで立體的なものが、その後は平面的になってしまふのである。そのことはガンダアラの石彫からはよくうかゞへる。中央アジアのキジールにもある。こゝでは半パルメット波狀文の第一形もあり、第二形もある。第一形といふのは、葉ををりかへしたものであり、第二形といふのは、葉のさきからつぎの葉がでゝゐるものである。(Fig. 10) かういふ便化された簡素な唐草は、むしろ後出の形式で



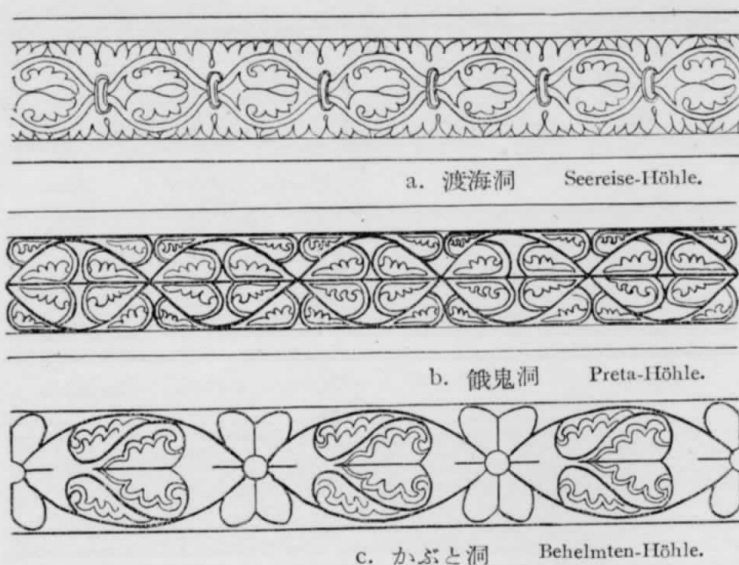
第十圖 波狀唐草文

Fig. 10. Wavy Floral Scroll Patterns.

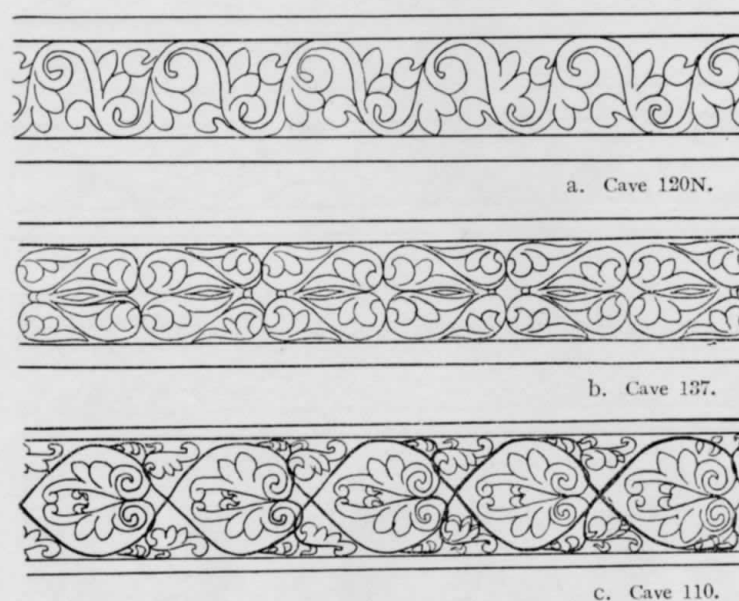


第十一圖 キジールのパルメット並列文

Fig. 11. Kizil Repeated Half-palmette Patterns.



第十二圖 キジルのパルメット環つなぎ文
Fig. 12. Kizil Patterns of Linked Circles with Palmette.



第十三圖 敦煌唐草各種
Fig. 13. Tun-huang, Floral Scroll Patterns.

あるが、そのあらはれが、すくなくとも二三世紀にさかのぼることは、ロウランの木彫にすでにこれを見るからである。かういふふうであるから、はたしてどのものが、直接影響をもったとはいへないが、キジルのものなどは形もよく似てゐるし、年代もちかいことが想起される。

半パルメットの並列文はすくないが、キジルの壁畫にはこれと調子のよく似たのがある。(Fig. 11) たとへば、海馬洞 Hippokampen-Höhle¹⁾、紅穹窿洞 Rotkuppel-Höhle²⁾のもので、充分に雲岡の原型を想像することができる。

つぎはパルメットの環つなぎ文である。キジルの壁畫では、よこつなぎの例がいくとほりもみられる。(Fig. 12) そこにはかなり複雑なものがあり、人物の頭部をはめこんだものさへある³⁾。第九、第十洞の禽獸人物をおさめた環つなぎ文の源流も、すでに西方にあることが知られる。かくのごとく、帶狀唐草文に關するかぎりには、中央アジアのキジル方面との關係が密接で、このあたりに、その直接の源がある感じがする。さらに、敦煌千佛洞の壁畫にも、キジルとおなじ波狀文の第二形

式、異式環つなぎ文のあることは注意されてよい。(Fig. 13) ことに前者は雲岡の波狀唐草に、かなりちかいのである。

さてかういふふうに、植物文様はひととほり、その源流を西方にみとめることができるが、動物文様になると、かならずしもさうではない。獅子は、もとより西來のものである。ことにアフガニスタンのショトラクからでた獅子像⁴⁾は、雲岡のものにかなりよく似てゐる。顎がかどぼり、鼻が大

1 A. Grünwedel, *Alt-Kutseha*, I, Fig. 34.

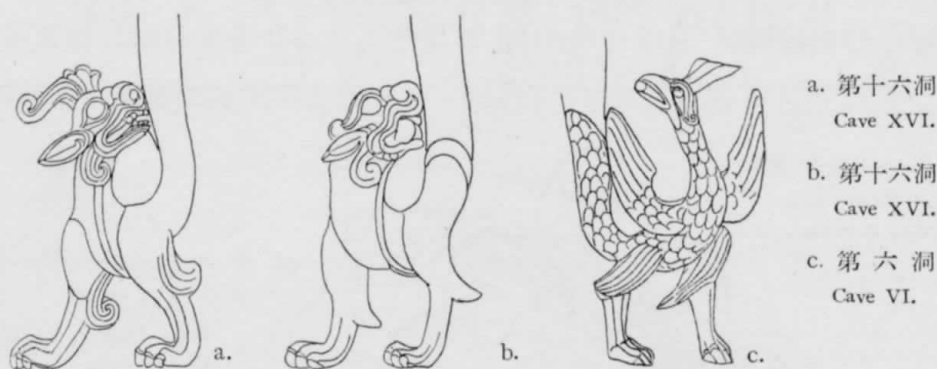
2 *Ibid.*, II, Fig. 79.

3 *Ibid.*, II, Fig. 33, 34.

4 J. Meunié, *Shotorak*, Pl. XXXIV.



第十四圖 各種獸面 Fig. 14. Animal Masks.



第十五圖 雲岡拱端禽獸形各種 Fig. 15. Yün-kang Animal- and Bird-Shaped Arch-ends.

きく、口のひらいたかっかうは、まさに雲岡の獅子の祖型たるをおもはす。しかし、獅子像はかならずしも、佛教藝術にはじまるものでなく、佛教をはなれて漢代から中國の藝術に、しばしばあらはされてゐた。そのよい例は山東省嘉祥縣武瞽山の武氏祠の獅子、それから南朝陵墓の獅子にみる¹⁾ことができる。それとともに、神獸鏡の神像兩側にそへられた獸形も無視できない。獅子以外、拱額の龍虎、禽鳥においては、まったく漢魏の傳統にもとづいた動物意匠である。(Fig. 15) これを西方にもとめて、似たものがない。また所々にあらはされる獸面にしても、漢魏傳統の獸面である。(Fig. 14) けっしてガンダハラその他でみられる獸面ではない。

もうひとつ問題になるのは、樹木と山嶽である。これをみて、すぐ想起されるものは、中央アジアのキジルの壁畫にみる山嶽と樹木である。これをみるものは、雲岡山嶽の源流がこゝにあるといふが、ひるがへつて、漢魏の鏡鑑、博山爐の意匠、織物文様の山嶽、樹木をみるものは、またそれからの傳統であると主張するであらう。(Fig. 16) いま、そのいづれとも、一方的にかんがへることは正しくあるまい。かういふ漢魏の傳統をうけながら、なほかつキジルあたりの繪の影響をつよくうけたものと察せられる。いま、これをガンダハラの帝釋問法像などにみる山容樹木に比較してみ

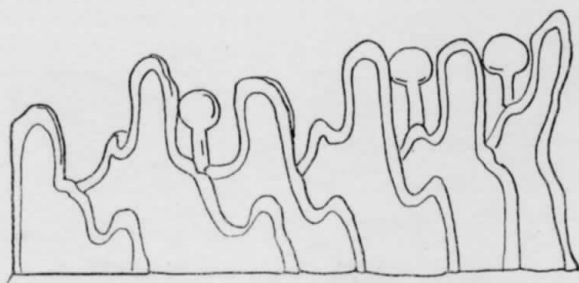
1 關野貞『山東省に於ける漢代墳墓表飾』Pl. XXII.『六朝陵墓調查報告』(中央古物保管委員會調查報告, 第一輯)南京1935年刊。

2 『桃華龕古鏡圖錄』京都1924年刊, Pl. 40.

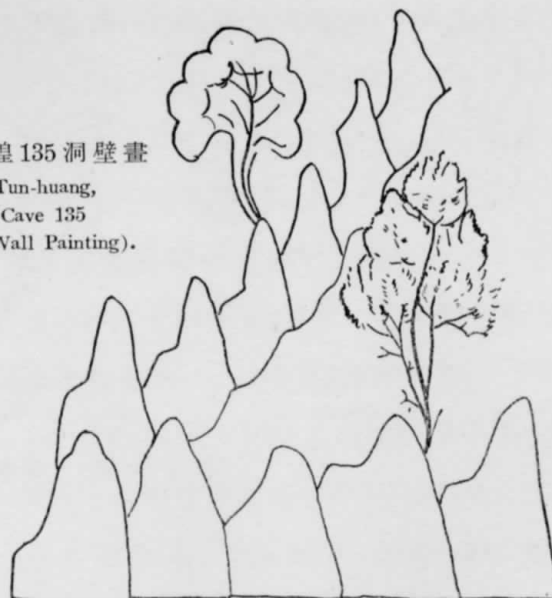
3 A. Stein, *Innermost Asia*, Oxford 1928, Pl. XXXIV.

4 A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 246.

a. 雲岡第十三洞明窓浮彫
Yün-kang, Cave XIII,
Window.



b. 敦煌135洞壁畫
Tun-huang,
Cave 135
(Wall Painting).



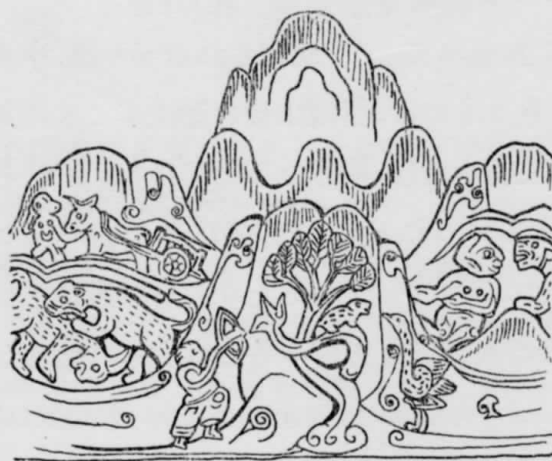
c. キジイル溪谷洞 壁畫
Kizil, Ravine Cave
(Wall Painting).



d. 中央アジア出土
イラン系銀皿
Silver Dish,
Central Asia.



e. 金錯博山爐
Bronze Censer of Po-shan-lu Type.



f. 秦式鏡
Ch'in Bronze
Mirror.



第十六圖 山嶽と樹木 Fig. 16. Representations of Mountains and Trees.

ると、その寫實的な表現との差がいちじるしい。

3

さて以上の個々の比較を総合すると、雲岡の裝飾は、インド本土の佛教裝飾モチーフのながれをくみながらも、その表現法はインド本土よりはガンダラに、ガンダラよりは中央アジアに、よりちかいのである。したがって、雲岡石窟に直接の影響をあたへたものは、やはり地理的にちかい中央アジアの諸寺院だとみるべきであらう。それにしても、かうした裝飾は、雲岡石窟にはじまったものかどうか、これ以前、佛教傳來このかたの、ながい経過にどう推移したものであらうか。今日われわれは、佛教の裝飾意匠に馴れすぎてゐる。けれども、そのむかし、殷周青銅器の饕餮雷文、秦漢魏晉の神仙、禽獸、雲氣文の傳統にそだったひとびとには、ひじゃうにあたらしい、そして異國的



第十七圖 漢魏御蓋貴人畫像
(紹興畫像鏡)

Fig. 17. Canopied Figures
on the Han Bronze Mirror.



漢尙方流雲文鏡

第十八圖 漢代流雲文
Fig. 18. Cloud Scroll Pattern
on the Han Bronze Mirror.

な感動をひきおこしたにちがひない。しかし、そのはじめ、一二世紀の佛教裝飾については、たゞ桓帝が老子^{Buddha}、浮屠のまつりに華蓋をもちひたといふことだけで、それ以外は、まったくなにも知られないのである。華蓋については、神獸鏡などの畫像¹⁾から、また馬車にとりつけられた²⁾金華爪の車蓋から、いちおうは、その形も想像されるのである。中國でも尊貴の人には、つねに蓋がさしかけられてゐて(Fig. 17)、周公輔政圖の成王のうへに蓋のあることは、よくひとの知るところである。要するに尊貴の人たちの調度を取りきたって、それを佛の莊嚴として附加したのである。その意圖するところは、もとよりおなじであるが、形式はかならずしも同一ではなかったかも知れない。しかし、そ

1 後藤守一編『古鏡聚英』上篇、東京1942年刊、Pl. 49(4, 5, 7, 8.). 原田淑人等『樂浪』東京1930年刊、Pl. LVIII.

2 關野貞等『樂浪郡時代の遺蹟』下卷、東京1925年刊、Pl. 192.

3 關野貞『漢代墳墓の表飾』Pl. 59, 89, 110.

れにしても、だんだん西方ふうなものが勢力をしめていったことは、やゝおそい例であるが、和平元年(A. D. 460)の佛像銅板¹⁾にある天蓋が、まったくキジイルふうであることからいへる。

しかし、いづれにしても、佛教に關する造營がやうやくさかんになったのは、三四世紀以後、とくに四世紀以後であらう。このながい年數のあひだに、徐々に、その西來の意匠が浸透していったのである。四世紀の例としては、金銅佛の獅子座、博山爐、それから五世紀前半にさかのぼるものとして、半パルメットの並列文、半パルメットの波狀文の成立、また火焰光背の確立などを指摘することができる²⁾。

要するに、佛教藝術の輸入は、古代中國美術の潮流に、大きな革命的變化をおこしたのである。あたらしい信仰と思想による彫像の流行、それにともなふ各種の莊嚴、またこれをいれる建造物、さういふものが、徐々におこり、こゝ雲岡において、その初期のクライマックスがしめされてゐるのである。なかでも、こゝにあらはれる植物文様の意義は大きい。周漢以來、あれだけ旺盛をきはめた、動物文にかはる植物文がこゝにあらはれ、以後はこれが文様界の主流となつてしまつたのである³⁾。

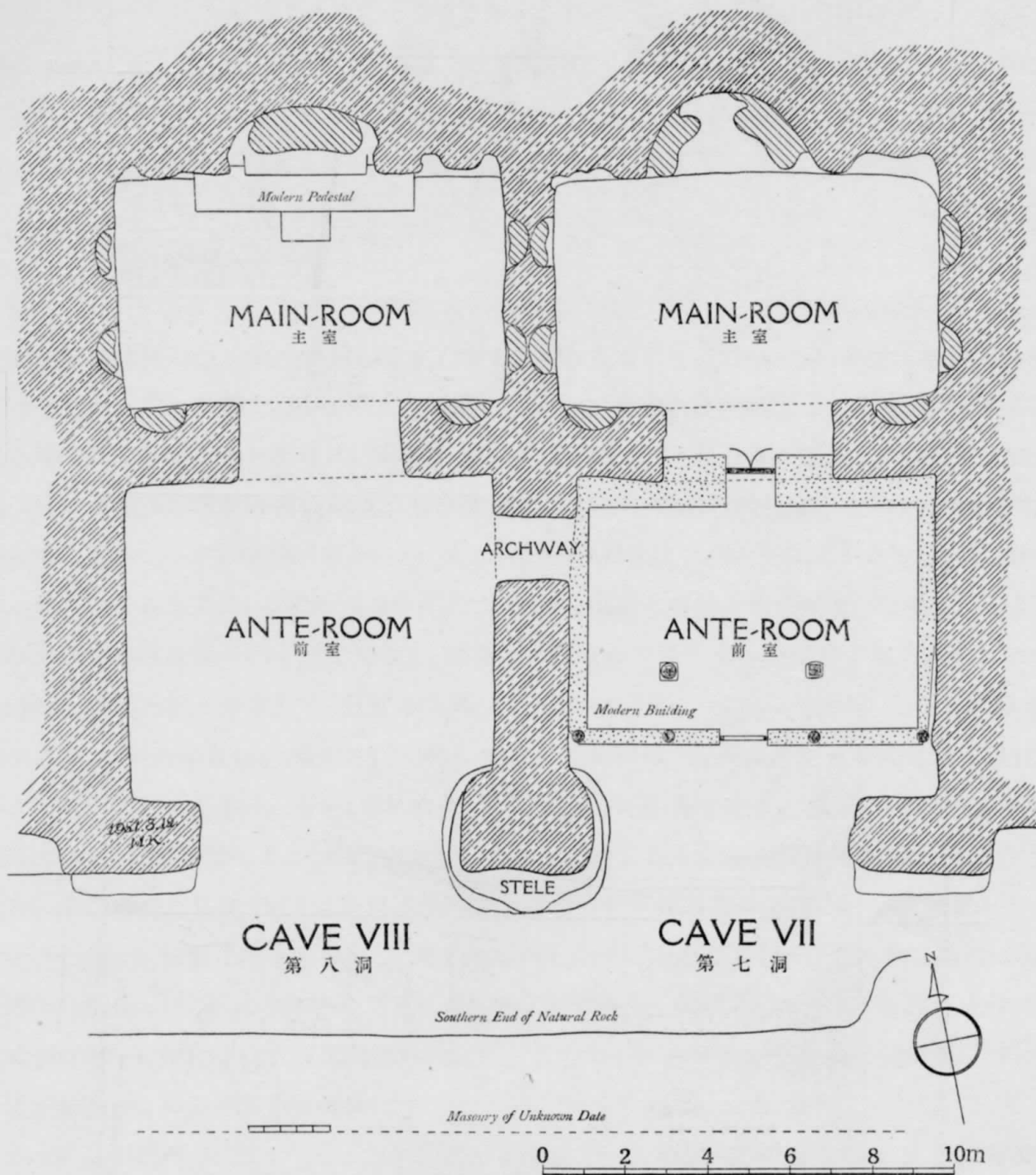
しかし、文化——裝飾もその文化の顯現である——の傳播は、商品の輸出のやうに、内容から外装までそのまゝのものが、各地にひろがるといふやうなものではない。それは、ところをかへる傳播であるとも、すがたをかへてゆく變容でもある。佛像のことはしばらくおくが、佛教建造物は、石と土から、すっかり木にうつしかへられたのである。中國式の宮殿建築が、すっかり佛教の寺院になつてしまつたのである。そのことが、石窟の構造的な裝飾に、いつも大きな影響力をふるつてゐる。第九、第十洞以後の屋形龕の出現などは、その顯著なものである。そして一方、漢魏の傳統として中國式の龍虎、禽鳥がくはゝつてきて、香を焚く博山爐がまた佛具としてとりいれられる。したがって、いかに西方的で、中國にとってまったく新規な植物文といへども、ある程度までの中國化は、まぬがれぬところである。それは單純になつたこと、抽象的なシルエット形式に凝固したこと、それは一面漢鏡の外縁文様にもどることであつた。(Fig. 18) 第九、第十洞以後で、多少複雑化の方向をとるとしても、このシルエット的な半パルメットの基本單位は、そのまゝうけつがれてゆき、また、こゝにも、中國的な禽獸が附加されてゐるのである。

なんといつても、雲岡石窟裝飾の大きな意義は、こゝであたらしい佛教美術のジャンルを確立したことであり、以後それは佛教美術の埒内をはるかにのりこえて、あらゆる造形美術の面に展開していったことである。そのやうな佛教美術の浸透力は、この時代の美術にさけがたい一つの基本的な色調を染めつけたのである。

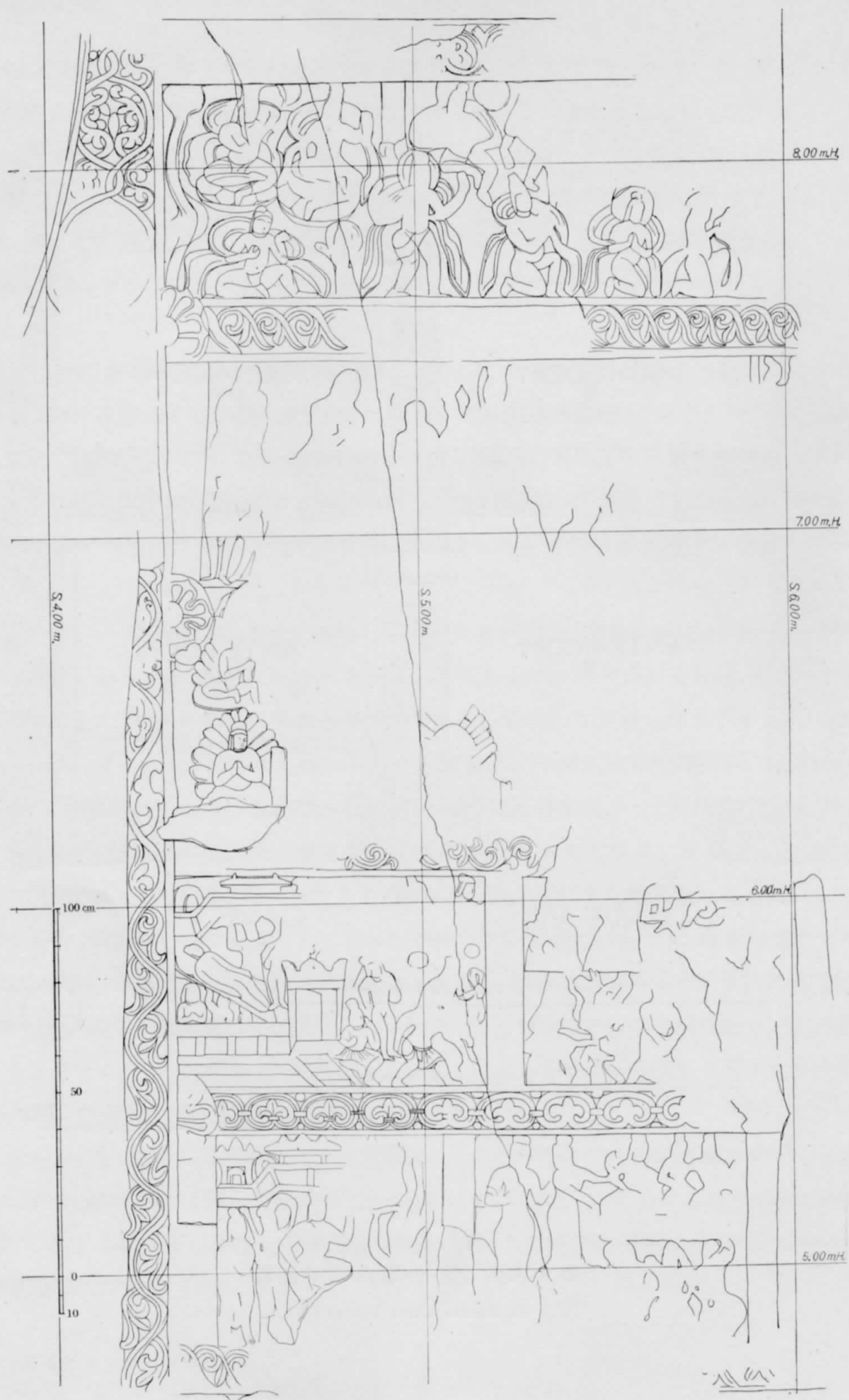
1 人文科學研究所 考古資料 5964。

2 水野「中國における佛像のはじまり」(佛教藝術、第七冊)大阪1950年刊、Fig. 11。

3 長廣『大同石佛藝術論』京都1946年刊、p. 117—174。



第十九圖 第七,第八洞平面圖
 Fig. 19. Plan of Caves VII and VIII.



第二十圖 第七洞 前室 東壁 浮彫本生
Fig. 20. Cave VII, Ante-Room, East Wall, Jātaka Reliefs.

第七洞

第一章 前室

第七洞は西隣の第八洞と一對をなす石窟である。このことについては、すでに本書第五巻において詳述した。たゞ外觀上、第七洞は第八洞とちがって、前室に木造樓閣がいまなほたっている。これは三層樓閣である。その初層に「西來第一山」の扁額がかゝっている。建築は明清時代のもので、扁額は清朝世祖順治帝の御書である。この種の樓閣は、かつて第八洞前室にもあったが、その方は壊滅してしまった。木造樓閣があるため、第七洞前室の調査はいろいろな困難があった。壁面が土で塗りこめられてゐること、木造の天井や梁桁があつて、撮影その他の障碍になったこと。しかし、そのためか風化の度は第八洞よりすくなく、壁面の浮彫はわりによく保存されてゐる。(Pl. 1, Plan II)

〔前室〕 第八洞とおなじく、前室と主室とからなつてゐる。主室は長方形、その南にある前室はほぼ方形で、天井がない。東西の幅8.80m、南北の幅8.00m。前壁にあたるものはなく、自然門口といったやうなものはない。たゞ、南にむかつて口をひらくのみである。前室と主室とのあひだの拱門には、いま土壁をつくり、それにせまい戸口をもうけてゐる。西壁は第八洞前室東壁のうらにあたる。この南端は柱狀を呈し、その基部には大きな獸形を彫りだしてゐる。いま風化しきつた巨大なブロックから推察されるところは、大きな石碑と龜趺である。これに對し、東壁南端は第八洞西壁南端と相應じ、同形式の大きなブロックが聳立してゐる。破損はひどいが、五層または七層の塔形であつたらしい。この塔の東は第六洞の外壁になり、そこにはまた第五、第六洞の外壁裝飾である塔形がたつてゐる。(Pl. 2-3, Plan 1)

かういふわけで、南壁といひうるものは西端の碑形のうらと、東端の塔形のうらとがあるのみで、どちらも幅2.00mたらずのものである。外壁は一見、左右不そろひのやうであるが、第八洞と綜合してかんがへると、みごとな左右相稱になる。要するに、前室はたゞ東西北の三壁からなり、南はひろい吹きはなしである。東西北の三壁とも、木造樓閣の初層にあたるところは、壁土でおほはれてゐる。第二層以上は、破損のためかどうかわからぬが、壁土がない。破損しながらも、もとの浮彫があちこちにあらはれてゐる。

〔前室東壁〕 土を塗つた東壁下層の腰壁は、第八洞西壁から推定して、俗體の供養者列像二段と、せまい天人供養者一段であるとおもはれる。上層は數段からなる水平の畫像帶である。全貌

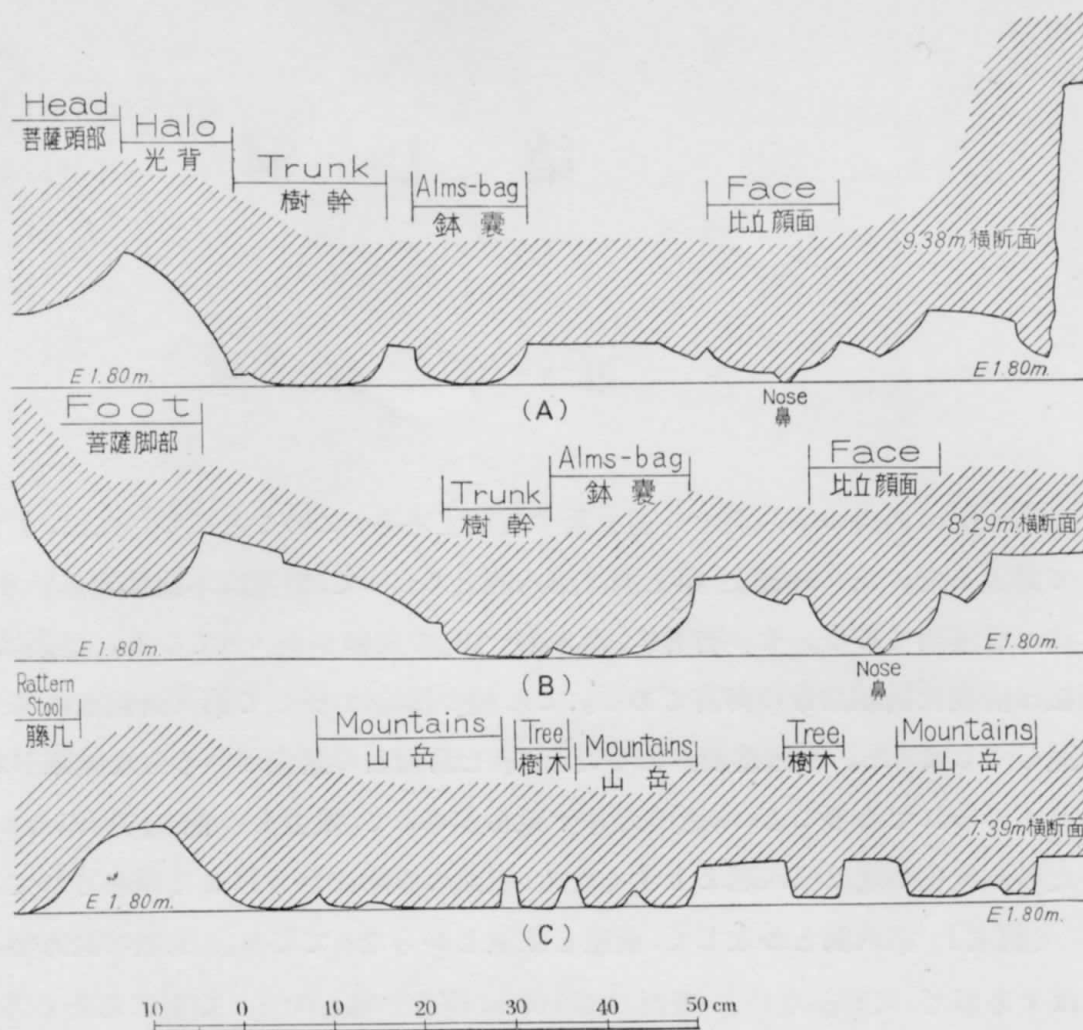
は樓閣のためわからないが、第八洞西壁からほぼ推測できる。細部は第八洞より、はるかによくのこっている。各段のしきりには、三葉環つなぎ文、半パルメット波状文、半パルメット並列文の三種の唐草文帯がつかはれてゐる。第八洞でも、おそらくおなじであつたものとおもはれる。各段高さはほぼ 0.60m、すくなくとも十一段以上あつたことがわか

る。畫像の内容は、みな本生談であつて、その一はムッガパッカ(墓魄)の本生談であるらしい。(Pl. 3B-8, Plan IV, Fig. 20)

〔前室西壁〕 全壁が千佛龕よりなる。上下兩端が木造建築にかくれ、わづかに十四段がみとめられる。しかし、全貌は第八洞東壁から察せられる。すなはち、地上約 3.00m から佛龕がはじまり、段ごとに二十四個、それが十八段ある。佛龕は高さは 0.55m。上下、左右と中央の五個所に、やや大きな佛龕がある。これは高さ 1.10m、中央は一尊の交脚佛、四方は三尊形式の坐佛である。千佛下方の供養者列像は、いま土壁の下にあつて、全然みえない。(Pl. 9, 10, Plan V)

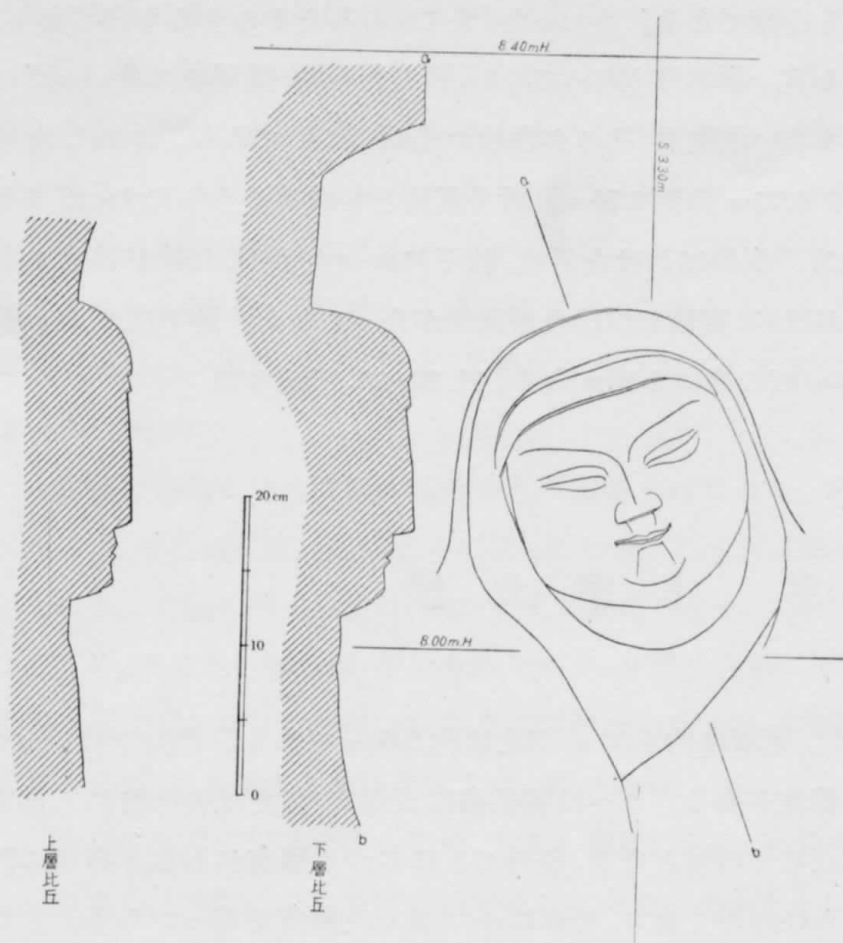
北壁にちかく、第八洞に通ずる隧道がある。天井は飛天のさげの大蓮華、側壁には樹葉のしげた立木を彫つてゐる。(第五卷, Pl. 8, 9)

〔前室北壁〕 正面上方に明窓、下方に門口をひらく。門口は、いま土壁に塗りこめられてゐるが、高さ 5.20m、幅 4.00m あり、うへはアッチ状を呈してゐる。門口アッチより、さらに 2.60m うへに、明窓の下ばがある。明窓は高さ 3.80m、幅 3.60m のアッチである。たゞしアッチの上端は、木



第二十一圖 第七洞 明窓東壁 横断面圖

Fig. 21. Cave VII, Window, Horizontal Sections of East Reveal.



第二十二圖 第七洞 明窓東壁 比丘縦断面圖

Fig. 22. Cave VII, Window, Monks on East Reveal.

造建築にさへぎられて、前室の方からはみえない。(Pl. 11, Plan III)

明窓の左右には、高さ 2.80m ばかりの立像が、上下二段に彫られてゐる。うへの像は、木造天井により、頭部がすこしかくれてゐる。火焰の舉身光につままれてゐるが、すっかりこはれて、輪郭がやっとたどれる程度である。たぶん佛像であらう。したの像は肩の天衣のみがみえる。頭部のやうすでは、寶冠があるやうだから、菩薩の立像であらう。この二段の立像のしたに、左右それぞれ多面多臂の神像がある。まったく壊滅にちかい状態であるが、手の六本あること、すわってゐることがわかる。このほいおなじ高さに、門口左右の多面多臂像がある。この第七洞前室の保存状態は、だしかに第八洞

よりよい。これによって、第八洞の状態をおぎなふことができる。(Pl. 12, 13)

〔拱門〕 拱門側壁の幅は、復原すると約 1.86m になる。側壁の頂上中央に、直径 0.90m の大蓮華があり、それをめぐって二體づきの飛天が彫つてあるが、南がはの飛天はほとんど全壊してゐる。アチにそつてしたにくだと、さらに二體の飛天が左右にならんでゐる。そのしたに、多面多臂の神像がすわってゐる。高さ約 1.75m。第八洞とちがひ、牛にも鳥にもものつてゐない。なに神であるかの見當はつかないが、まことに瑞々しい像である。この像のしたに門神がたつてゐる。高さ約 2.25m、逆髪形で、第八洞の門神とはかなりちがつてゐる。門神のうちがは、主室のかどに重層柱がある。その高さ 2.80m。したに高さ 1.85m の立像がある。これは立ちあがつてゐるので、やゝ異様だが、両手をさしあげて、層柱をさゝげた侏儒像である。かどにあるから、層柱の側面は主室南壁にあらはれて、立體的層柱として、門口東西に呼應してゐる。たゞおしいことに、下層の 3.00m ほどは、ひどく溶けさつてゐる。(Pl. 14-22, Plan VI)

〔明窓〕 高さ 3.80m、幅 3.60m。だいたい第八洞とおなじ大きさである。側壁の意匠も、第八洞と同様である。たゞ第八洞では、石づみがあつて、一目にみられなかったが、こゝでは全貌が一度に

うかゞへる。側壁のねもとは、重疊たる山嶽である。うねった「たこ」のあたまのやうな峰である。そのうへに、大きな樹木が一本はえてゐる。樹木はうねってのび、枝をわかち、側壁の天井いっぱいにしげり、拱頂で相接してゐる。葉はまるい潤葉形、それが各枝の先端についてゐる。木のしたは二段になって、禪定の比丘がある。高さ 0.72m 乃至 0.76m。両手兩足とも大衣のうちにすっぽりとつゝみ、しづかに瞑想してゐる。(Fig. 22) 樹枝にかけた鉢囊、牀下においた水瓶、長靴が注意をひく。(Fig. 21) 樹幹に接して、そのうちがはに、寶冠をつけた菩薩像がたつてゐる。足下にたかい籐几をふんでゐる。高さ、東の像は 2.00m、西の像は 2.10m ある。(Pl. 23-27, Plan VII)

第二章 主室北壁

〔主室〕 主室平面は長方形である。東西は約 9.30m、南北は約 5.60m である。門口をはいつて北壁正面をみると、上下二層に大きな佛龕がある。うへは楣拱龕に五尊像、したは尖拱龕に二佛並坐像がある。左右の東西兩壁は、規則正しく四層となり、各層ごとに二つの佛龕がある。南壁の門口と明窓の左右は、東西壁の層位にならひ四層となり、それに一つづゝの佛龕を彫つてゐる。したがつて、東西南の三壁に、總數二十四の同形同大の佛龕がある。天井は長方形で、格天井になり、六つの格間にわかれてゐる。格間と梁には、第八洞同様に蓮華と飛天とをすきまなく彫りつけてゐる。保存状態は、一般に北壁がわるい。それは背後が山について、水分が浸透してくるからである。東西南の三壁は、山からいちおう隔離されてゐるので、下層をのぞけば、だいたいよく保存されてゐる。(Plan I, II)

〔主室北室〕 北壁は全高 12.66m ある。6.20m の高さを境として、上層下層にわかれてゐる。各壁とも、うへになるほど壁の幅がせまくなるのは、第八洞とおなじである。北壁は床の面で幅 9.30m、上層の床の面で 8.60m、天井の接觸部でほゞ 6.00m となる。(Pl. 28, 29, Plan VIII)

〔下層大龕〕 中央に尖拱龕をまうけ、その左右に立像の龕がある。中央尖拱龕は、まづ高さ 1.20m の壇をつくる。龕内の高さは 3.66m、幅は 4.60m、深さは 2.20m ある。そのなかに高さ 3.40m の佛像二體を並坐させてゐる。つまり二佛並坐像である。『法華經』卷十一、「見寶塔品」にみる多寶 ^{Prabūtaratna} Buddha Śākyamuni Buddha 佛と釋迦牟尼佛とである。大部分はとけてゐるが、兩手をくんで膝のうへにおいてゐることはわかる。兩坐佛の中間、光背のあひだに二體の天人像が、せまい臺座のうへにたつて、横笛をふいてゐる。本尊佛龕の左右には、高さ 3.00m ほどの佛龕があり、それぞれ、なかに菩薩立像を彫つてゐる。溶解がひどいので、ほとんど形態をわかちがたい。佛龕西がはのうへに一群の走獸がみえ、すこし西壁にまでまはつてゐる。しかし、なんの場面かわからない。第八洞ではこの部分に佛傳畫像があ

った。あるひは、本生畫像であるかも知れない。(Pl. 30, 31)

〔上層大龕〕 楣拱龕のうちに五尊像を彫ってゐる。龕のふかさ 1.80m。中央に寶冠をつけた交脚菩薩、左右に接して倚坐の佛がある。この兩翼、やゝ間をおいて、うちがはにむかった半跏思惟像がある。これは、ま正面からみると、龕の帳幕のかげにかくれてしまふことになる。(Pl. 32)

中央の交脚菩薩は高さ 4.80m、小さなまるい臺座に兩足をのせてゐる。たぶん蓮華趺であつたらう。胸から腹、膝、下肢にかけて泥修の衣がみられる。しかし、兩手はよくのこり、すぐれた彫刻がうつくしい。兩膝のしたには、丸彫にちかい獅子の彫刻があつて、漢以來の古風な様式が力づよい。(Pl. 33-37)

左脇の佛倚坐像は圓形の蓮座のうへに彫られてゐる。高さ 4.00m、頭部、左肩、胸、腹は破壊してゐるが、そのほかは比較的よくのこつてゐる。頭上には頭髮の彫りはなく、顔はまるい。偏袒右肩である。右脇の佛倚坐像は、これと丈をおなじくし、おなじ姿勢であるが、破壊の度は一層はなはだしく、そのため補修は、手足をのぞいて、身體の各部におよんでゐる。兩隅の半跏思惟像は、倚坐佛の肩までの高さしかない。大きな寶冠をいたゞき、半跏思惟の姿勢である。二つとも同一形式であるが、右の像がより保存がよい。(Pl. 38-41)

光背は本尊交脚菩薩のものが、大きく龕底にあり、脇佛の舉身光が半分かさなつたやうに、その左右にある。半跏像の光背は明瞭でない。たとへあつたとしても餘地がないから、ほんのその一部分が、あらはされる程度であつたとおもはれる。本尊光背の頂上には、弧狀のおほひがあつた。これも西方傳來の形式で、たぶん光背をおほふ龕形、あるひは花葉よりの變化とおもはれる¹⁾。その複雑な西方的な波狀唐草が注意される。この光背は、内區に飛天と坐佛の二帶があり、外區に火焰、中心に蓮華文がある。しかし、その左右の蓮瓣をみると、瓣の大きさがかなりちがつてゐる。これは左半と右半が別々の作家によつたからだとおもはれる。さういふちがひは、また、左右の倚坐佛にもみとめられる。この兩者はよく似てゐるのであるが、それでも右の佛はよりゆたかであり、左の佛はやゝ肉がそげてゐる。まったく別人の手になつたことを暗示してゐるとおもふ。左右脇佛の光背も、火焰のふちをもち、飛天もしくは坐佛の内帶をもち、蓮華の中心をもつてゐる。

さて、これら北壁上層の五尊像の彫法であるが、頭部は壁面から充分に突出し、手足も背面から完全にうきだし、まったく丸彫のごとくである。彫刻の表面は、どの部分もなめらかにみがゝれてゐたらしい。細部は、みごとに寫實的にできてゐるが、肉體的な、なまなましさをたくみに抑制し、簡潔、素朴な表現に徹してゐる。

〔上層楣拱額〕 楣拱額は第八洞とおなじく三段にわかれる。上段は高さ 0.65m、十四の尖拱龕からなり、なかに奏樂の天人を配してゐる。天人たちは、だいたい正面をむいてゐるが、膝からうへの上身があらはされ、あたかも高樓の欄杆からみおろすがごとくである。樂器は東からみて、(1)

1 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 118, 228, 340.

竪笛, (2)琵琶, (3)箏篥, (4)琵琶, (5)排管(簫), (6)竪笛, (7)横笛, (8)腰鼓, (9), (10)小鼓, (11)舞踊形(もしくは銅鈸), (11)琵琶?, (12)竪笛, (13)不明, (14)不明である。すなはち第八洞とおなじく, 絃楽器は琵琶, 箏篥の二種, 管楽器は竪笛, 横笛, 排管の三種, 打楽器は腰鼓, 小鼓の二種である。こゝには中國固有の楽器である琴は, ふくまれてゐない。つまり西域系の楽器のみである。

中段は楣拱額である。十二の框にわかれてゐる。各框内に飛天が彫られ, 左右六體づゝ, それがシムメトリックに相對してゐる。顔のむき, 兩手のうごきは自由自在であつて, のびのびとした肢態は, きはめて大らかである。

下段は帳幕である。弧形にしぼったところが九個所あり, そこに獸面のかざりをつけてゐる。獸面は漢魏以來の傳統的形式である。獸面飾のしたは, むすんだ紐のはしがたれてゐるが, そのうち一個所だけは飛天が附加されてゐる。西にも, もう一個所あつたとおもはれるが, いまその個所はうしなはれてゐる。さらに, この帳幕が東西壁に接する兩端に, 侏儒像を彫つてゐる。兩手をたかくあげ, 兩足をそろへて, のばしたかたちである。もともと持送りの腕木のやうな役目をもつたものであらうが, いまはたゞ形骸のみである。(Pl. 42-46)

第三章 主室東壁

〔主室東壁〕 東壁と西壁とはおなじ設計である。いずれも四層, 各層二龕にわかれてゐる。各層をわかつ, ほそい唐草文帶は, うへから順に(a)蓮瓣文帶, (b)波狀唐草文帶, (c)半パルメット並列文帶, (d)パルメットの略式である三つ葉の環つなぎ文帶の四種である。第一から第四層, そのうへに小坐佛をならべた一層があり, つぎに天蓋のごとき三角垂飾がある。第一層のしたは供養者の列像である。

東壁は高さ約 12.55m, 西壁は 12.45m ある。いずれも北壁に接する方が, 0.20m ばかりたかい。壁の幅は下層より上層になるにつれ, せまくなり, 東壁の床では約 5.40m, 上縁では約 3.85m, 各壁ともまへにかたむいて, そのうへかなり凹凸もある。木造にしろ, 石造にしろ, ふつうの建築の壁にみるやうに規則的ではないのである。第三層の基底は, 北壁上龕の基底とおなじである。すなはち, うへ二層は北壁上層と相應じ, した二層は北壁下層と相應ずる。さらに, うへ三層は, 二つの龕が上下にたゞしくならぶが, 第一層の兩龕は, 北壁の方にかたよつてゐる。かういふことも, ことごとく第八洞とおなじである。(Pl. 47, 48, Plan IX)

〔東壁第四層〕 二つの尖拱龕が相接する。龕頂までの高さ 2.10m, 龕の幅, 南龕 2.20m, 北龕 2.30m。佛龕の兩わきは, 柱頭飾からでた籐几やうの裝飾が大きく占居し, そのうへに拱端の龍が

立つ。これも第八洞とおなじである。龕内には結跏趺坐の佛像を彫るが、おしいことに、北龕の佛は顔の一部と、上體の大部分を破損してゐる。頭上には頭髮をあらはしてゐない。右手は舉手、左手はねじて衣端をにぎり、光背は龕いっぱいひろがってゐる。このうち、南龕の佛像はすぐれて生氣がある。兩龕とも、光背のそとは四段にわかれ、最上は飛天一段、つぎは供養天人三段、そのうち最下の一段は、直立の供養天人である。拱額内は、南北兩龕でちがってゐる。南龕は高髻の天人がとび、北龕は禪定形の佛がすわってゐる。そのうち、南龕の飛天が相かさなるとんでゐるのはめづらしい。(Pl. 49-51)

〔東壁第三層〕 二つの楣拱龕がならび、その中間と兩端とに、四層の重層柱がたつ。龕頂までの高さ 2.35m, 南龕の幅 1.70m, 北龕の幅 1.70m。重層柱のいたゞきには、半パルメットの承花^{うけはな}があり、各層には小佛の並坐があり、最下は層柱をさゝげる侏儒がうづくまってゐる。承花は大きく、そのあひだから覆鉢形が小さくのぞいてゐる。第八洞東壁では、覆鉢形はなく、こゝに合掌した化生童子があつた。

兩龕ともに三尊形式である。南龕の佛は五成の須彌座に坐し、北龕の佛は脚をまじへて方座のうへにすわる。ともに偏袒右肩、右手は舉手、左手は捻手の形である。本尊の舉身光に接して、兩がはに脇侍菩薩がゐる。ともに寶冠をつけ合掌してゐるが、たゞ北龕の左脇侍のみは、左手に水瓶をもつてゐる。寶座の兩わきには、うづくまった獅子があること同様であるが、北龕は正面形であり、南龕は側面形で、上半身しかあらはされてゐない。しかし、獸形は、どちらもいきいきとしてゐる。拱額の中央部と菱形部には、それぞれ飛天を彫り、左右の翼部には合掌童子の上身をあらはしてゐる。化生のつもりであらう。(Pl. 52-59)

〔東壁第二層〕 この層には尖頂のアチチ龕二個をならべてゐる。龕頂までの高さ、南龕 2.05m 北龕 2.10m, 幅は南龕 2.10m, 北龕 2.24m。拱額の兩端には龍を彫り、それをうけて、みじかい傍柱がある。これも第八洞におなじである。南北龕とも佛の臺座なく、床上ぢかにすわってゐる。兩方とも腕からしたが大部分溶けてゐるが、とくに北龕がはなはだしい。下方の壁にみじかい材を數本うちこんでゐるが、これは補修の泥土をつけた痕迹である。

南龕では龕内兩わきに、三體づゝの胡帽をつけた供養者が、ひざまづき合掌してゐる。襟の大きくをれかへつた、窄袖のコットをつけてゐる。北龕では、左右に一體づゝの老人が腰をかけてゐる。右脇侍はまったく破損しきつてゐる。ほそい身體に、膝まで達する長衣をつけてゐる。この南北兩龕の脇侍は、第八洞第二層から類推して、やはり、佛傳中のある場面を、ものがたるにちがひないとおもふ。南龕は胡帽の俗體であるから、第八洞東壁北龕同様、トラプシャ^{Trapusa} (提謂)、バリカ^{Bhallika} (波利) の二商主が、麝蜜を獻じたところであらう。¹⁾ (第五卷, p. 17, 18) 西壁第二層南龕も、これにおなじである。北龕はそれにつゞくはなしとして、ウルヴィルヴァ^{Urūvilvā} (優樓頻螺) の三カァシャバ^{Kāśyapa} 降伏がかんがへられる。つまり、西壁第一層南龕に連關するのである。拱額は、南龕に九つの小坐佛、北龕に小

坐佛を中心にした左右三體づゝの飛天を彫ってゐる。北龕の北には、なほ 1.00m ほどの壁面がのこ
 っている。こゝには北壁の浮彫のつゞきがまはってきてゐる。なにか俗體の人物が二人ばかり、あ
 らはされてゐる。第八洞のばあひは佛傳の一節であつたが、こゝでは本生談の一節かとおもはれ
 る。(Pl. 60-63)

〔東壁第一層〕 左右兩龕が、すこし北に片よつてならんでゐる。いま原形をとゞめぬまでに溶
 解してゐるが、西壁第一層によつて、ほゞ全體を推察することができる。兩龕の間には、四層の重
 層柱がたつてゐる。これは第三層の重層柱よりは幅がひろい。南龕は尖拱龕、北龕は楣拱龕で、坐
 佛が安置してあつた。脇侍のやうすはわかりにくい、これも西壁の初層から推察すべきであら
 う。北龕の復原圖 (p. 97) を参照されたい。(Pl. 48)

〔東壁最下層〕 第一層のしたは床まで 1.50m ある。すっかり溶けてゐるが、供養者の列像で
 あることは、うたがふべくもない。(Pl. 48)

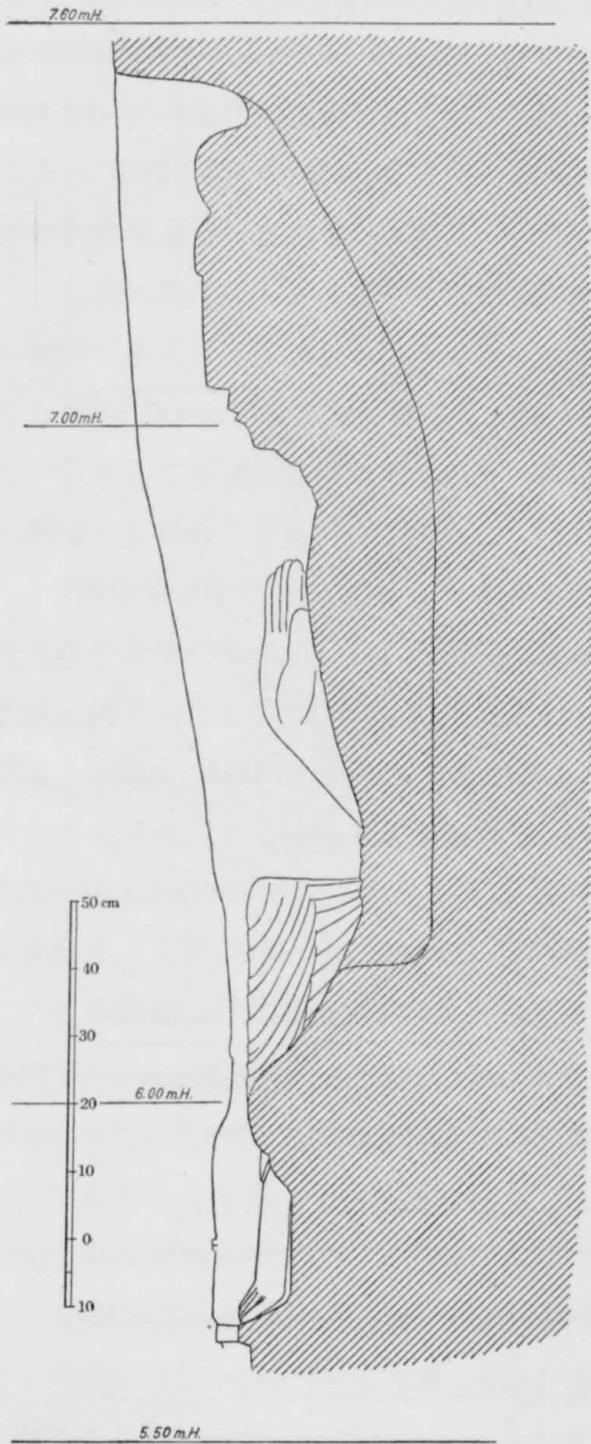
第四章 主室西壁



第二十三圖 第七洞 主室西壁 第二層北龕 右脇侍像
 Fig. 23. Cave VII, Main Room, West Wall, Second Storey,
 Northern Niche, Right Attendant.

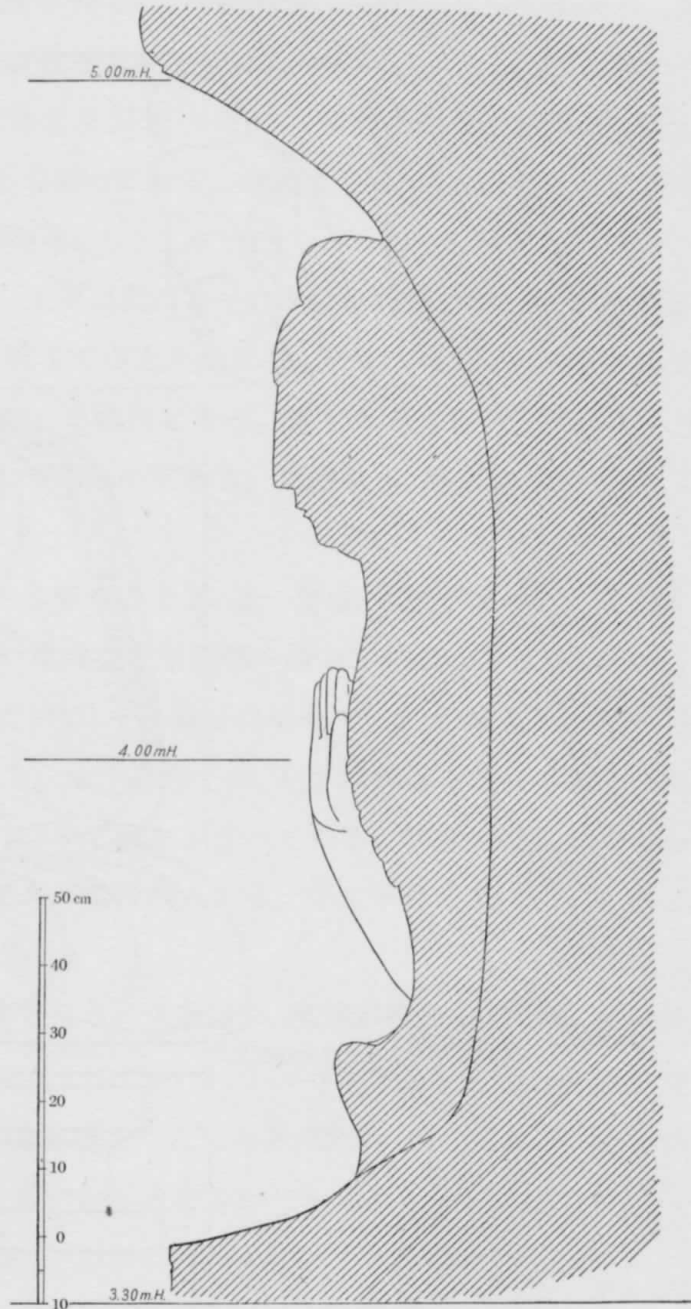
〔主室西壁〕 西壁は東壁と
 おなじ設計である。第四層は尖
 拱龕、本尊坐佛には臺座がない。
 第三層は楣拱龕、北龕は交脚佛
 の三尊、南龕は五成須彌座の坐佛
 三尊。第二層はふたゝび尖拱龕
 で、本尊坐佛には臺座がない。第
 一層はふたゝび楣拱龕だが、南龕
 だけは山嶽をあらはした特殊な
 龕形である。これら佛龕中の坐
 佛は、すべて右手を舉げてゐる。
 左手は多く捻手形であるが、第二
 層南龕、第四層南龕は俯手形、第
 一層南龕は鉢をうけてゐる。い
 ま東壁とくらべつゝ、この壁の解
 説をしよう。(Pl. 64-66, Plan X)

〔西壁第四層〕 こゝでは南龕本尊の左手が、東壁のばあひと異り、腹によこたへられてゐる。北龕の拱額は中央に一體の坐佛があり、その左右に跪坐の天人が八體づゝ、合掌したり、片手をあげたりして供養してゐる。南龕の拱額は坐佛の列像である。つまり東壁と同様に、供養者列と坐佛列との一対であるが、東壁北龕と西壁南龕とが坐佛列で、東壁南龕と西壁北龕とが供養者列であるから、照應してゐないことになる。また、おなじ供養者列にしても、東壁のは飛行してゐるし、西



第二十四圖 第七洞 主室西壁 第三層北龕 交脚佛縱斷面圖

Fig. 24. Cave VII, Main Room, West Wall, Third Storey, Northern Niche, Profile Outline of Buddha with Ankles Crossed.



第二十五圖 第七洞 主室西壁 第二層北龕 坐佛縱斷面圖

Fig. 25. Cave VII, Main Room, West Wall, Second Storey, Northern Niche, Profile Outline of Seated Buddha.

壁のは跪坐してゐる。(Pl. 67-70)

〔西壁第三層〕 北龕はめづらしい交脚佛 (Fig. 24) である。東壁北龕に對應し、また第八洞の東壁南龕に一致する。南龕は五成の臺上にすわる坐佛 (Fig. 26), 脇侍は左右とも合掌で、東壁南龕に一致する。北龕の脇侍は左右とも手をたれて水瓶をもち、東壁北龕の合掌脇侍と、水瓶脇侍とを



第二十六圖 第七洞 主室西壁 第三層南龕 佛坐像

Fig. 26. Cave VII, Main Room, West Wall, Third Storey, Southern Niche, Seated Buddha.

相對せしめたのとちがつてゐる。これは東壁の彫刻家が、不用意にしたことかとおもふ。なほ第三層のうづくまった侏儒は、東壁よりよほど念いりに彫つてある。ことに中央の侏儒は、ゆたかな均整のとれた肉體を、ま正面に壓縮したかたちであらはされてゐる。(Pl. 71-76)

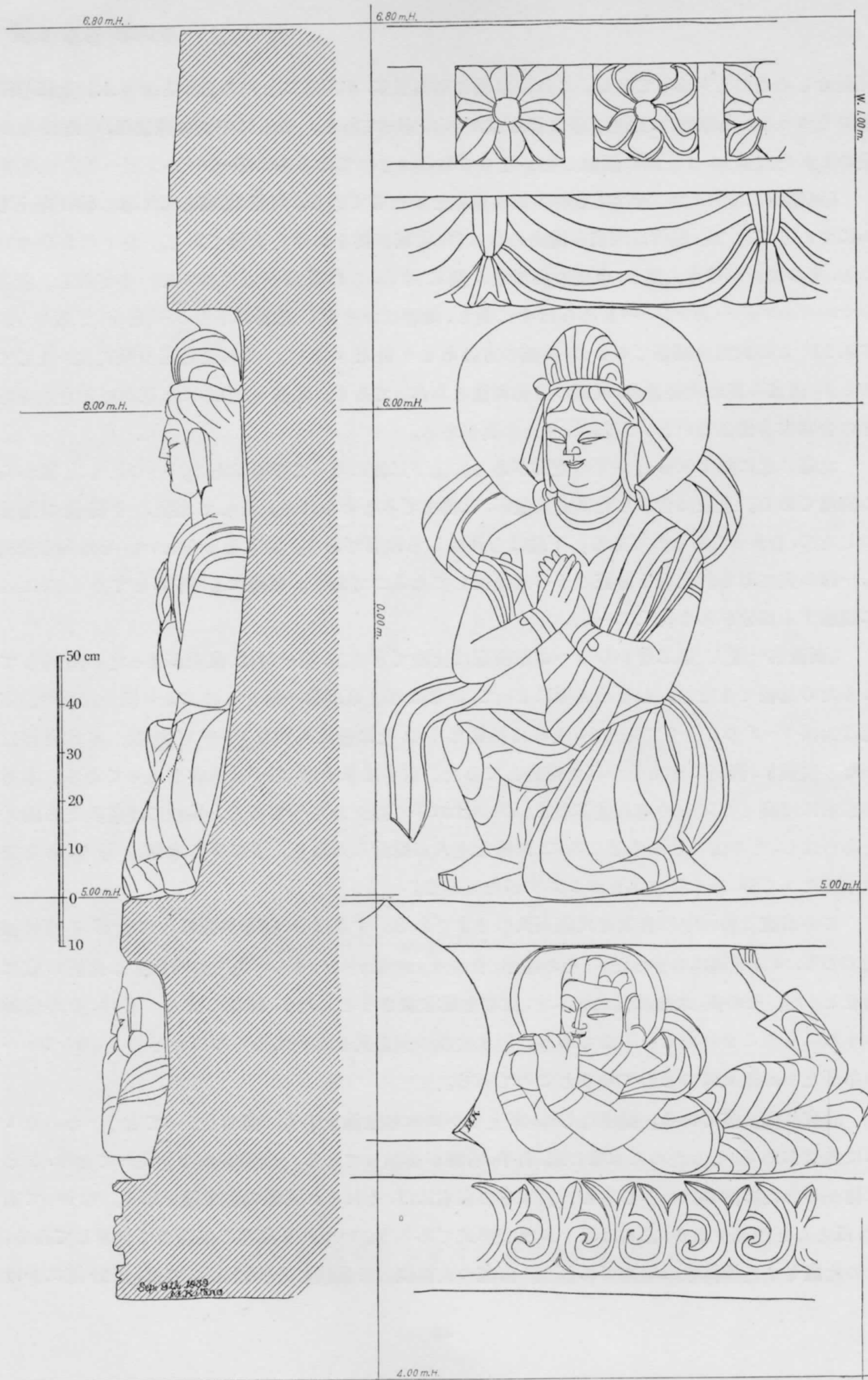
〔西壁第二層〕 この層はあらゆる點が東壁とおなじである。南龕、北龕とも本尊の佛は床上ぢかにすわり (Fig. 25), 脇侍は南龕が跪坐の合掌群、北龕が腰をかけた大像である。たゞちがひをいふと、その腰をかけた大像が、東壁の高髻老人像に對し、この壁は寶冠の若々しい姿である。前者のウルヴィルヴァ・カァシャバをあらはすに對し、後者はおそらく長者の子ヤシャ^{Yāśa}(耶舎)であらう。(Fig. 23) この對照は顯著であるが、拱額の方はあまり目だゝない。これは北龕の飛天はおなじであるが、南龕の跪坐供養像が、東壁の坐佛列像とちがつてゐる。北龕も、中心に東壁のごとき正面むきの合掌半身像がないといふ點に、また小異がある。

北龕の北に幅 1.00m ばかりの空間がある。上下二段になって浮彫がある。いづれも北壁からの繼續である。上段は合掌した供養立像が、三體までみとめられる。そして北壁の半跏像の蓮座のしたに、むかつてゐるのである。下段はむれはしる獸形である。鳥もあるらしい。それから飛天も一體みえてゐる。北壁下層龕のうへに連續してゐるのである。東壁にも、溶解してゐるが、これに照應する部分がある。(Pl. 77-81)

〔西壁第一層〕 第二層からうへの東西壁は比較できるが、第一層は、東壁がまったく消滅してゐるため比較できない。むしろ西壁によって、いまはなき東壁第一層をしのぶよりほかはない。南龕は尖拱アァチのごとくであるが、それは拱梁だけで、その他は異状なアァチである。本尊坐佛はかなり破損し、表面には土をつけて補修してゐた。右手は舉手形、左手は佛鉢をもつてゐる。本尊の左右には高さ 0.70m の老人像がある。内がはの手で額をおさへてゐる。拱額には重疊たる山岳をあらはし、その山のところどころに、同様な老人が總計八人ゐる。手に手に水瓶をもち、あるひは水をそゝぐ形、あるひは水をはこぶすがたである。

この南龕は佛傳中の有名な火龍調伏のさまである。すなはち、釋尊が鹿野苑における初轉法輪ののち、マカダ國にむかったが、その途中、ウルヴィルヴァ・カァシャパ^{Urūvilvā Kāśyapa}たちの奉仕する火龍の窟に宿をとった。その夜、火龍は猛火をふき、釋尊を焼き殺さうとしたが、釋尊の威力にまけ、その佛鉢のうちにもりこまれたといふ話である。いま火龍の祠が火をふいてゐるのにおどろき、カァシャパの弟子たちが消火につとめてゐるところである。

北龕は楣拱龕である。臺座なしに、床上ぢかに本尊坐佛を彫る。龕のむかつて右うへからなゝめに龜裂があり、そのために本尊の頸、右手、右膝が破損してゐる。全體がかなり荒れてをり、ことに膝からしたの溶解はいちじるしい。本尊の左右には、それぞれ五體の跪坐像を彫る。むかつて右は、ほとんど消滅するが、左右はほゞおなじ形式であらう。いづれも高髻の供養者で合掌してゐる。この北龕もまた佛傳中の場面であらう。南龕の火龍調伏に前後した物語としては、鹿野苑におけ



第二十七圖 第七洞 主室南壁 中央 供養六天 第四像

Fig. 27. Cave VII, Main Room, South Wall, Central Panel, Fourth Celestial from East.

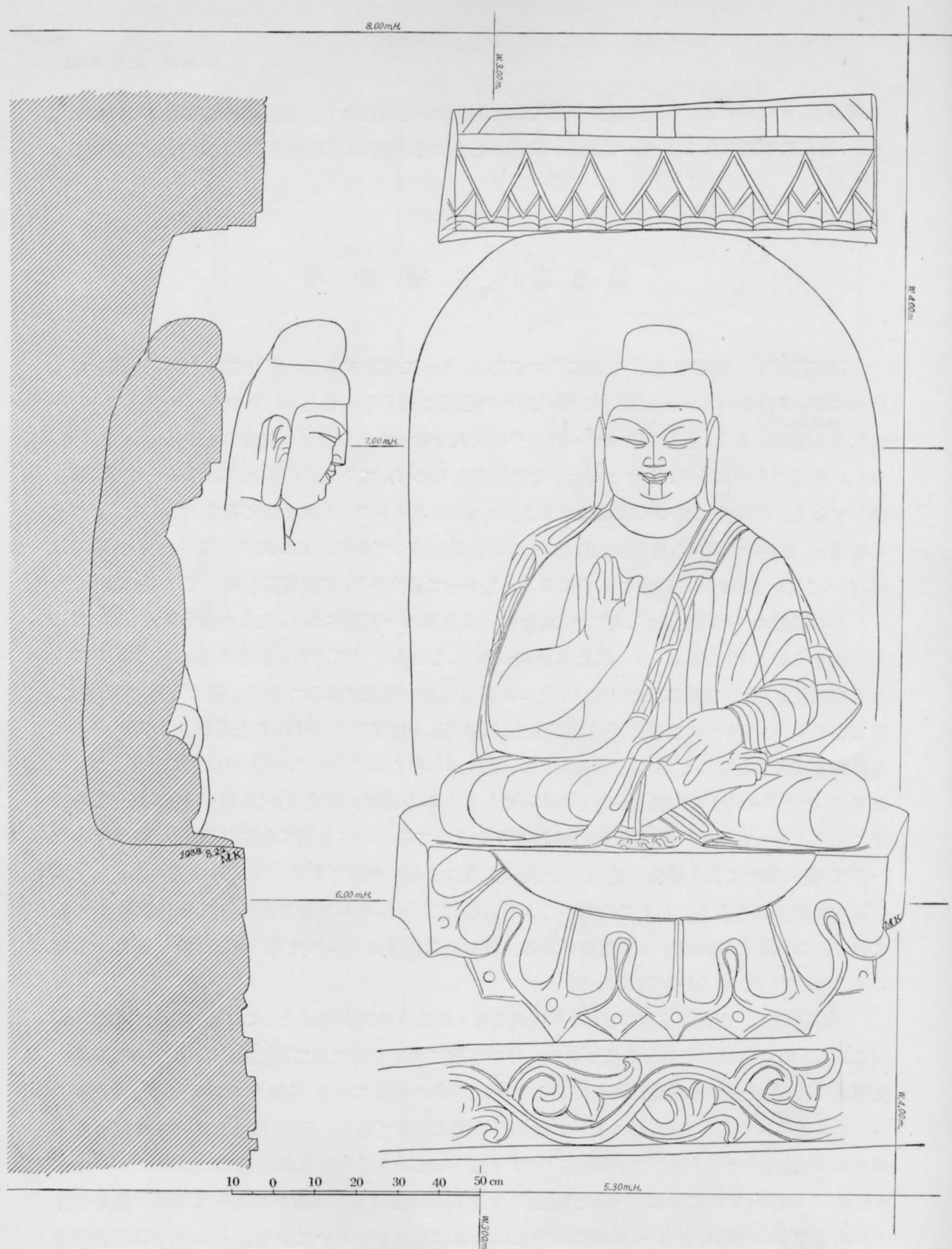
る聴聞者、カウディニヤ^{Kaundinya} (僑陳如)ら五人をあらはすかともはれる。楣拱額は矩形菱形の區劃よりなり、なかに飛天があらはされてゐる。拱額のしたには、帳幕が弧形をゑがいてゐる。(Pl. 82-85)

第五章 主室南壁

〔南壁拱門〕 南壁中央は、したに門口があり、うへに明窓がある。門口の高さ5.20m、幅4.00m、門口のアーチは半パルメット並列文、幅0.24mの拱梁で縁どられてゐる。そのうへの横帯には、中央にマニ寶珠^{Cintamani}をおき、左右に四體づゝの童子形天人を彫つてゐる。マニ寶珠はながめの六角形で、ひくい臺座のうへにたち、まはりに大きな光焰がたちのぼつてゐる。(本書, p. 34) 童子たちは音楽を奏してゐる。中央の二體づゝは身體をよこたへて、シムメトリックにとんでゐる。(Fig. 27) 手にする樂器は、むかつて右から横笛、螺貝、排管(簫)、豎笛の四つである。この四體の童子たちの兩端には、たつて足をふんばつた奏樂の童子がゐる。むかつて右は琵琶、左は箏篋を奏してゐる。

この拱梁のうへ、明窓のしたには、横ながい長方形の一區劃があり、六人の供養天人を彫つてゐる。高さ1.80m、幅4.00m。うへにながい楣があり、これをうけて左右に柱がある。楣はいくつもの方形にくぎられ、各區に正蓮華文と、なゝめ蓮華文とを交互にはめてゐる。柱はうへぼそりで、皿板がのり、そのうへに曲線の柱頭飾がある。楣のしたは弧狀にむすばれた帳幕がさがり、そのしたに供養天人がならんでゐる。供養天人は、左右から中心にむかつて、なゝめむきにひざまづいてゐるが、そのポーズは第八洞とかなりちがつてゐる。みな高髻に圓光をおび、兩手を胸まへであはせてゐる。たゞ右端の一體が右手をあげ、左手をさげてゐるのが異例である。跪坐の姿勢はみな一律で、第八洞のごとき變化はない。しづかな、うつくしい列像である。よくみると、左三人と右三人との表情がちがふ。とくに左端の二人と右端の二人は、そのとなりどうしがたがひによく似てゐる。これらの異同はかなり顯著である。たしかに作者のちがひをあらはしてゐるとおもはれる。(Fig. 27) (Pl. 88, 94-100, Plan XI)

〔南壁明窓〕 南壁の明窓には、その兩角になゝめむきの天人像がたつてゐる。高さは東2.00m、西2.10m。わりにづんぐりした像である。片手を胸に片手を腰にあて、籐几のうへにたつてゐる。寶冠をつけ、圓光をおうた姿は菩薩であらうか。明窓の兩隅にたち、拱梁をうけた姿は、古代ギリシア^{caryatide}の人像柱にくらべられ、神々しい。頭上の拱梁は龍身である。拱端は、はねかへつた龍の上半身があり、龍身はながくのびて、明窓のアーチを縁どつてゐる。そのながい龍頭のプロフィル、まがつた角、たつた耳、それにはねかへつた前肢は、まさしく漢魏以來の傳統をつたへてゐる。龍身のうへには合手形の坐佛をならべ、坐佛のあひだに合掌の化生がのぞいてゐる。そのうへは三角垂飾



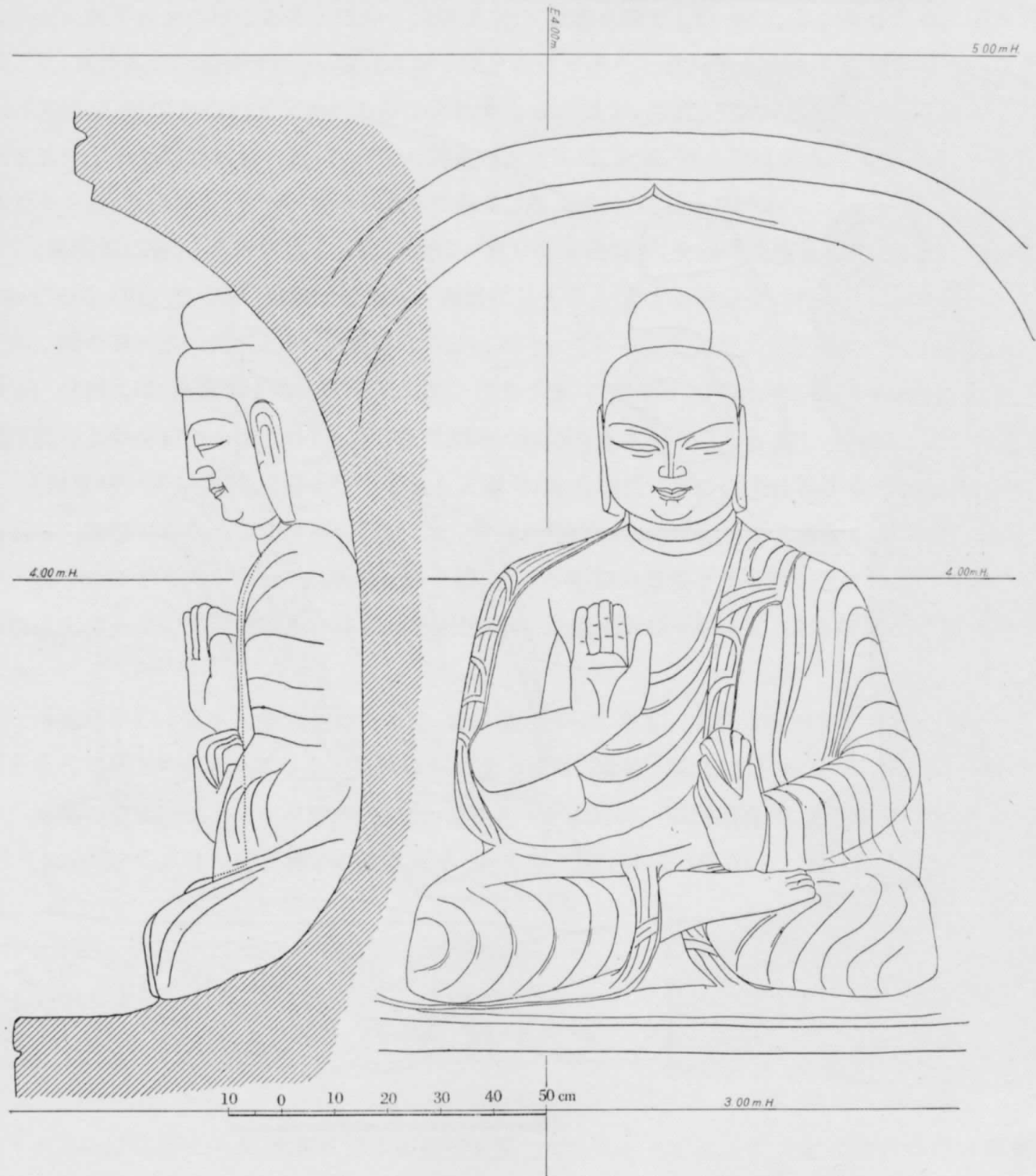
第二十八圖 第七洞 主室南壁 第三層西龕 佛坐像

Fig. 28. Cave VII, Main Room, South Wall, Third Storey, Western Niche, Seated Buddha.

と、長押やうの一帯があつて、天井と相接してゐる。(Pl. 86, 87, 89-93, Plan VII)

〔南壁東西部〕 中央の門口と明窓とをはさんで、東西におののおの四層の佛龕がある。四層のした、床に接した最下層は供養者の列像があつたが、いまはまったく崩壊しきつてゐる。四つの層の境界には、蓮瓣文帯や唐草文帯があり、それぞれ東西兩壁につらなつてゐる。(Pl. 101-104)

〔南壁第四層〕 東西兩龕とも東西壁の尖拱龕とちがひ、楣拱龕である。たゞ壁の兩端が、うへ



第二十九圖 第七洞 主室南壁 第二層東龕 佛坐像
Fig. 29. Cave VII, Main Room, South Wall, Second Storey, Eastern Niche, Seated Buddha.

ぼそりになってゐるため、左右がそろってゐない。ともに寶冠をつけた菩薩交脚像で、五成の須彌座に腰をかけてゐる。兩者とも高さ 1.60m。右手は舉手形、左手は腹のところにあてるが、東龕では四葉のバルメットをもち、西龕では蓮の蕾をもつてゐる。龕内は大きな舉身光がおほひ、兩脇に小さくひざまづいた合掌の天人、そのうへにいきほひよく驅ける飛天を彫る。拱額には五つの區



第三十圖 第七洞 主室南壁 第二層西龕 佛坐像

Fig. 30. Cave VII, Main Room, South Wall, Second Storey, Western Niche, Seated Buddha.

劃をまうけ、中央三つにはよこにとぶ飛天を彫り、左右菱形部には合掌の化生を彫る。拱額のしたには、帳幕がしぼりあげられてゐる。(Pl. 105, 106, 114-117)

〔南壁第三層〕 東西壁の楣拱龕とちがって、東西兩龕ともに天蓋を彫り、そのしたに三尊形式の坐佛を彫る。本尊の高さは、東龕 1.40m, 西龕 1.30m。(Fig. 28) 臺座はひくい蓮座で、その前面に大きな蓮瓣がたれさがってゐる。本尊の左右に脇侍菩薩がたってゐるが、西龕の左脇侍のみは寶冠の正面に獅子頭をつけてゐる。ほかの脇侍は、たゞ高髻を環でしばってゐるのみである。第八洞南壁では、東西龕の四脇侍すべて、寶冠に獅子頭をつけてゐた。脇侍の足下にも蓮座がある。ほそながい蓮瓣が、渦達な線刻で大きくあらはされてゐる。たゞ、西龕左脇侍の蓮座のみは、蓮瓣文帯にみるふつうの蓮瓣である。脇侍のうへ、天蓋の左右には、比丘、あるひは天人の上半身があらはされてゐる。みな合掌し、まへかゞみになってゐる。(Pl. 107-110, 118-120)

〔南壁第二層〕 東西兩龕とも東西壁に一致して尖拱龕で、坐佛は臺座なしに、床上にぢかにすわってゐる。(Fig. 29, 30) 東龕はほとんど圓拱にみえる。大きな舉身光の外側には、左右からそれぞれ二體の飛天が一行にとび、拱梁のうちがはにそってゐる。その下に二段三體の天人が跪坐してゐる。拱額には、東龕に十體の合掌天人がひざまづき、西龕には八體の禪定佛がすわってゐる。拱端は龍の上半身があらはされ、そのしたに渦卷の柱頭をもった柱がある。(Pl. 111, 112, 121, 122)

〔南壁第一層〕 以上三層といちじるしく異り、左右均整でない。東は楣拱龕の維摩像、西は天蓋龕の文殊像である。つまり兩者照應して、文殊が維摩の病牀に問答する場面をあらはすのである。龕の高さともに 1.94m。維摩はとがり帽をつけ、兩襟の寛濶なきものをきてゐる。左手にもつのは塵尾である。不規則にあらはされた楣拱額には、飛天五體を彫るが、はなはだしく溶けさってゐる。

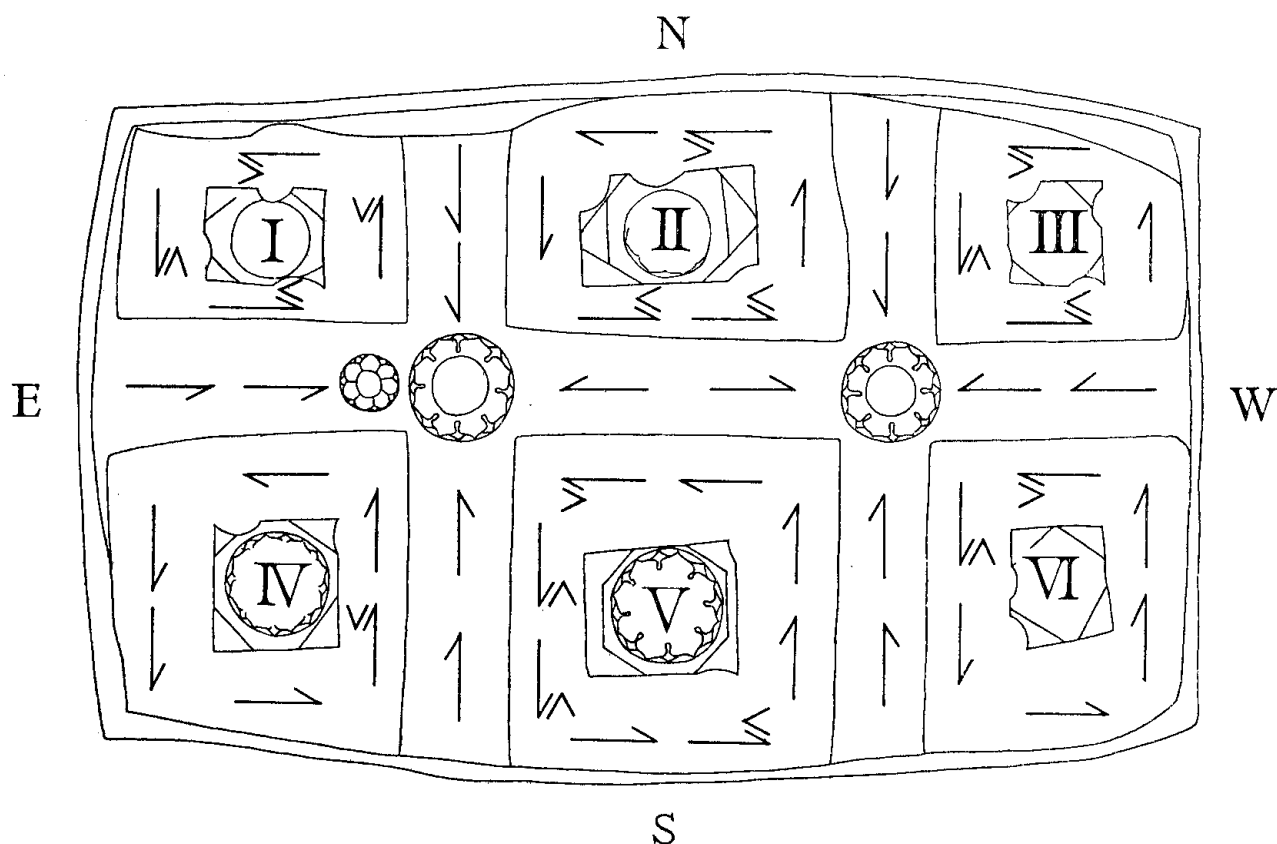
西龕は小じんまりした天蓋のもとに、文殊像が彫ってある。文殊は寶冠をつけた菩薩像で、右足をたれて牀上にすわってゐる。文殊の左右上方には、飛天一體、跪坐した天人二體が彫られてゐる。兩脇の空間には小形の立像や、跪坐の像があつたらしい。東西兩龕、ともに破損がはなはだしく、そのため、この層と最下層との境界はまったく不明瞭である。(Pl. 113, 123)

第六章 主室天井

天井には東西に一本、南北に二本の梁が交叉してゐる。したがって、そこには六つの方形區劃ができる。梁は幅 0.50m 乃至 0.60m あり、その十字に交叉するところに、直徑 0.60m ほどの蓮華文を浮彫にしてゐる。したがって、梁自體は七つの區劃にわけられる。六の格間は折上げ式であるこ

と、三角持送りであること、第八洞とまったくおなじである。大きさは一定してゐない。北側の三個はすこしせまい。左右兩端の四個もせまい。格間の中心には大蓮華が浮彫にしてあり、そのまはりと梁上とには、すきまなく飛天が彫られてゐる。いま、六つの區劃を北側の東方から I, II, III, 南側の東方から IV, V, VI とかぞへる。飛天の走向と顔のむきを、大小の矢じるしてあらはすと、圖のごとくなる。(Fig. 31)

格間の飛天は、大蓮華をとりまいてゐるが、その走向はかならず左まはりである。その點、走向のまちまちな第八洞とはちがつてゐる。天井で左まはりといふのは、地上で右まはりである。右繞の禮に合するのである。各區の飛天の數は不定である。しかし、南側格間の東西側が二人、中央格間の南北側が二人、その他は一人づゝになって規則たゞしい。だから、中南區(V)だけは八體であるが、その他は六體づゝと四體づゝとである。梁上の飛天は二體が一組になり、頭を梁上の蓮華の方にむけてゐるが、ポーズはまったく自由自在である。



第三十一圖 第七洞 主室天井 飛天走向圖

Fig. 31. Plan showing Distribution of Flying Celestials on Ceiling, Cave VII.

しかしながら、個々の飛天をみると、容貌風姿はいちじるしく共通してゐる。高髻の頭に圓光背をおひ、右肩をあらはにして、左肩から右わきに天衣をかけ、下半身に裳をまとひ、足さきだけをあらはしてゐる。總數四十八體、二三の例外をのぞいて、だいたい上身を立て、下體をよこたへてゐる。兩手兩足の姿勢を類型わけすると、

- (1) 合掌, またはそれにちかい形 12
- (2) 片手を胸におき, 片手をあげた形 26
- (3) 両手を左右にあげた形 6

などが注目される。足の姿勢は第八洞にくらべて、しづかになってゐる。大部分が兩足をそろへて、ながしてゐる形である。たゞ梁上の飛天には、足をひらいたもの、膝をまげたもの、なかには立ちあがったやうなものまである。しかし、それにしても、やはり第八洞の方がはるかに變化にとみ、生氣にみちてゐる。

飛天の持ちものは、莖のない蓮華とか、蓮華の蕾とかが多い。注意されるのはV區の二飛天がむかひあつて、大きなマニ寶珠をさゝげてゐることである。このマニ寶珠は六角形で、舟形の光焰がついてゐる。これは中央アジアの形式をうけたもので、この時期だけの特徴ある形式である。

(Pl. 124, 132, Plan XII)

¹ このかたちが特殊なものであることは、すでに第六卷, p. 64 で指摘した。本洞主室南壁門口のうへにもある。

終 章

第七洞の特徴

1

以上、第七洞の構造および彫像について概説したが、その結果は、第八洞との類同がますますあきらかになった。いま石窟の造像を要約して、圖像學的に考察すると、左の諸點が注意される。

(1) 主室北壁諸尊の問題。上下二層である點は第八洞と同一である。しかし第八洞とちがひ、上層は交脚菩薩一、倚坐佛二、半跏菩薩二、下層は並坐の二佛である。上層の五尊は、いはゆる五尊像の形式でない。主尊に比して脇佛が大きい。ほとんど同大といってよい。寶冠をいたゞいたこの主尊は、彌勒菩薩と推定されるが、その左右の佛像は、適切な解釋を發見しがたい。したがって、この石窟北壁上層も、第八洞の上層のごとく嚴格な圖像學的配置ではなく、造形的な構成とかがへられる。つまり、第八洞上層五尊と配列を異にしてゐるのは、一對窟として造形的の變化をねらつたものにほかならない。(第五卷, p. 27) 北壁下層は二佛並坐で、あきらかに多寶佛と釋迦佛である。かうしてみると、第十七洞明窓の太和十三年龕が、上層に彌勒と二半跏像、下層に多寶、釋迦の二佛を安置してゐるのと、まったくおなじだといふことになる。たゞ上層左右の佛倚像二軀が多いのであるが、それはこの龕の大きさからいふと、適當な處置であつたとおもふ。(第一卷, p. 53)

(2) 第七洞内諸佛龕の本尊は、すべて右の手をあげて舉手形をしてゐる。左の手は衣端その他をとり、捻手形、もしくは俯手形である。天井に接する並列の坐佛とか、拱額並列の坐佛とか、あるひは前室の千佛龕においては、みな合手形、いひかへると禪定形である。これも、第八洞とおなじである。

(3) 第七洞における佛の象徴は、うへの手相のほか、獅子像がある。獅子像は寶座の左右に配し、いはゆる獅子座をつくる。^{simhāsana}獅子座は、もとより西方傳來の意匠であるが、そこでは主として座牀の牀脚であつた。こゝではもっぱら獅子獸として、かたはらに侍してゐる。獅子は勇猛のシムボルで、また脇侍菩薩の寶冠かざりとしてあらはされ、第八洞にも數例あつた。

(4) 佛傳が主室の諸佛龕にあらはされてゐる。それは、もっぱら東西壁のした二層である。いま第八洞主室の降魔成道の龕、四天王奉鉢の龕、二商主奉蜜の龕などを綜合すると、兩洞の佛傳龕はつぎのごとくである。

a) 降魔成道・……………第八洞 主室 東壁第一層 南龕 (第五卷, Pl. 69)

- b) 四天王奉鉢・・・・第八洞 主室 東壁第二層 南龕(第五卷, Pl. 59)
第七洞 主室 東壁第二層 南龕(第四卷, Pl. 60)
第七洞 主室 西壁第二層 南龕(第四卷, Pl. 81)
- c) 商主奉蜜・・・・第八洞 主室 東壁第二層 北龕(第五卷, Pl. 63)
- d) カウンディニヤ等五人に對する說法・・・・第七洞 主室 西壁第一層 北龕(第四卷, Pl. 82)
- e) 長者子ヤシヤのための說法・・・・第七洞 主室 西壁第二層 北龕(第四卷, Pl. 78)
- f) ウルヴィルヴァ・カァシャパの歸信・・・・第七洞 主室 西壁第一層 南龕(第四卷, Pl. 82)
第七洞 主室 東壁第二層 北龕(第四卷, Pl. 62)

このうち(d)は、いはゆる鹿野苑の初轉法輪にあたるが、こゝには鹿も法輪も表現されてゐない。左右五人づゝの供養者は、あまりに一般的で、特色のない表現である。だから、この龕は、やゝ確實性をかく憾みがあるが、しかし(f)のウルヴィルヴァ・カァシャパの歸信は、すこしも疑問の餘地をのこさない。したがって、佛傳の順序は第八洞がさきで、第七洞がこれにつぐものとみられる。したがって、この一對洞の開鑿の順序も、こゝに暗示されてゐるのではあるまいか。

(5) 主室南壁の第一層東西部には、維摩と文殊の對問が浮彫にされてゐる。雲岡では、なほ第六洞、第一洞にも、南壁にこれがある。當時における『維摩經』の熱心な信仰のあらはれである。第八洞の南壁第一層は、僧形その他(第五卷, p. 24, Plan XII)で、はっきりした意圖をつかみえないが、維摩文殊の對問には、^{Sāriputra}シャリプトラ(舍利弗)が戲畫的に點景される(第一卷, p. 16, Plan III)のが例であるから、やはり維摩文殊對問の一節とみられ、こゝにも兩洞連契のふかさがみとめられる。

(6) 前室の東壁には、物語風の浮彫帶が層狀にある。そのうちムガバッカ本生だけが比定され、その他はわからない。

(7) これに對する前室の西壁は、大壁面いっぱい千佛龕を彫つてゐる。この千佛と、さきの浮彫本生とは、第八洞前室の東西壁に對應するものである。

2

つぎに、この石窟の構造上の特色を要約してみよう。それは多くの點で、第八洞と類似するのは當然であらう。

(1) 前室が主室よりひろいこと、そのうへ天井が吹きぬきになってゐること、第八洞におなじである。第八洞の解説で述べたごとく、第七、第八兩洞にわたる大きな木造建築が、これをおほふてゐたと推定される。まったくほかでみない特殊な前室である。

(2) 主室の格天井は、第八洞とまったく同様である。三本の梁で六つの格間をつくる。格間は折上げになり、その中心に三角持送りがある。かうした基本構造は、まったくおなじであるが、各格

間、また梁上にある飛天の布置は、まったく自由である。兩者のあひだに、根本的ではないが、かなりの區別がみとめられる。その一つは、第七洞の方がよりおとなしいことである。

(3) 主室壁面の層序は、たゞしく分割されてゐる。東西壁と南壁東西部は四層、各層二龕の配置、北壁だけが上下二層である。これは第八洞とまったく同様に、開鑿工事は最後まで順調にすゝんだものとおもはれる。(第五卷, p. 29, 30)

第七洞の西方的要素については、ほゞ第八洞とひとしいことがいへる。

(1) 佛像の顔容はガンダハラ式をまねてゐる。

(2) 佛像の服制は偏袒右肩が多く、通肩もある。寫實的で、身體に密着し、隆起線か刻線の「ひだ」である。いはゞ西方的の服制で、第六洞などにみる冕服式の服制とはちがふ。そのうち、ごくひくい階段状になった「ひだ」が、この洞ではやゝみられるが、第八洞ではほとんどない。あるひは刻線式より階段式にうつる推移が、この二つの洞でみられるのであらうか。

(3) 菩薩、諸神、天人のいたゞく寶冠が西方式で、この點も第八洞とおなじである。

(4) 塔形、龕形、光背、裝飾文様についても、第八洞と同様に西方的であることがみとめられる。(第五卷, p. 31, 32)

3

第七、第八兩洞の浮彫技法について、こゝに要約したい。

いふまでもなく、石窟彫刻は浮彫であつて、丸彫ではない。丸彫は周囲をまはつてみるものが豫想されるが、浮彫はまへからみるものである。うしろからはもちろん、よこからみるものでもない。つまり、一般に、浮彫には背面の壁がある。丸彫では、かんがへる必要のない背面の壁が、浮彫のしあげに大きな効果をもつてゐる。このやうな浮彫技法の原則をもつて、第七、第八洞をもう一度みなほしてみよう。

石窟では、龕の内壁が佛像をなりたゝせる背面である。たとへば周壁各龕坐佛のプロフィール (Fig. 24-26, 28-30) をみよ。龕も石窟のやうに彎曲してゐる。龕頂からすこしはいつて佛頭がある。肉髻^{ushnisa}のいたゞきから耳のうしろへなゝめにさがり、兩肩、兩肘が最深部となり、それから腰、足にいたつて、かへつてあさくなつてゐる。佛像の身體は、もとより中央最深部にあり、左右兩わきにいたるほどカゝヴして、壁があさくなつてゐる。しかし全體として、わりにあさいのは雲岡石窟に共通で、カゝヴした龕壁から浮きだした佛像は、龕壁いっぱいを占めてゐる。浮彫の厚さは坐高1.40mに對し 0.20m ぐらゐである。正面からみると豐滿な肉體に見えるが、斷面圖ではうすく、まったくかはった姿である。しかし、そのあさいわりあひに量感のあるのは、肩のおくが、ぐつとくぼんでゐるからであらう。頭上から垂直線をおろしてみると、額から鼻梁、鼻端にかけて垂直である。顎の

線はつよく、精力的にはりきつてゐる。佛頭の耳からうしろが、とくにふかいのは丸彫らしくみせるための手法で、おもへばガンダラ以来のやりかたである。胸から腹への線は後退し、五成の臺座になると、坐佛の肉髻よりも、もっと後退してゐるものがある。つまり、佛像はまへかゞみにつくられ、したからみあげるにふさはしくできてゐる。

第七、第八兩洞には、この種の佛像が、つがう四十八體ある。坐高 1.40m ばかりで、はるかに等身をこえ、頭部は高さ約 0.45m で、奥行は約 0.30m ある。まよこからはみられないにしても、上下左右さまざまの見方が可能である。兩洞の北壁には、これ以上に大きい佛像、すなはち上層の五尊像、下層の坐佛像がある。これらは、さらに丸彫的である。しかし、禮拜の對象になる主尊的な佛、菩薩は、いかにふかく彫られ、丸彫的であるといつても、しよせんは龕、光背を背景とし、端然と正面きつて坐し、しかも伏目にさへなつてゐる。正面的な見方が支配的なのは當然である。大像であっても、從屬的な供養六天や門神像は、まったくの浮彫である。(Fig. 27) あつさわづか 0.20m ばかりのうちに、肉體が壓縮されてゐる。要するに、これら從屬的諸像は、禮拜の對象である佛、菩薩ほど丸彫的にはとりあつかはれてゐない。たゞ明窓の左右にたつた菩薩立像は、ちやうど、かどにあたつてゐるため、これだけはほとんど丸彫である。

第七、第八兩洞の佛像は西方的要素、すなはちガンダラの、中央アジア的要素が多い。いひかへると肉體のモデリングを重ずる様式である。しかし、それは模範となつた粉本がさうであつたからにすぎない。雲岡彫刻家たちは、けつして人體の寫實からこれを習得したのではなかつた。かれらは石を彫つて、その凹凸、曲面の觸覺をたのしんだのである。肉髻や、額ぎはの、みがゝれた石の曲面をみよ。北壁上層尊像の手のまるさをみよ。彫刻家は佛像の顔や肩、胸に、ある種の凹凸の觸覺を感じることにはできた。しかし、その凹凸の曲面を構成したものが、かならずしも、人體の肉塊、骨格であるを要しなかつた。まるい顔、まるい顎は、その特殊な曲面のみで、人體の凹凸からはとほのいたものであつた。一途な曲面凹凸で、人體に對する感覺は幼稚であり、粗雑である。ひとへに觸覺的な素朴さであつて、かへつて、そこに率直な力強さがうまれてくる。

この素朴な彫刻家たちは、また、細部の表現法でも、あたらしい方式を導入した。たとへば、佛像の眉目であり、衣服の「ひだ」である。西方様式、すなはちガンダラ彫刻では、眉目も身體の服裝も、すべて浮彫の手法である。ガンダラ佛では眼窠がふかい。眉のしたを斜面にきりこみ、そこにするどい稜線をつくつてゐる。この稜線はさらに鼻梁の線につらなつてゐる。上瞼と下瞼とはくつきりと彫りこんであらはされ、そのあひだに瞳をいれてゐない。雲岡の彫刻家たちは、このやうな眉目を模範として、うけとつたけれども、そのまゝでは満足しなかつた。彫刻家が自主的になりだすと、身體のモデリングが變化したのとは、べつの理由で、いはゞより精神的な理由から眉目の表現はかはつたのである。つまり、眉目と衣文との表現に、線刻の手法がもちこまれたので

ある。眉の稜線にかさねて刻線がほどこされ、肉體のふくらみにそうて衣文の刻線がつくられたのである。ぐわんらい、浮彫と線刻とはべつである。線刻は一種の繪畫的手法である、彫刻に線刻を併用することは、けっして彫刻の効果を發揮するゆゑんでない。むしろ効果を減殺することである。線は立體を否定し、平面を要求する。線は觸覺を否定し、ひたすら視覺をもとめるのである。北壁の大像には、なほ隆起線の衣文がつかはれたが、顔の眉は風化のためわからない。周壁の龕像は、多く眉に刻線があり、衣文にも刻線が多い。たゞ目は上下二線の彫りこみからなるが、わきの小像にいたっては、みな大和繪の「ひきめ」とおなじく、一本の刻線からなる。曇曜五窟でも、大きな主尊以外の供養者とか、千佛の小像には、やはり眉目や衣文に線刻がもちひられてゐる。面と面との切りあふ稜線の方法をとらないで、線刻ですますのは簡便化のためでもあつて、自然、かうした小像に多くみられるのである。ガンダハラでも初期の小像には多少はみられる¹⁾。けれども、雲岡の線刻表現が、單に簡便化の結果だともいへないし、また初期ガンダハラの直系だともいへない。むしろ、線刻の手法は中國古來の傳統にもとづくものである。漢代以降、中國では繪畫に筆線の手法が發達したと同様に、工藝品にも、石彫にも線刻の手法はさかんにもちひられた。とくに後漢の畫象石に、線刻がさかんに使用されたことは、みな人のしるところである。南北朝の墓室における線刻畫象は、この傳統をつぐものである。したがつて、雲岡初期の石彫に、中國固有の線刻手法が多くとりいれられたことは、べつにふしぎでない。ことに眉目をたつとぶのは、中國古來の美の意識である。そこで、西方的な彫法に満足せず、かれらの刻線をまづ眉の表現につかつたのである。そのうへ衣文にも、またときには璽珞や腕かざりまでも、線刻にしたのである。ガンダハラやグプタでは、これらは浮彫であつた。かうまで線刻の手法を擴大したことは、いくらか仕事の簡便化や分業といふこともあつたとおもふ。彫刻が分業によつたことは頭部、ことに顔面の入念なつくりにくらべて、下半身がしばしば粗雑に彫られてゐることからあきらかである。しかし線刻手法のさかんな應用にはもっと重要な動機が豫想される。

線刻の手法は、中國古代の傳統において、それだけで獨自な表現法である。單なる浮彫の簡便化といふものでなく、そのまゝで意義をもつものである。かれらは浮彫にされた佛像の表面に、繪畫的な線描とおなじ氣持で刻線をつかつたのである。この漢魏以來の線描寫を、佛像のうへに傳習的に適用して、この表現に精神的な積極性をあたへたのである。第七洞、第八洞の彫刻は、西方的な裸身を基本としてをり、丸彫とはいへないにしても、立體的な浮彫である。こゝに、表現精神において、まったく對蹠的な、平面的の刻線を適用するのは危険である。けれども、かれらは、それをうまく安排して、この兩洞にみるやうに、りっぱに成功したのである。

1 B. Rowland, *A Revised Chronology of Gandhāra Sculpture* (The Art Bulletin, XVIII), 1936, p. 391.

つぎに第七洞と第八洞との相違点をあげてみよう。

- (1) まづ門口わきの両面の層柱、これが第八洞ではなく、たゞ平面的な蓮華の拱柱である。
- (2) 門口の多臂神が牛にも、鳥にもならず、第八洞のごとくシヴァ神ともヴィシュヌ神とも判定がつかない。むしろアシュラ神などであらうか。
- (3) 天井は格間内飛天の走向に秩序があるが、第八洞ではその秩序がない。さうして表現は自由奔放でたくましい。第七洞飛天の方が、よほどおだやかである。
- (4) 主室南壁中央の供養六天像も、第八洞の方が姿態自由で、たくましい。この點からも、この一對窟のうち、第八洞の造營が先行したことを暗示する。
- (5) ひだの表現が、階段状になるきざしが、この石窟ではみえる。第八洞では、北壁大像以外、ほとんど刻線のひだである。わづかに第四層佛龕に階段状になるきざしをみる。(第五卷, Pl. 46) その他の層では衣文断面がレ状になったものをみるのみである。が、第七洞では各壁第四層のほか、各層にその傾向があらはれてゐる。とともに、断面階段のものと、刻線のものとを交互におく方式が、かなり頻繁にみとめられる。これは第五洞、第六洞にいたって完成するものである。

かういふふうに、第七洞と第八洞との相違点をかぞへてくると、どうしても第八洞の方に、その造營の先行をみとめなければならないであらう。たゞ、それにしても、この兩洞が一雙窟であり、ほゞ獻文帝時代(A.D. 465-471)の同時造營になることは、第五卷終章(p. 37, 38)において、のべたごとくである。

圖 版 解 説

第 七 洞

Pl. 1. 第七洞 全景

むかって右、三層樓閣のあるのが第七洞である。樓閣はこの洞の前室にたつてゐる。入口の軒に大きな扁額がかゝり、「西來第一山」の文字がある。第七洞の西は第八洞であり、兩洞は一對窟である。第八洞のまへにも、かつて同様の木造建築がたつてゐた。けれども、それは北魏當初の建築ではない。北魏のむかしには兩洞にまたがる大屋根の建造物があったらしい。寫眞左うへの岩壁にみえる、ゆるい山形の溝がこれをものがたつてゐる。第七洞の東は第六洞であるが、寫眞右端には第六洞の重層塔がすこしみえてゐる。(三角頂點まで總高 19.70 m)

Pl. 2A. 前室 西壁 南部

B. 前室 東壁 南部

A. 第七洞前室には前壁なく、そこに木造建築がたつてゐる。そのため東西壁の全貌はあきらかにしがたい。建造物のそとは、あれたまゝの岩壁で、西壁には千佛龕を彫った痕跡が、あちこちにみられる。しかし、建造物のうちは壁面が壁土におほはれてゐるため、もとの姿はうかゞへない。西壁の南端に、風化のひどい柱形がある。これは基部に大龜趺をまうけた碑形とおもはれる。寫眞の左端には第八洞の外壁と、その前室西壁の一部がみえる。(最上軒高 14.00 m)

B. 東壁もまた一部分づゝしかみえない。こゝにみえてゐるのは東壁の南部である。ひどく風化して、浮彫もうへの方はすっかり消滅してゐる。東壁南端の塔形も風化し破損して、その原形はうかゞひがたい。そのむかうに、同様に風化した塔形がみえてゐるが、これは第六洞外壁右翼の重層塔である。寫眞右端には第六洞の樓閣がみえてゐる。(最上軒高 14.00 m)

Pl. 3A. 前室 西壁 南部

B. 前室 東壁 南部

A. 壁上には千佛の龕がならんでゐる。Pl. 9 の西壁につながる南部である。細部のもやうは Pl. 9 によってよくわか

る。壁面全體の構成は、第八洞東壁によって類推するほかはないが、部分的な保存状態は、この洞の方がはるかによい。建物の内部 Pl. 9 はわりに保存がよく、ほゞその當初のすがたをうかゞふことができる。(建造物第三層の柱高 3.00 m)

B. 西壁とちがつて、こゝには本生談 Jataka が浮彫にされてゐる。水平の唐草文帯で、なん段にもしきり、その帶狀の區劃に、またたてのしきりをまうけ、本生談を一景一景あらはしてゐる。よこにしきった唐草文帯には半パルメット波狀文、半パルメット並列文、三つ葉環つなぎ文がみられる。東壁の南部、建物のそとにある部分は、ひどく風化してゐる。木造建築は壁面浮彫を顧慮せず、前室よりも小さくたてられてゐる。(建造物第三層の柱高 3.00 m)

Pl. 4. 前室 東壁 南部 浮彫本生

東壁の南端、わづかにのこつた浮彫帶が、寫眞にしめされてゐる。浮彫は四段、いづれも佛の本生をとりあつかつてゐるらしい。浮彫はごくあさい彫りであるが、中國古來の畫像石にみるやうな、平面的手法でなく、やはりガンダラ式の、まるみのある彫り方である。

最上段は、ほんの一部分がのこつてゐるのみである。第二段には左右二つの場面があるらしい。むかつて左の場面では、左端に大きな光背がある。それについて象のあゆむ姿がみえる。象は傾斜面をのぼつてゐるやうすである。象にのつた人物は破損してゐる。象のしたに、すぐ密接して頭巾をかぶつた顔が四つならんでゐる。そのしたの三角形の空間には、身體をよこたへ、ながい頭髮をまへにたれた人物がゐる。定光佛 Dipankara Buddha の足下に頭髮をしいた儒童 Mānava であらうか。肝心の定光佛の部分は破損してゐてみえない。象のうへには騎馬の人物がみえる。

むかつて右の場面には、大きな光背をせおつた坐佛がゐる。その左右には、めづらしいつくりだしをもつた、柱やうのものがたつてゐる。なにか城壁とか宮殿とかの建築物をあらはしてゐるのである。坐佛のしたには小さい人物像がある。佛像のわき、うへのすみに、バルコニのうへからのぞいたやうな人物像がゐる。さうして、そのしたにも坐佛

の大きな光背があり、つくりだしのついた柱がある。

第三段の浮彫帯は、むかつて左に建物がある。そのなかには合掌の立像がある。建物の前面には階段がある。さらに、あちこちに人物や建物が彫ってあるが、破壊がひどいので、まとまった構図はとらへにくい。これらの右の方にも、おなじやうな建物がかすかに見え、城門の扉がとざされてゐるらしい。話がづいて展開してゐるのであらう。第四段には、足をうへにして投下してゐる人物が、からうじてみとめられる。(各層の高約0.60m)

Pl. 5. 前室 東壁 北部

木造の天井、梁、扉にかこまれて、石窟のやうにみえない。ことに寫眞下部には、石塊の散亂した床がみえ、二階の床とはおもはれない。むかつて左うへには明窓がみえ、したには拱門、そのわきには浮彫の神像がみえる。東壁も北壁もひどく風化してゐる。しかし、第八洞よりはよほど保存がよく、東壁の浮彫帯の秩序だったさまを、想見することができる。(壁高約6.55m)

Pl. 6. 前室 東壁 北部中段 浮彫本生

剝落した岩壁に、おどろくほどの鋭さで、浮彫の斷片がかがやいてゐる。寫眞左端、たてにとほった波狀唐草文帯がみえる。北壁との境である。浮彫帯は半パルメット波狀文、三つ葉環つなぎ文、半パルメット並列文帯によつて、よこにしきられてゐる。よこの唐草文帯がはじまるところに、それぞれ蓮華文がある。こゝにあらはされてゐる浮彫帯は、ちょうどPl. 4と同高の最北部にあたつてゐる。うへの段は合掌した坐像が三つだけのこつてゐる。背なかになにか花瓣狀の放射があり、それがあたかも光背のやうになつてゐる。ガンダハラや、中央アジアにも、これに似た光背をみる。¹⁾

したの二段の浮彫は、たての枠でしきられ、物語の展開をあらはしてゐる。第二段左の場面は、まんなかに簡単な門があり、扉はとざされてゐる。その左には、なゝめに傾斜した臺のうへに、横臥した人物がある。そのよこに、これをみて双手をあげた人物がある。したの枠ぐみは牆壁のつもりであらう。この場面は『六度集經』(大正大藏經、卷三、p. 20) 卷四にみえるムウガパッカア Mūgapakkha (慕魄) 本生をあらはしたものとおもはれる。

むかしベナレス(波羅奈) Bārāṇasi にムウガパッカアとよばれる王子がゐた。十三歳になつてもまだ一言も、ものをいはないので、國王も王妃も大いに心配してゐた。あるとき、

バラモンをよんで、その原因をたづねると、バラモンのいはく、これはきはめて不祥なことである、後室に子のないのはこのためである、いま太子を生きうめにしてしまへば、あとによい嗣子がえられるであらうと。そこで國王も妃も涙ながらに太子を棺にいれ、墓にうめることにした。ところが、そのとき、ふしぎにも太子は墓掘り人夫に突然聲をかけた。しかも、その態度といひ、音聲といひ、實にみごとであつた。國王は大いによろこび、これで嗣子がえられたといつた。しかしながら、太子は過去世において、太山地獄の苦を體驗したため、かくも十三年間沈黙しとほしたのである。これからは沙門 śrāmaṇa になつて世をおくりたいと、その決意をかたつたのである。

いま浮彫にあらはされてゐるのは、ムウガパッカア太子が棺のなかに身をよこたへてゐるところである。この門は墓門であり、墓域である。双手をあげておどろいてゐるのは、墓掘り人夫であらうか。右手にたちあがつてゐる裸形の人物は發言した太子であり、その右にすわり、左にうごいてゐる腰衣の人物は、下賤の墓掘り人夫たちであらう。これと同様な場面は、中央アジアのキジル石窟の壁畫にもあらはされてゐる。²⁾

最下の段も二つの場面がみえる。むかつて左は、宮殿のうちに尊貴な人物が侍者をしたがへてすわつてゐる。そのまへに頭をしたにした投身の人物がみえる。話のすじはまったくわからない。(層高0.60m)

¹⁾ A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Tome II, Fig. 459. A. Stein, *Ancient Khotan*, Pl. LXXXIII, LXXXVII. A. Stein, *Serindia*, Pl. VIII, XV.

²⁾ A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 159.

Pl. 7. 前室 東壁 北部上段 浮彫本生

やはり北壁に接する部分で、前者Pl. 6のうへにつづく二段である。たての半パルメット波狀文帯は、ちょうど北壁の佛龕に接し、その佛像火焰光背とのあひだに、餘分の空白ができるので、こゝだけは二本の波狀文をからませて、環つなぎ文にしてゐる。うへの浮彫帯は比較的よくのこつてゐる。あまりあつくない浮彫手法で、供養天人らしいものをならべてゐる。いづれも高髻で、立像、坐像いろいろあるが、天衣が幅ひろく、そのはしがふとく垂れてゐる。本生談をしめすのであらうが、話のおもむきはあきらかでない。したには半パルメット並列文帯がある。(層高0.58m)

Pl. 8. 前室 東壁 北部下段 浮彫本生

こゝにも浮彫帯の殘缺がみられる。Pl. 6にしめした浮彫

帯のしたにあたる。本生の内容はあきらかにしがたい。上段には臺座に坐した佛か菩薩,とにかく尊貴の像があり,その左右には,それにつかへる人たちがゐる。そのしたの段では,屋形龕らしい形のうちに,さまさまの人物像がぼんやりのこつてゐる。(龕高約 0.60 m)

Pl. 9. 前室 西壁 北部

この図版は Pl. 5 の前室東壁に對應する。小さい佛龕列を上下にかさね,千佛龕を構成してゐる。第八洞とくらべて,はるかによく保存されてゐる。これで北壁のひどく破損してゐるさまが,よくうかがはれる。寫眞の右端に明窓と門口西壁がみえる。(壁高約 6.85 m)

Pl. 10. 前室 西壁 北部下段 千佛列龕

西壁千佛龕の下部である。小佛龕の下縁には,蓮華文帶と唐草文帶とが,交互にあらはれてゐる。坐佛は,シムメトリックの通肩と片腕を衣端でつくんだものとを,交互ににおいてゐる。寫眞右下には二倍高の佛龕がある。尖拱龕で,脇侍が左右にたつてゐる。この倍高の佛龕は,西壁の左右上下とまんなかに,つごう五個配置されてゐる。第八洞では,壁面の全貌があきらかでなかったが,第七洞ではなほさら全貌はわからず,むしろ細部の浮彫がよくのこつてゐる。(大龕高約 1.10 m)

Pl. 11. 前室 北壁 中央 明窓

うへに明窓,したに門口の一部がみえる。明窓を通じて,主室北壁の佛像がみえる。木造の天井,柱,梁は,もちろん近世のものである。北壁はまったく表面があられてゐて,浮彫の存在がみとめられない。しかし,明窓と拱門とのあひだには蓮上化生がいっぱいあつたらしい。(明窓幅約 3.60 m)

Pl. 12A. 前室 北壁 佛立像 (西部 上段)

B. 前室 北壁 佛立像 (東部 上段)

C. 前室 北壁 菩薩立像 (西部 中段)

D. 前室 北壁 菩薩立像 (東部 中段)

A, B. この二枚の寫眞は明窓の左右の壁である。明窓に對して左右相稱に大きな像がたつてゐる。破壊がはなはだしく,頭部はすこし木造天井にかくれて,からうじて佛の像だといふことがわかる。察するに,片手は胸にあてゝ舉手形,片手は衣端をにぎつて,腰のあたりににおいてゐるらしい。東がは(B)の方がやゝ保存よく,肩,腰,兩足のかまへが堂々としてゐる。舉身光背はよくのこつてゐる。外縁に

は火焰飾,つぎは半パルメット並列文,肩にはまた火焰飾がある。頭光の外がはに半パルメット並列文,なかは蓮華文がある。この立像のわきには,小さく脇侍をあらはし,さらに明窓にちかく,片手をふりあげた神像らしいものを彫つてゐる。その圓光と幅ひろい天衣とが,あきらかにのこり,この像の躍動するボウズが,あきらかに暗示されてゐる。西がは(A)は,まったくこはれて,光背の一部がみえるのみである。(各像高約 3.00 m)

C, D. 前圖版(A, B)のしたにつぎ, つぎの圖版 Pl. 13 のうへにある壁面である。立像が左右相稱になつてゐるが,破壊はますますひどく,菩薩らしいことが,やつとわかる程度である。寶冠の輪郭,寶冠から左右にひるがへる紐,それに天衣の一部がみとめられる。兩手の姿勢は全然わからない。兩足のしたには臺座がかすかにみられる。東がは(D)では,立像の左わきに,三體の供養天人が合掌跪坐する姿をみる。全體として,東がはがよくのこつてゐるのは,この前室北壁の通性である。(各像高約 2.70 m)

Pl. 13A. 前室 北壁 多面多臂神像 (西部 下段)

B. 前室 北壁 多面多臂神像 (東部 下段)

これは拱門の左右の壁である。寫眞の下部に土や石塊の見えるのは,二階の床である。北壁は,一般にひどく破損してゐるが,この部分には左右相稱に坐像の浮彫殘缺がある。三面六臂の神像で,すわつてゐるらしい。さうして,つぎの拱門内の神像(Pl. 14, 15)と相應じてゐる。(各像高約 1.50 m)

Pl. 14. 拱門 東側 (前室より)

寫眞左に前室北壁の拱門,右に東壁の浮彫帶がみえる。拱門側壁は上半のみで,下半は二階の床にかくれてみえない。こゝでみると,前室北壁がいかに風化して,なくなったかといふことが,よくわかる。東がはの神像は,ほとんどこの左半をうしなつてゐるのである。また修理の杣孔がいたましくのこつてゐる。(神像高約 1.80 m)

Pl. 15. 拱門 西側 (前室より)

前圖に對應する寫眞である。拱門西がはの壁のほか,拱門天井の浮彫がみえる。浮彫のまるみが,これでよくわかる。拱門のふち,南がはの破損ははなはだしいが,もとは北がはと同様に,一條の拱梁が縁どつてゐたのであらう。(神像高約 1.75 m)

Pl. 16A. 拱門 東側

B. 拱門 西側

拱門の側壁には、シムメトリックに浮彫がある。内がはの北かどに重層柱 (Rub. III E-II) がたち、その南に三面多臂の神像がある。拱門天井の頂上には大蓮華があり、それを取りまいて二體づきの飛天、さらに東西についで、二體づきの飛天があらはされてゐる。頂上大蓮華の中心からかんがへると、前室がはの破損の大きさがわかるであらう。飛天は、いづれも優美である。高髻の頭に圓光背があり、自由な姿態でとんでゐる。(像高 1.75 m)

Pl. 17. 拱門 東側 多面多臂神像

三面四臂の神像である。上身は裸形、やはらかい、うすい下裳が、をりまげたふとい脚にまとひついてゐる。腰にはひものはしがたれ、そのひだは、たゞの刻線であらはされてゐる。前室北壁が風化のため、左半身は破損し、左手はうしなはれてゐる。右の第二手は日輪をさしあげ、第一手は胸にあげてゐる。その指は第二指をのばし、第三指以下をかすかにをり、第三指の指端を第一指にふれさせてゐる。きゃしゃな手である。これに反し、まるまるとした腕はつよく肱をはってゐる。中央の頭には華美な寶冠をいたゞくが、顔は冠の中心より、すこしはづれ、右したをむいてゐる。(Rub. I H) まるい大きい顔はあさく彫られ、眉と目は大きい。層は兩端にやや反りがある。左右の顔はそれぞれよこをむき、頭にとがり帽をかぶつてゐる。大きく、やさしい中央の顔にくらべて、小さいが、つよく男性的である。ことに左の顔は脛に角ができ、口に牙がある。胸の瓔珞は入念に彫られ、腕の瓔珞はかんたんな刻線であらはしてゐる。肘にかゝった天衣の曲線が、腕の表現に微妙な表情をあたへてゐる。(頭高約 0.64 m)

Pl. 18. 拱門 西側 多面多臂神像と層柱

神像のうちがはに重層柱がたち、第八洞拱門とまったくちがった構成である。神像のしたには門神の立像があり、修理した頭部がみえてゐる。重層柱は三層である。うへにアカンサスやうの承花^{うけはな}があり、したには立つた侏儒が層柱をさしあげてゐる。各層には三角垂飾の平屋根があり、そのあひだには、二人づきの童子形がみえる。手をあげ、足をうごかして、おどつてゐるやうである。アカンサスのあひだには、合掌の化生 *aupapāduka* が上半身をあらはしてゐる。(層柱各層高約 0.55 m)

Pl. 19. 拱門 西側 多面多臂神像

三面六臂の神像である。坐像の右半身は破損がはなはだしく、胸の瓔珞もほとんどのこつてゐない。だいたい東がはの像 (Pl. 18) とおなじであるが、こゝのは六臂像である。寶冠をつけた中央の顔は、毅然たる視線を、うちの方におくつてゐる。(Rub. I G) とがり帽をかぶつた左右の頭は、やさしく老けた面相を呈してゐる。左の第一手は胸に、第二手は上にあげ、日輪やうのものをさしあげてゐる。第三手は肘を直角にまげてしたにたれ、人さし指をのばして地面をさしてゐる。三本の手の不思議なとりあはせは素朴であり、かつ量感に満ちてゐる。中央の顔の洗煉された典雅さとならんで、彫刻的に複雑な様相がみとめられる。いま、これを第八洞拱門の神像と比較すると、美意識の變化はおほひがたい。(頭高約 0.60 m)

Pl. 20. 拱門 西側 層柱

拱門をはいると、うすぐらい主室になる。拱門の側壁を主室の方からみると、重層柱が兩がはにたつてゐるが、東がはの層柱はひどく破損してゐる。この寫眞では、西がはの層柱が拱門の側壁だけでなく、主室南壁の面にもおなじやうにあらはれ、隅がけにたつてゐることがよくわかる。柱頭のアカンサスの承花は、なかなかみごとな彫りで、石の表面のうつくしさが、いきいきとかじやいてゐる。各層の、三角垂飾のある表面が、浮彫一般の上表面となり、童子たちの彫刻の、いちばん高い部分と一致してゐる。だから、童子の浮彫は、身體の大きさにくらべて彫りがふかく、まるまるとした、豊満なからだにしあげてゐる。南壁西部の第二層佛龕と、第一層の文殊坐像も、こゝにみえてゐる。浮彫のさまざまな手法が、こゝからよくうかがへる。(Rub. III E, F) (層柱各層高約 0.55 m)

Pl. 21. 拱門 西側 門神像

寫眞の左隅には土壁がたつてゐるが、これは前室とのあひだにある壁である。こゝにみえる門神は、身體はほとんどとけてゐるが、頭部はわりによくのこり、まるい顔とたちあがつた頭髮とが特徴的である。たかい臺座があつて、したは後世の塼床になつてゐる。重層柱の基部がよくわかる。右手をあげ、左手を腰にあて、兩足をひらいた神像が、層柱をおしあげてゐる。床にちかく補修の杣孔がみえてゐる。(像高 2.25 m)

Pl. 22A. 拱門 西側 層柱 第三層 東面

B. 拱門 西側 層柱 第三層 北面

重層柱の各層には、おどつてゐる童子二體づゝを、くみあはせて浮彫にする。このテーマは、第八洞になかったが、第九洞、前室北壁の重層柱に模倣されてゐる。しかし、この洞の浮彫は、第九洞のものよりはるかに優秀である。

A. 二體の童子は、上半身をまったくシムメトリックに密接させてゐる。片手をあげて屋根をうけ、片手を胸にあてて蓮の蕾をもつてゐる。丸顔で、頭髮が額にまき、眉の毛も眉間にまいてゐる。むかつて左は、めづらしく舌をたれてゐる。ふてぶてしい面がまへである。胸には、弧狀の線刻によって、頸かざりのあることをあらはしてゐる。この上半身に對し、下半身のボウズは兩者まったくちがつてゐる。むかつて左は右足の膝をまげ、左足はつばつてゐる。右足の踵をすこしあげてゐるのもみのがせない。むかつて右の像は、地をけつて、かるく跳ねたかたちで、左足はなゝめにあらはされ、右足は膝をつよくまげてゐる。つまり、むかつて左は豪健、むかつて右は輕快である。この變化には興味のつきないものがある。(第三層高約 0.55 m)

B. これは(A)とまったくちがつて、二體はおもひおもひの姿態である。しかも、比例的な調和が、心にくいほごにしめされてゐる。むかつて左の像は顔をそとにむけ、左手をあげて屋根をうけ、右手は肘をまげて腰にあてゐる。豐滿な胸は正面にむけてゐるが、そのしたの腰は、はげしくひねって横むきになり、右足で小さい臺を踏む。左足をうしろにひいて、やゝ踵を浮かしてゐる。つまり顔と上身と下身とが、三つとも別の方向にむかつてゐる。これに對し、むかつて右の像は、兩手で水瓶をもち、これをさかさまに倒し、したにゐる獅子に水をそゝぐすがたである。左足は獅子の胴をふみ、右足は浮かして足さきで立つてゐる。だから、兩者の下半身のみをみると、大體シムメトリックのボウズである。これは(A)の上半身が、シムメトリックな形式をとつたのとは反對で、きはめておもしろい。また兩方が、たがひに反對の方向をむいてゐるのも興味がある。さうして、この二像のおもひおもひのボウズを統一するのは、左の像の高くあげた手である。この手を頂點として、兩者の外がはの足をむすぶ、二等邊三角形の構成が注目される。(第三層高約 0.55 m)。

Pl. 23. 明窓 東側

明窓の東西側壁には、相照應する浮彫がある。いま東がはをみると、主室になゝめむきの人像柱 caryatid がある。菩薩ふうのうつくしい立像である。第八洞にも同様な立像

があるが、そこでは合掌形である。(本書、第五卷、Pl. 80, 83) これは片手を胸にあげ、片手をたれてゐる。第八洞では張りつめた力が、直立の姿勢にみちてゐたが、こゝではやゝよわくなつてゐる。立像の天衣と圓光にそつて大きな樹があり、その枝が明窓の天井いっぱいにはろがつてゐる。圓形の素朴な葉がゆたかについてゐる。樹下は二段になつて、修道僧が上下に二人すわり、すそには怪奇な山峰が、あたまをならべてゐる。峰のあひだに、單純な樹木がたつてゐる。この山岳の手法は、漢魏の博山爐などにみるものであるが、中央アジアの壁畫にも、これに似た山形がある。明窓の一方には木造の柱、梁、桁がならび、そのため浮彫の一部がかくれてゐるのはおしい。(Rub. IV A) (立像高 2.00 m)

Pl. 24. 明窓 西側

東側壁とまったくおなじ意匠である。樹木も、修道僧も基部の山岳形も、おなじである。その浮彫のもつともたかい面はたがひに共通し、そのことは人像柱の菩薩にもおよんでゐる。浮彫はあまりふかくない半肉彫である。そのため、穏和ななだらかさ壁面全體にたゞよつてゐる。第八洞よりも表現がよほど柔和である。(Rub. IV B) (立像高 2.10 m)

Pl. 25. 明窓 東側 天人立像

立像は寶冠をいたゞき、たかい簾座のうへに立つてゐる。兩足はひらいてゐるが、おとなしく前にむいてゐる。第八洞の足の姿勢とちがふ。頭に比して身體が小さく、指や手の甲は大きい。全體として、第八洞ほどの、凛としたつよさがない。むかつて左には、主室南壁の諸龍、右には明窓側壁の修道僧の像がみえる。これらの浮彫の高低の變化が、この寫眞でよくわかるであらう。(立像總高 2.75 m)

Pl. 26. 明窓 東側 禪定比丘像 (上)

明窓の東側、天井までのびあがつた樹木のしたに、二人の修道僧がゐる。そのうへの一體である。あさい彫りであるが、うつくしい。顔も身體もまるい。頭から僧衣をすっぽりとかぶつてゐる。僧衣は、なほ全身をつゝみ、足も腕もすっきりくるみ、わづかにあらはれた胸には、內衣のはしがのぞいてゐる¹⁾。衣文は大まかな線刻である。いかにも溫潤玉のごとき修道僧である。ひくい座牀のうへで結跏趺坐してゐるのであらう。樹枝にかけたのは鉢囊であり²⁾、そのしたの水瓶は飲料水をいれてゐるのであらう。牀下にぬぎそろへた靴がみえる³⁾。そのむかつて右にあるのは座牀の束であらう。(像高 0.72 m)

雲岡石窟第七洞

¹ これは安陀會 *antarvāsa* とよばれるべきであらう。全身をつまんだものは鬱多羅僧 *uttarāsaṅga* であらう。『摩訶僧祇律』(大正大藏經, 第二十二卷, p. 413) 中國では前者を「裏衣」といひ後者を「上衣」ともいふ。

² 鉢囊は、いつも比丘のもちものとして知られてゐる。

³ 草履をうかつことは『十誦律』(大正大藏經, 第二十三卷, p. 183) にみえる。

Pl. 27. 明窓 東側 禪定比丘像 (下)

おなじ側壁にある、したの方の一體である。ほとんどおなじであるが、右肩にかゝった大衣のたるみが大きく、いかにも應揚せまらぬふうがある。これは座牀がなく、座褥のうへにすわつてゐる。鉢囊と水瓶とは、おなじやうにある。總じて、この浮彫はあさく、背面からゆるやかに浮きだし、自然のまるみをもつてゐる。輪廓において第九洞本生談浮彫にみるやうな垂直な彫りこみはない。一文字にむすばれた口と、よこの一線よりなる瞑想的な眼はつよい修道僧の意志を藏して、しづかである。まさに静寂林中の禪定比丘である。(像高約 0.76 m)

Pl. 28. 主室 北壁 上層龕

北壁は上下二層二龕からなる。この石窟の正面であるから、堂々と大きい。上龕内の五尊像がみえ、天井や東西壁の一部がみえてゐる。中央が菩薩交脚像、その左右が佛倚像、この三者は大體正面にむかつてゐるが、兩端の菩薩半跏像は、これと直角にうちにむかつてゐる。第八洞では上層龕が一倚坐佛、二交脚菩薩、二半跏菩薩であつたが、この洞では、いれかはつてゐる。五尊のうへは楣拱額と帳幕とからなり、そのうへに樂天の列龕があり、三角垂飾帶から格天井にうつてゆく。(龕高 6.45 m)

Pl. 29. 主室 北壁 下層龕

北壁下半である。一大尖拱龕があつて、なかに並坐の二佛を彫つてゐる。すこしなゝめになつて、たがひにむきあつてゐる。ひどくあれてゐるが、二佛並坐であるから、釋迦牟尼佛 *Śākyamuni Buddha* と多寶佛 *Prabhūtaratna Buddha* であることがひない。雲岡でもっとも頻繁にあらはされた像式である。どちらも膝上で手をあはせてゐるものとおもふ。龕傍はとけてしまつてなにもみえない。基壇も浮彫があつたらしいが、のこつてゐるのは、たゞ拱額だけである。左右のわき龕は、いづれも五成の基壇に立像をおさめてゐる。いま佛とも菩薩とも判定がつかないが、第八洞の例よりすると佛であるが、あるひは逆に菩薩であつたかも知れない。

知れない。頭上のかざりもはつきりしないが、かういふはあひに往々みるところの天蓋であらうか。(龕高 6.20 m)

Pl. 30A. 主室 北壁 下層龕 拱額

B. 主室 北壁 下層龕

下層は中央に大きな尖拱龕がある。そのなかには二佛の並坐像がある。すっかり風化し、補修の杓孔のみ、いたましくのこつてゐる。どちらも合手形であつたやうにみえる。火焰の身光のあひだには、二人の供養者の浮彫があり、横笛をふいてゐるらしい。比較的によくのこつた拱額のうちには、交脚佛を中心に、合掌供養者たちの腰をかけた姿がならんでゐる。拱額の上ぶちに、璽絡の羅網を手にしてとぶ天人群がある。のみならず、龕内拱梁にそうて飛天の行列があり、すこぶる豪華な拱額である。第八洞ではすっかりこはれてゐたが、こゝで、だいたいの構成がうかゞへるのは幸である。拱龕左右の上隅には浮彫がある。たくさんの獸が蟠集してゐるのがみえる。たぶん本生談かなにかの一節であらう。(拱額交脚佛高 0.56 m, 下層並坐佛高各 3.40 m)

Pl. 31A, B. 主室 北壁 下層龕 西端浮彫

下層佛龕のだいたいは上述のごとくであるが、左右上隅にも浮彫がすこしのこつてゐる。これはその西の隅である。たくさんの頭をのばした獸——おそらく肉食獸——が、ななめしたにむらがり走つてゐる。寫真右下に膝をまげて身體をよこたへた飛天の一部がみえる。これは璽絡をもつた、拱額内の飛天のうち、もつとも西端にゐるものである。寫真(A)の左端から西壁にまはつて(B)につづく。寫真(B)では合掌した三體の人物があらはされてゐるが、頭部はまったく破損し、手足も満足なのは一つもない。しかし肩から腰、足にかけての造形は浮彫の効果をこゝろえて、なかなかうつくしく、生氣がある。たゞ全體として、なにをあらはすのか明瞭にしがたい。これに應ずる東の隅は、たゞ破損するのみであるが、すこし東壁にまはつたところには、Pl. 48でみるやうに、やはりこれに似たやうな人物が二人のこつてゐる。(左端立像高約 0.75 m)

Pl. 32. 主室 北壁 上層龕

楣拱額をつくり、そのしたに奥行 1.80m の龕を鑿り、五尊像をおさめてゐる。なかの三尊は、いづれも右手を胸にあけてゐる。かなりよくのこつてゐるが、下半身は後補の泥作で、その下裳をつくつてゐる。龕底には本尊交脚菩薩の光

背と、そのそとおほひのやうな唐草かざりとが、みとめられる。楣拱龕の帳幕も、中央部に大きな破損個所がある。
(龕高 5.00 m)

Pl. 33. 主室北壁 上層龕 本尊交脚菩薩

本尊は丈だかい寶冠をいたゞいてゐるが、おしいことに溶けてゐてよくわからない。しかし、三面寶冠であり、三面に大きな蓮華をつくつてゐる。その正面には禪定の佛があつたらしい。蓮華のあひだには小さい唐草があり、こゝに飛天がとんでゐる。冠のひもには玉かざりの彫りがあるらしい。これがうしろでしぼられ、そのはしが耳のうしろにたれてゐる。別にながい裝飾ひもが、大きく光背のうへでひるがへつてゐる。冠のしたに、はみだした頭髪は、整然ととゞのへて、あらい刻線をつけてゐる。まゐり顔は威嚴にみちてゐるが、やはり溶けてゐて、眉目や鼻、唇がきえてゐる。豊かな上半身には、三種の璽がさがつてゐる。腹部から交脚にかけては、後補の塑造ででき、北魏の原状をかくしてゐる。片足づゝのつてゐる臺座は、もと蓮座であつたとおもふ。

この像で、もつとも保存のよいのは、両手である。それはあたかも廢墟に咲く花のごとく香つており、その寫實力の確實さ、理想化の高貴さは、この本尊の全貌を端的にしめてゐる。(本尊高 4.80 m)

Pl. 34. 主室北壁 上層龕 左脇佛倚像

肉髻は破損してゐるが、やゝ伏せたまゐりやさしい顔は、うつくしくのこつてゐる。頸はみじかく、なだらかな肩につゞく。両手はよくのこつてゐる。ことに左手の指は實にうつくしい。蓮座上にのせた兩足はやゝひらいて倚坐し、その膝にはみごとな衣文がみとめられる。衣文は第二十洞大佛にみるごとき隆起線からなる。本尊の舉身光にかさなつて、この像の舉身光がある。外縁は火焰、つぎは飛天、まんなかは蓮華であるが、その彫りはあさい。むかつて右に半跏菩薩像、さらに帳幕のはしに童子がゐる。(像高 4.00 m)

Pl. 35. 主室北壁 上層龕 右脇佛倚像

左脇佛と同形であるが、肩や腹、膝には後補の塑造の衣裳がのこつてゐる。塑造のうへには朱と緑青がぬつてゐるが、はたしていつの補修か斷定できない。左膝と左袖のところからみえる、もとの像の衣文は、膝の方が隆起したひだであるのに對し、袖の方は階段狀のひだであるらしい。肉髻および額は破損するが、まゐり顔は量感があふれてゐる。む

かつて左に半跏菩薩像がよこむきにすわり、帳幕の童子形もみえてゐる。(像高約 3.80 m)

Pl. 36. 主室北壁 上層龕 右脇佛倚像 上身

破損がひどく、當初のおもかけは、やつと目、鼻、唇にしのはれる。たゞ腕と手さきが入念にみがいて仕あげられ、どちらの手にも、三十二相のひとつである「みづがき」、すなはち手足指網縵相 *jālāvanaddha-hasta-pāda-lakṣaṇa* が、明瞭にあらはされてゐる。これにくらべると、北壁以外の諸佛は顔だけ仕あげ、手足までは及んでゐないのである。圓光の蓮華は、やはり平面的であるが、よくのこつてゐる。(頭高 1.12 m)

Pl. 37A. 主室北壁 上層龕 右脇半跏思惟像

B. 主室北壁 上層龕 左脇半跏思惟像

帳幕のかげに、まったくよこむきに彫られてゐる。大きな寶冠をいたゞいた菩薩形である。片足をたれ、片足を膝にのせた半跏像であり、片手を頬にあて、片手を膝においた思惟像である。それを左右まったくシムメトリックに配してゐる。足のしたには大きな蓮座がある。これは第八洞でもいったごとく、たゞしくは太子思惟像である。(像高 A 2.88 m, B 2.74 m)

Pl. 38A. 主室北壁 上層龕 本尊菩薩 光背 西部

B. 主室北壁 上層龕 本尊菩薩 光背 東部

A. 本尊の舉身光はかなり大きい、いまはわづかしかのこつてゐない。寫眞は本尊の右わきをしめてゐる。頭光は中心に蓮華があり、つぎに小坐佛帶、飛天帶があり、最後は舉身光の火焰帶にふちどられてゐる。ところが、この光背では火焰飾のそとに、さらにもうひとつの唐草文帯がある。いま破損してゐるので、その全形をきはめがたいが、(B)にはその東のはしがみえてゐる。要するに、光背のそとを弧形におほふもので、雲岡にもときどきあらはされ、ちかい例は第十三洞の本尊にもある。キジルの壁畫などをみると本尊およびその光背のうへに萎縮した龕形があらはされたり、また花葉が拱形にあらはされたりしてゐる。さういふものの殘存とすれば、一應の解釋はできる。唐草は波狀文であるが、空白をうめる葉形は複雑で、まゐり瘤のやうなものがあつて、こゝから半パルメットの三葉と雌蕊のやうなものがでてゐる。おそらく花瓶の意匠から脱化したものとおもへる。(本尊頭高 1.47 m)

B. むかつて右には帳幕のあつてゐる縁が突出してゐる。本

雲岡石窟第七洞

尊光背をおほふ唐草文帯があさく彫られてゐる。そのしたに、膝をまげた天人とすわった天人とがある。東がはに坐佛の頭部がみえ、そのうへに、さきのとがった火焰光背の一部が、なゝめにあらはされてゐる。

Pl. 39. 主室北壁上層龕 右脇獅子

Pl. 40. 主室北壁上層龕 左脇獅子

Pl. 41A. 主室北壁上層龕 右脇獅子

B. 主室北壁上層龕 左脇獅子

交脚菩薩像の足下に獅子が彫つてある。ほとんど丸彫にちかい形であるが、尻や後肢はまったくあらはされてゐない。ともに大きな口をひらき、舌をたれ、牙をむきだし、中央の方に頭をふりむけてゐる。角ばった大きな目、耳のうへにのびた巻き毛は、人間のふとい眉毛のやうである。ひらたい鼻の形、角ばった顎骨、さらに身體をおほふ巻毛の彫りなど、すべて中國古來の傳統的な手法であり、つよく精力的である。兩足をのばしてたち、胸毛のさきがとがって垂れてゐるのも、寫實ではかんがへられない独自の手法である。(右獅子高1.18 m, 左獅子高1.13 m)

Pl. 42. 主室北壁上層龕 拱額 西半

Pl. 43. 主室北壁上層龕 拱額 東半

大きな楣拱龕の拱額である。三段にわかれ、上段には龕列があり、奏樂の天人を配し、中段には楣拱があり、飛天をおさめ、下段には帳幕があり、弧状にしぼつてゐる。上段の尖拱龕は十四個ある。そのなかの奏樂天人は高髻形で、腰までの上半身があらはれてゐる。すこしづゝ中央の方に身體をむけてゐるが、一定してゐない。楣拱框内の飛天は、みな中央にむかつてとんでゐる。帳幕は、ひきしぼつて獸面飾をおき、そこから紐をたれさげてゐる。(Rub. I c) 幕のひだは、ていねいにあらはし、そのやはらかく、どしりとさがつてゐるさまが、よくうかがはれる。(框高0.58 m)

Pl. 44. 主室北壁上層龕 拱額 (部分)

拱額の中央部である。上段の奏樂飛天は寫真左から、(1)小鼓、(2)腰鼓、(3)横笛、(4)竽、(5)排管(簫)、(6)琵琶がみえる。高樓からみおろすやうな姿勢である。下半身が欄杆によつてかくれてゐるわけである。框内の飛天は、みな框内いっぱい脚をひろげて飛んでゐる。しかし嚴密な左右相稱ではない。飛天の框には、たてに連珠文があさく彫られてゐるが、これも中央アジアの壁畫にみられる意匠である。(上段龕高0.58 m)

¹ Le Coq, *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, Bd. VII, Taf. 14.

Pl. 45. 主室北壁上層龕 拱額 (部分)

拱額の東部である。下段の帳幕には獸面が彫つてある。牙のしたから大きな舌がでゐる。弧状の幕のあひだに飛天が彫つてある。飛天は兩足をよこになげだしてゐる。左手はなにかまるいものをもつて胸にあて、右手は蓮華をもつてまへにだしてゐる。きはめて優美なすがたである。たゞ第八洞の同形飛天にくらべると、身體のいきほひがいくらかよい。これは第七洞全體に通じてみる傾向である。(框高0.58 m)

Pl. 46A. 主室北壁上層龕 帳幕の童子像 (東)

B. 主室北壁上層龕 帳幕の童子像 (西)

帳幕の斜面を利用して彫られた童子像である。第八洞にもみられたが、ボウズはまったくちがふ。こゝでは正面にむき、胸をはり、兩手をたかくあげ、足をのばしてダイヴィングの姿勢である。背中こそみえないが、ほとんど丸彫のごとく、まへからみても、よこからみても、力づよくうつくしい。もともと支輪として、なにかのもちだしをうける意匠であつたものである。こゝでは、その原義はわすれられてゐるが、腕をのばしてうけてゐるだけ、第八洞のそれ(本書、第五卷, Pl. 40)よりは、もとのかたちになにかといへる。なほ、いまはすっかりこはれてゐるが、第九洞、第十洞の前室列柱にも、この意匠がとりいれられてゐた。(本書、第六卷, Pl. 28, 29A) 童子の頭部には三面に半圓形のものがついてゐるが、これは頭髮の一部をのこした、幼童の髮容をあらはしたものであらう。上半身は裸體、二種の璽珞をつけ、腰にはみじかい腰衣をまとひ、中央の圓環で紐をむすんでゐる。さしあげた肘にかゝつて、天衣はうしろに揺れてうごいてゐる。その浮彫的效果が實にすばらしい。(像高A 1.15 m, B 1.10 m)

Pl. 47. 主室東壁上層

Pl. 48. 主室東壁下層

Pl. 47には東壁のうへの二層、Pl. 48にはしたの二層がみえる。各層二龕、整然とならんでゐるが、第一層と腰壁とはすっかり溶解して、なにもわからない。したほどひろくなつてゐるため、第一層の二龕はすこし北によつて彫られ、そのあひだの重層柱は、第三層のものよりやゝ幅がひろいと、西壁と同様であつたにちがひない。腰壁の供養者列像

は、まったくそのあとをとどめないが、うへの方は保存よく、坐佛の列像をへて天井になってゐる。この Pl. 47 には北壁の帳幕がみえ、そのすみに跳躍する休儒像が、ま正面にみとめられる。それに北壁東端の半跏菩薩像も、くらがりのうちにぼんやりとみえる。東壁諸像とくらべて、その大きさを想像されたい。これに對し、Pl. 48 の右方には明窓と門口とがみえる。(壁高 12.55 m, 幅 5.40 m)

Pl. 49. 主室 東壁 第四層

完好な尖拱龕が二つならび、龕内には同形式の坐像が、床上ちかにすわってゐる。むかつて左の北龕はやゝ破損してゐるが、右の南龕には龜裂がある。拱額はわりにせまく、ながく、さうして、つよくうへからおさへられて、實に弾力にとむ。拱額、北龕には十三體の小坐佛を彫り、南龕には十二體の飛天をシムメトリックにならべてゐる。拱額の端にはふつうみるごとく龍の上身があり、その胴はながくのびて拱梁になってゐる。龍の臺は籐几のごとくであるが、實は柱頭のかざりで、柱身が省略されてゐるのである。(本書第五卷, p. 46) 龕内、舉身光のそとには、兩龕とも、合掌跪坐の供養天人を二體づゝ三段に配し、そのうへには飛天一對をあらはしてゐる。飛天はながくのびて、華が香爐をさゝけてゐる。みな粗略な小像であるが、にぎやかであり、うごきがある。さらに兩龕上隅の空間には、合掌した童子の上身が左右に二體づゝあらはされてゐる。

佛龕の上縁と下縁には、帶狀の蓮瓣飾がある。(Rub. II c) 最上層には、南壁とおなじやうに坐像の列像があり、三角垂飾帯があつて、天井になってゐる。寫眞の左右をみると、南北壁がうへほどせまくなり、まへにのめってゐるのがみえる。(第四層高 2.10 m)

Pl. 50. 主室 東壁 第四層 南龕 佛坐像

右手は舉手形とし、左手は衣端をにぎつて腹にあてゐる。顔のつくりが簡素な手法で、實にうつくしい。これに反し、手さきや膝、足の彫りは粗略である。衣文の線刻はごく大まかであるが、この像にかぎつて線刻といふより、断面がレ形になってゐるので、階段狀のひだにみえる。(像高 1.55 m)

Pl. 51. 主室 東壁 第四層 北龕 佛坐像

ひどく破損してゐる。右手はうしなはれ、胸から兩わきにかけて損じてゐる。顔も眉目が損じてゐるのはおしい。南龕とまったく同形式であり、兩足の粗放な彫刻も共通し

てゐる。(像高 1.45 m)

Pl. 52. 主室 東壁 第三層 南龕

楣拱龕のしたに坐佛三尊を彫る。臺座は五成の須彌座であり、その兩わきに獅子の側面形をあさく彫つてゐる。いふべくば、まさに獅子座 *simhāsana* である。大きく口をひらき、目がまるまるとつくられてゐる。全身に彎曲した平行刻線を彫つて、體毛をあらはしてゐる。拱額の中央と菱形部にはシムメトリックに飛天二體づゝを彫り、左右の翼部には合掌の化生をあらはしてゐる。そのしたに帳幕があり、脇侍が合掌侍立してゐる。龕下には半パルメットの波狀文帯が型どほり彫つてある。(Rub. I B) (龕高 2.35 m)

Pl. 53. 主室 東壁 第三層 南龕 佛上身

まるい顔である。頸はふとく、みじかい。鼻と顎とに剝落がある。眼裏の彫りがあさく、そのため眼がやさしい。舉手形のいたんだ右手は指がみじかく、掌がひろく、衣端をにぎつた捻手形の左手も、ふつくらしてゐる。要するに、この像はすこし彫りがあさいが、まるまるとゆたかにあらはされてゐる。(佛頭高 0.42 m)

Pl. 54A. 主室 東壁 第三層 南龕 右脇侍

B. 主室 東壁 第三層 南龕 左脇侍

兩脇侍とも合掌してゐるが、右方はめづらしくも手の甲をあはせてゐる。簡素であるが、ともに三面寶冠である。めづらしく腰の造形がよわく、なんとなくかるく立つてゐるやうである。圓光をおひ、天衣を兩肩に背おひ、そのはしが脇から大きくたれさがつてゐる。右脇侍の蓮座はひくい、二つの肉をもつた雲岡式の花弁からなる。(像高 A 1.17 m, B 1.10 m)

Pl. 55. 主室 東壁 第三層 北龕

楣拱龕のしたに交脚佛中心の三尊を彫る。左脇侍は片手に水瓶をさげ、右脇侍は合掌して立つてゐる。後者は頭部をうしなふほか、左腕にも傷がある。本尊臺座の兩わきに獅子がゐる。これは正面むきの姿勢で、頭だけを本尊の方にむけてゐる。かなり無理な姿勢であるが、雲岡では一般的な形式である。ことに兩脚を左右にはり、三角形の胸毛をたれたところは特徴がある。稚拙といへば稚拙であるが、活力にみちてゐる。拱額にはシムメトリックに飛天を彫り、兩端翼部には合掌の化生、さらに楣拱の上隅にも合掌の化生を彫つてゐる。まるい圓光をおひ、ひろがつた天衣を

雲岡石窟第七洞

背おふてゐる。帷幕も南龕同様、かなり厚ぼったく、重々しく彫つてある。(龕高2.35m)

Pl. 56. 主室 東壁 第三層 北龕 佛交脚像

右手を舉手形にした交脚佛である。この形式は西壁にもあり、第八洞東壁にもみられる。さらに第九洞前室西壁、第十洞前室東壁にも彫られてゐる。鼻さきと顎の傷は美しい。頭部にくらべて胴がすこし小さく、力がたりない。衣文は刻線でなく、レ形でいくらか階段状にみえるし、膝の衣文は純刻線とレ形断面のひだとを交互においてゐる。(像高1.75m)

Pl. 57. 主室 東壁 第三層 北龕 左脇侍

頭に寶冠をいたゞき、右手を胸におき、左手に水瓶をもつ。眉と目の彫りは明快である。まるい蓮座のうへに立つてゐる。この蓮座は右脇侍になく、南龕右脇にあり、層柱をはさんで對應してゐる。(像高1.05m)

Pl. 58. 主室 東壁 第三層 中央層柱

左右兩龕のあひだにある四層の重層柱である。いたゞきに覆鉢形があり、これをついで半パルメットの承花がある。まさしく層塔である。各層には小佛が並坐してゐる。柱のしたには、まるまるふとった侏儒が、兩手で柱をさしあげてうづくまつてゐる。胸のふくれたのは、さしあげた手に力をいれてゐるためであらう。拱門の層柱のやうに、立ちあがった侏儒より、この方が本來のすがたである。(Rub. III A) (層柱高1.75m)

Pl. 59A. 主室 東壁 第三層 北柱侏儒

B. 主室 東壁 第三層 南柱侏儒

第三層には兩端、つまり北壁および南壁に接するところに重層柱があり、これをさしへて侏儒像がある。侏儒は兩手をあげてうづくまつたり、ひざまづいたりしてゐる。北端のは足が風化して、なくなつてゐるが、筋肉がたくましく、もつとも均衡のとれた體格をしてゐる。南端のは隅で、餘裕がないためであらうか、うづくまらず、足をそろへて、ひざまづいてゐる。ひもかざりを肩からX字形にかけてゐる。(像高A 0.62m, B 0.60m)

Pl. 60. 主室 東壁 第二層 南龕

第二層は尖拱龕であるが、尖頂がなく、圓拱龕のやうになつてゐる。龕内には床上ちに坐佛があり、その兩わきに

は二段の供養者がゐる。下段は二體、上段は一體、ともに合掌長跪のすがたである。頭に胡帽ともいふべき腰折れ頭巾をかぶり、大きい折り襟と窄袖のコットをきてゐる。そのうち、三體は、いま頭部をうしなつてゐる。この俗體の供養者たちをみると、佛傳中の一節、たとへば第八洞のやうな、商主歸依の場面をあらはすとおもはれるが、あきらかでない。供養者のうへに飛天が二體づゝ彫られてゐる。せまい空間で、随分無理をしたからだつきをしてゐる。坐佛の手はもぎれ、腰はすっかり溶けてゐる。

拱額には小坐佛十體をあらはし、拱端には龍を彫る。めづらしいのは北龕とのあひだで、龍頭をからませてゐる。それからこの龍身が、渦卷柱のうへにたつわけであるが、そのあひだに、鋸齒文のある斗があるのは注意される。これは中央アジアからガンダアラにかけて、ひろくつかはれた柱頭飾である。¹⁾(龕高2.05m)

¹⁾ A. Stein, *Serindia*, Vol. IV, Pl. XVII. A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhara*, Tome II, Fig. 323. J. Barthoux, *Les Fouilles de Hadda*, Figs. 7b, 8a.

Pl. 61. 主室 東壁 第二層 南龕 佛上身

かなりあれてゐる。舉手形の右手も缺損してゐる。捻手形の左の手くびもない。左眉と鼻とに傷がある。また腹部以下もひどく破損してゐる。しかし、それにしても實に立派な佛像である。目がほそく、口が大きく、耳がしっかりしてゐる。光背のある壁面も、かなりあれてゐる。(頭高0.44m)

Pl. 62. 主室 東壁 第二層 北龕

この邊の壁面はひどく溶解してゐる。本尊もとけ、右脇侍もなくなつてゐる。わづかにのこつた本尊の上身も、かなりいたんでゐる。たゞ左わきの脇侍、簾几に腰をおろした老人像がよくのこつてゐる。うへには飛天が二體づゝある。拱額は、中央に合掌する童子像を彫り、その左右シメトリックに飛天を配してゐる。(龕高2.10m)

Pl. 63. 主室 東壁 第二層 北龕 左脇侍

簾几に足をそろへて坐してゐる。右手は破損してゐるが、左手はすうりとのばして膝においてゐる。身體はほそく、すんなりとして、膝にいたる長衣をつけてゐる。袖は窄袖である。頭部は老人ふうで、頭がながい。高髻をゆひ、目がくぼみ、獅子鼻で、頬の肉が落ちてゐる。バラモン道士をあらはしたことはあきらかであるが、はたして佛傳中のなにを意味するかは不明である。しかし、商主歸依にちかい

物語で、この洞に關係のありさうなものをかんがへると、西壁のウルヴィルヴァのカシヤパ Uruvilvā Kāśyapa 三兄弟を歸信させた一節かとおもふ。たぶんカシヤパ仙 Kāśyapa の一人であらう。(頭高 0.24 m)

Pl. 64. 主室 西壁

西壁の全四層と、最上層の坐佛列龕と、そのうへの天井がみえ、また第一層のしたの荒れた腰壁がみえる。腰壁には供養列像が、輪郭だけをのこしてゐる。各層をわかつ蓮瓣文帯、唐草文帯の變化が、こゝで一目瞭然である。ことに第一層したの、三つ葉環つなぎ文は、第七、第八洞を通じて、この部分がいちばんよくのこつてゐる。それに北壁の一部、南壁の大半もあらはれてゐるので、その關係もこれでよくわかるであらう。主室の高さに比して、奥行がいちじるしくあさい。また南壁の保存にくらべて、北壁の破損がいちじるしく目だつ。第一層北龕の本尊右手したに、小さい破れ目がみえる。この穴は第八洞東壁第一層北龕(本書、第五卷、Pl. 71)に通じ、この二洞のあひだの壁が、いかにうすいかといふことに驚かれる。(西壁高 12.45 m, 幅 5.00 m)

Pl. 65. 主室 西壁 上層

西壁第三、第四層がみえる。第四層はいづれも尖拱龕、第三層は楣拱龕。第四層では龕傍に簾几がみえ、第三層では層柱のしたに、うづくまつた侏儒像がある。北壁の龕の大きさ、奥行のふかさも、これでよくうかがへる。(第四層高 2.18 m, 第三層高 2.30 m)

Pl. 66. 主室 西壁 下層

西壁第二層、第一層と最下の腰壁がみえる。第二層は尖拱龕、第一層は楣拱龕だが、南龕だけ異例の龕である。龕傍は、第二層は渦卷の柱だが、第一層は大きな層柱である。この層柱には侏儒はゐない。腰壁は、この寫眞によつて、供養者の数が九體であつたことがわかる。いくらか頭をうちにむけてゐたかもしれぬが、⁷だいたいは正面むきの立像であつたとおもはれる。⁸合掌か、あるひはなにか兩手にものをさし上げてゐるやうすである。(第二層高 2.06 m, 第一層高 2.10 m)

Pl. 67. 主室 西壁 第四層 北龕

尖拱龕のなか、坐佛が床上ちに彫られてゐる。右手は舉手形、左手は手首をたて、衣端をにぎつた捻手形である。舉身光のわきは、三段にわけて、合掌の供養天人をおくが、

うへ二段はひさまづき、した一段は立つてゐる。頂上には飛天が左右一體づゝ相より、蓮華の蕾のやうなものを、本尊の頭上にさし上げてゐる。拱額には中央に禪定の小坐佛があり、その左右に八體づゝの高髻天人がひさまづいてゐる。合掌形のほかに、片手をたかくあげてゐるものがある。たぶん、蓮華の蕾かなにかをさし上げて、供養してゐるのではあるまいか。拱端の獸形は、ひくいところにふりむいて立ち、簾几状のものをふんでゐる。いま北壁に接する部分は、はなはだしく破損してゐる。(龕高 2.14 m)

Pl. 68. 主室 西壁 第四層 北龕 佛上身

よこにはしる岩の層がよくみえる。まるい顔の左がはに、たてにとほつた岩の龜裂があり、それが胸をとほり、左足におよんでゐる。眉梁も眼瞼もあまりきはだゝず、やんはりとした表現である。耳朶の表現もあまりするどくない。頭部は奥ふかく、しかも入念に仕あげられてゐる。これにくらべると、右手は角ばつて生氣がない。(頭高 0.47 m)

Pl. 69. 主室 西壁 第四層 南龕

北龕とまったくおなじで、保存はよりよい。たゞちがふのは拱額の彫刻である。中央にやゝ大きな禪定佛を彫り、その左右に同型の坐佛を、六體づゝ密接に彫つてゐる。左右の坐佛はそれぞれすこしづゝ、中央佛の方をむいてすわつてゐる。本尊坐佛は、南龕とはすこしちがひ、するどい。結跏した兩足がひくい、しかも直線的で、安定感がずっと大きい。左手は膝のうへにおいた俯手形である。龕内左右の供養者小像は北龕におなじである。なにかをさしあげた頭上の飛天も同様であるが、この方がのびのびしてゐる。(龕高 2.15 m)

Pl. 70. 主室 西壁 第四層 南龕 佛頭部

左の目に傷がある。眉にはべつに線刻をくはへてゐないが、かなりするどい。瞳を點じてゐないのに、瞳の光を感じさせるのは、雲岡彫刻の非凡な特色である。目と唇とが微笑してゐる。手の指と指とのあひだに、網縷相の水掻きがみとめられる。(頭高 0.47 m)

Pl. 71. 主室 西壁 第三層 北龕

Pl. 72. 主室 西壁 第三層 北龕 佛交脚像

楣拱龕のしたに交脚三尊像を彫る。交脚佛は四角な座にすわり、型のごとく右手は舉手形、左手は衣端をにぎつて腹にあてゐる。左右の脇侍はほとんど横をむき、龕内に立

雲岡石窟第七洞

っている。座の両側には、獅子がま正面にあらはされ、首だけを本尊の方にむけてゐる。胸毛をそろへ、まんなかに稜線ができてゐるのは、雲岡獅子の特色である。顎が大きく、からだがつんぐりしてゐる。楣拱額も定制があり、框内に飛天、左右の翼部に合掌天人の上半身がある。帳幕もなかなかしっかりした表現である。傍柱はなく、左右に侏儒のさげした層柱があるのみである。龍のむかつて左手の岩に龜裂があり、帳幕の一部が破損してゐる。（龍高2.30m）

Pl. 73. 主室 西壁 第三層 北龕 佛上身

豊満な身體に、まるい顔である。眉には刻線がいてある。眼はするどくとがってゐる。眼瞼と鼻端の傷はまことにおしい。肘はうすく、やはらかさうである。右手の指も掌も入念に彫られ、観るものをつよくひきつける偉大な静けさがある。頸には一條の横線が刻してある。（頭高0.47m）

Pl. 74. 主室 西壁 第三層 南龕

楣拱龍のうちに、五成の須彌座にすわる佛の三尊を彫る。龕内左右の脇侍は、わりにあさく彫られてゐるが、顔だけはやゝふかく彫られ、正面をむいてゐる。上身はまへにかたむき、頭部はさらにかたむき、ふかい彫りになってゐる。しかも、その顔はすこしねちて、正面の方にむけられてゐる。いづれも胸に両手をあて、蓮の蕾をもつてゐる。須彌座の兩わきには獅子が頭をのばし、上身だけをあらはしてゐる。頭は側面形であるが、顎が大きく特色があり、胸毛も南龕同様にそろへられて、稜線になってゐる。拱額内の四體の飛天は濫刺とし、左右翼および左右上隅の供養者も生氣がある。（龍高2.37m）

Pl. 75. 主室 西壁 第三層 南龕

坐佛本尊は右手が破損してゐる。とこの顔、豊満な身體の佛像である。ことに膝にあつみがあつて堂々としてゐる。捻手形の衣端をもつた左手が、ながながとあらはされてゐる。それに、衣のひだがこまかく、左腕にかゝつたところをみると、ひくい階段と刻線とが交互におかれて、實に整然たるものである。（龍高2.37m）

Pl. 76. 主室 西壁 第三層 中央層柱

南北兩龕のあひだにはさまれて重層柱がたつてゐる。四つの層には、いづれも二佛がならび坐し、頂上には形のよい半パルメットの承花があり、基部には肥満した蹲居の侏儒

像がある。全體の釣りあひがよく、みた目に快い彫刻である。承花のあひだの覆鉢形は小さく、しかも、なにか花の蕾をあらはすかのごとき刻線がみえる。この洞には、つがう六體のうづくまつた侏儒像があるが、これはとくに入念に仕あげられてゐる。まるまるとした肉體の均衡がよく、顔もうつくしい。一文字の刻線からなる目、やゝつりあがつた、しかし、ひきしまつた口もとは、その左右手足の力のいれかたとともに、すこしもすぎがない。それに璽珞のかざり、ひろい腰衣、肘から左右にひろがつた天衣など、實に悠然たるものがある。この圖版をみると、南北兩龕にみる獅子のちがひが、よくあらはれてゐる。（柱高1.71m）

Pl. 77. 主室 西壁 第二層

南北とも尖拱龕であるが、頂點はまるくなつてゐる。坐佛は同形式で、彫法もひじやうによく似てゐる。しかし、おなじ作者とはいひがたい。むかつて右、北龕の佛は、ひだの溝を大きくふかく彫る傾向があり、眉梁にも刻線があり、掌の刻線もつよく、指の表現にもくせがある。右手はどちらも舉手形である。左手はどちらも衣端をとりながら、捻手形と俯手形にわけてゐる。いづれも後世に玉眼を嵌入したので、いま、うつろの圓孔が眼をきづいてゐる。脇侍の形式は左右でちがひ、北龕は簾几に坐した合掌像一對、南龕は左右三體づきの俗形跪坐像である。北龕の拱額には飛天が彫られ、そのうち四體は童子形、他は高髻形である。南龕の拱額には跪坐合掌した高髻天人が、シムメトリックに彫つてある。總數十一體。(Rub. I v) この層の上縁は半パルメット波狀文、下縁は半パルメット並列文 (Rub. II v) がはしつてゐる。（第二層高2.10m）

Pl. 78. 主室 西壁 第二層 北龕

坐佛は豊満な身體で、偏袒右肩。その衣文の線刻はかなりふとく、また密である。左腕や膝のひだは、交互にはしる強弱の二線からなつてゐる。左胸から右わきにかけて內衣のひだのふとい刻線が目だつ。瞳のまるい孔、眉のうへの傷はおしい。左右脇侍の寶冠はやはり三面冠といへようが、うへの隅々がとがって異様なかっこうをしてゐる。顔はまるく大きい、合掌してしづかに簾几に腰をおろしてゐる。衣服はやはらかく、單調なからだにまとひ、下裳がながくたれて足さきをかくしてゐる。光背はない。その膝をそろへた兩足は單純で清楚である。このやうな脇侍はめづらしい。しかし、東西兩壁の對應關係からすると、東壁第二層北龕のほどおなじ姿勢をする老人像 (Pl. 63) に相對するも

のであるらしい。東壁のしわぶかい老人像に對し、こゝに、この若々しい、うつくしい像を配したのは、もとより計畫的であらう。さきのがウルヴィルヴァのカシアバUruvilvā Kāśyapa とすれば、これもなにか佛傳中の人物にちがひない。あるひはカウディニヤ Kaundiniya (憍陳如) 等五人について、沙門になつたといふ長者の子ヤシャ Yaśa (耶舍) ではなからうか。左右二人あることが、いかゞとおもはれるが、寶冠の俗體は長者の子ヤシャとして、至極ふさはしいとおもふ。

クシナガラ Kusinagara (鳩尸城) の長者の子で、ヤシャとよぶ純眞な青年があつた。一夜ふと睡からさめ、まはりにゐた眷屬男女のふしだらな寝姿をみて厭世の心をおこし、そのまゝ山林中へかけこんで「なやましい、なやましい」とさけびつづけた。この聲をきいた經行中の釋尊は「來たれ、安穩處こゝにあり」とよび、じゅんじゅんとしておしへさとした。こゝで純眞な長者の子は、一時に智慧の目がひらけ、俗形のまゝ羅漢果を成就した。しかし、身をふりかへると、なほ装身具があり、はづかしいとおもつたが、心さへさすれば形相になづむことなかれと、釋尊におしへられて安心した。羅漢果をえながら、なほ装身具におほはれた長者の子のかなしい、しかしうつくしいすがたが、こゝにいきいきとうつされてゐるではないか。ついで釋尊が、比丘よ來たれとよぶと、これですっかり俗容消滅し、うるはしい沙門のすがたになつたといふ。のみならず、この長者子の入道をきいて、その友五十四人がついて出家し、こゝにカウディニヤ等五人にくはへて、六十人の羅漢ができたといふ。北涼の曇無讖 Dharmarakṣa 譯『佛所行讚』(大正大藏經, 第四卷, p. 30) 卷四、劉宋のグナパドラ Guṇabhadra (求那跋陀羅譯)『過去現在因果經』(大正大藏經, 第三卷, [p. 645]) には、ともにカウディニヤ得道と三カシアバ歸服とのあひだに、ヤシャ出家のことをとくが、西晉竺法護 Dharmarakṣa の『普曜經』(大正大藏經, 第三卷, p. 530) 卷八にはこのことがない。(像高 1.38 m)

Pl. 79. 主室西壁第二層北龕左脇侍

北龕の左脇侍である。顔面はすこしあれてゐる。天衣は肩から膝にかけて三角形をふがいて、しづかにながれてゐる。ひらたい頸かざりをつけ、手首までおほった窄袖の彫りが目をひく。この脇侍には腕にも足にも衣文の線刻がないので、浮彫のなめらかさが、つよく印象され、そのうへ、なんの染著もない、清浄な長者子のすがたがよくあらはれてゐる。(像高 1.18 m)

Pl. 80. 主室西壁第二層中央拱柱と拱端交龍

南北兩龕のあひだに共用の拱柱がある。上下に渦卷をもつた柱で、なかほどに半パルメットのかざりがある。柱のうへに拱端の龍がたつてゐる。たがひに首をからんで脚をふんばつてゐる。目は大きく、顔はやゝみじかい。龍身はながく上昇して拱梁になる。この龍の表現はみごとである。きびきびとして、その迫力もすさまじい。左右には南龍、北龍の脇侍がみえてゐる。北龍の寶冠ある脇侍はいま手をうしなつてゐるが、坐下の簾几は、胴をしぼつたひもが精密に彫つてある。(Rub. III c) (拱柱高 0.51 m)

Pl. 81. 主室西壁第二層南龕

坐佛は床上ちかにすわつてゐる。兩わきにはしたに二體、うへに一體の合掌跪坐像が彫つてある。本尊の膝頭は、この跪坐像のためにかくれてゐる。この跪坐像は頭に腰折れ頭巾をつけるが、右わきの二體、左脇の一體は頭部をうしなつてゐる。その衣服は窄袖で、襟があり、腰にバンドをしめ、膝にまで達する外套である。そのしたには袴子をつけ、靴をはいてゐるらしい。まさに中央アジアを往還した商胡たちのすがたである。おそらく、さきにもいったごとくトラプシア Trapuša (提謂)、バリカ Bhalika (波利) たちの隊商であらう。(本書第五卷, Pl. 63, p. 16, 17) (龕高 2.05 m)

Pl. 82. 主室西壁第一層および腰壁

むかつて右の北龕は楣拱龕である。坐佛の兩わきに、三段になつて合掌跪坐の高髻像がある。うへに一體、中と下に二體づゝ、つがう五體である。左わきをいれると十體になるが、片がはの五體をとつていへば、^{*}鹿野苑 Mrigadāva におけるカウディニヤ等五人かともおもはれる。左わき北壁につらなる部分は破損がはなはだしく、わづかに五人の供養者と四層の重層柱のあつたことが、うかゞはれるのみである。坐佛本尊もかなり損じてゐる。そのうへ後世のしわざである障孔がみにくゝのこつてゐる。楣拱額のうちには豐滿な飛天が、身體をよこたへて飛んでゐる。

南龕とのあひだには、四層の重層柱があること、東壁におなじである。(Rub. III n) 各層に二つの小佛龕を配し、なかに一小坐佛を彫り、天蓋やうの屋根をつくり、三角垂飾を彫つてゐる。頂上には半パルメットの承花をのせ、そのあひだに、合掌の化生 aupapāduka が上身をのりだしてゐる。

南龕は佛鉢を手にした坐佛があり、兩わきにて、小さく一對の高髻老人があらはされてゐる。坐佛の右手は舉手形、膝においた左手に、まるい佛鉢がおかれてゐる。佛鉢のな

雲岡石窟第七洞

かには、なにかはいつてゐるらしい。龍形は特別である。拱梁は尖拱龍のごとくであるが、拱額、拱柱にあたるところは一面山嶽の浮彫である。いくへにもかさなつた山岳のあひだに水瓶を手にした老人たちがゐる。かぞへると八人である。あるものは両手に水瓶をもち、あるものは片手に水瓶をもち片手をあげ、あるものは腰をまげて水瓶の水をそそいでゐる。さまさまのポーズをみるが、要は水をはこび、水をそそいでゐるのである。それが緊急な事態であることは、ひらいた足、あげた手の表情などにみとめられる。どれも、からだがないめの位置にしめされてゐるにもかゝはらず、顔だけは正面むきになつてゐるので、多少不自然な感じをうける。(Rub. I A)

この場面は老仙たちの水をそそぐ動作と、佛手の鉢によつてウルヴィルヴァにおける火龍調伏であることが、あきらかである。釋尊は鹿野苑 Mrigadāva におけるはじめての説法のうち、マガダ Maghada (摩揭陀) 國にむかひ、途中、衆望のたかいウルヴィルヴァ Urvilvā (優樓頻螺) の事火道士カアシャパ Kāśyapa 兄弟をおとづれて、一夜の宿を乞うた。カアシャパたちは事火窟には惡龍がゐるからとことはつたが、しひてとめてもらつた。釋尊は石室にはいつて結跏趺坐し、三昧にはいつた。惡龍があらはれて火焰をふきあげると、釋尊は火光三昧にはいつた。石室が猛火につつまれるのをみたカアシャパは、弟子たちに命じて水をはこばせた。しかし、消火はむだであつた。石室が消滅して火がきえた。ところが、釋尊は安泰で、惡龍は降伏して、鉢のなかにおさまつてゐた。かくてカアシャパ一黨の弟子入りとなるのであるが、この一件は北涼曇無讖の『佛所行讚』(大正大藏經, 第四卷, p. 30—33) 卷四、西晉竺法護の『普曜經』(大正大藏經, 第三卷, p. 530, 531) 卷八、劉宋グナバドラ Guṇabhadra (求那跋陀羅) の『過去現在因果經』(大正大藏經, 第三卷, p. 646) 卷四などにひとしくとかれてゐる。たゞ『佛所行讚』では弟子たち消火のことがみえず、この構圖とやゝはなれてゐる。鉢中のものは調伏された惡龍である。まはりの重疊とした山嶽は『因果經』にいふ石室、あるひは事火窟をあらはしたのであらう。本尊兩わきの二老仙は、もとよりカアシャパ兄弟三人のうちの二人であらう。このカアシャパ歸服の佛龍は、第六洞、第十二洞その他にもある。ガンダラ¹⁾、中央アジアにもあつて、どれも弟子たちの消火を主題として、圖がらが構成されてゐる。

第一層の下縁には三つ葉環つなぎ文帯があつて、そのしたは腰壁となり、九體の供養者列像が彫られてゐる。破損は、したほどはなはだしく、列像の足はまったくあきらかで

ない。床には、いま塼がしきつめられてゐるが、これは後世の附加である。(第一層高 2.10 m, 腰壁高 1.50 m)

¹ A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 225. A. Grünwedel, *Buddhist Art in India*, Fig. 88.

² A. Grünwedel, *Ibid.*, Fig. 78. Ditto, *Alt buddhistische Kultstätten*, Fig. 180, 372. A. Foucher, *Ibid.*, Tome I, Fig. 224, 225.

Pl. 83. 主室 西壁 第一層 北龍 右脇衆

北龍左脇侍の全壊に對し、右脇侍の五體はみごとにのこつてゐる。跪坐合掌の、うつくしい供養者たちである。兩膝をそろへ長跪するものと、片膝を立てゝ胡跪するものがある。光背はなく、頭に高髻をいたゞく。目と口に微笑をたゞへ、まるまるとした身體を丸彫のごとく浮出してゐる。ひとかたまりになり、氣樂な配列と自由な姿態とが、愛くるしい印象をあたへる。この五體の脇侍は、左の五體をくはへると十體になる。火龍調伏の南龍に隣してゐる關係から、やはり佛傳中の一場面であらう。(本尊高 1.45 m)

Pl. 84. 主室 西壁 第一層 南龍 右脇侍

Pl. 85. 主室 西壁 第一層 南龍 左脇侍

腕、腰、足がかなり破損してゐる。いづれも片手をまげてわきにつけ、片手は額にあげてゐる。眼窠をふかくし、眉をさげ、みじかい鼻、ふかい口もとをつくり、老人の顔貌である。兩足の膝をやゝまげてゐるのは、やはり老人のせみであらう。老人で高髻のあるのはバラモン仙者をあらはしてゐるのである。端正な本尊に對し、いかにも見おとりのする存在である。釋尊に調伏されたカアシャパ兄弟の、みじめな姿と解してちやうどよい。(像高右 0.67 m, 左 0.72 m)

Pl. 86. 主室 南壁 および天井

明窓を中心に南壁をみあげた寫眞である。各層の佛龍が南壁、また東西壁につらなつてゐるさまがよくうかがはれる。折りあげ天井のふかい彫りもあきらかである。明窓と拱門と、左右四層の佛龍の、整然たる壁面構成が、壓倒的な印象をあたへる。明窓の天井には、左右からのびあがつた珊瑚樹のやうな樹枝が一面にひろがつてゐる。(明窓高 3.80 m, 幅 3.60 m)

Pl. 87. 主室 南壁 上層

明窓を中心に、兩がはの第四層、第三層の佛龍がみえ、したの供養六天像の一部がみえてゐる。(明窓高 3.75 m, 幅 3.60 m)

Pl. 88. 主室 南壁 下層

門口とその左右の第一、第二層佛龕、腰壁の、ひどくあれた状態がみえる。拱門のなかに土壁と、それに小さい戸口とがつくられてゐる。したがって、當初のおもむきとは、よほどちがってゐるわけである。しかし、門口の浮彫はゆたかで、實にうつくしい。腰壁には供養者の列像が彫られてゐるが、それがいまでは、すっかりあれはてゐ、修補の杣孔が無慚なすがたを呈してゐる。床は後世につくろつた塼床である。(拱門高 5.20 m, 幅 4.00 m)

Pl. 89. 主室 南壁 明窓 拱梁龍形 (西部)

Pl. 90. 主室 南壁 明窓 拱梁龍形 (東部)

明窓の人像柱のすぐうへに龍形が彫られてゐる。龍身はながくのびて拱梁になり、龍尾はアアチの中央で相接してゐる。龍頭には、まがつた角があり、たつた耳がある。それに大きな眼がひらき、口にはおそろしい齒なみがそろつてゐる。舌はながい。おそろしくながい舌で、氣味わるくうねつてゐる。大きくはねた前肢は力づよく、中國の傳統をつたへてゐる。顎のうしろ、前肢の肘には、はねかへつた獸毛の表現があり、身體には鱗がある。かなりふかく彫りこんで、丸彫のやうに、背面からたかく彫りあげてゐるのが注意される。(蓮瓣帶高 0.26 m)

Pl. 91. 主室 南壁 明窓上部および天井

明窓アアチの天井がよくわかる。左右から樹枝が、生きものゝ觸角のやうにのびあがり、いまにも相ふれようとしてゐる。アアチの縁には龍のほそい胴と尾とがあらはされ、そのうへには小佛列像を彫り、三角垂飾を型のとほりつけて、天井にいたつてゐる。(坐佛高 0.50 m)

Pl. 92. 主室 南壁 最上層 坐佛列像 (部分)

南壁最上層、東端の坐佛列像である。シムメトリックの通肩の形式と、偏袒であるが衣端で右肩をすっぽりつゝんだ形式と二種があり、それが交互にならんでゐる。たゞ東からの第四像が右肩に衣端がかかるのみで、まづたく肩の形式、こゝでは例外的な存在である。みな丸顔で堂々たる體軀である。嚴然として舉身光につつまれ、光背のあひだに半身の合掌化生がある。それから、このうへに三角垂飾がある。三角垂飾の表面は、合掌化生の顔、坐佛の顔と同一のたかさである。佛の背面をふかく彫りこんで、龍状にするとも、それだけのたかさをもつた像を彫りだしてゐる。列龕下縁の蓮瓣飾は力づよく、おほまかな圖がらであ

る。(坐佛高 0.50 m)

Pl. 93. 主室 南壁 最上層 坐佛列像 (部分)

明窓のうへ西端である。むかつて右は通肩の佛、左は右肩を衣端でつゝんだ佛、この一對が列像の一單位である。ひだは線刻であらゐ。無地の大きな頭光と身光をおひ、小さいながらに堂々たる威容をしめす。光背のあひだに合掌の化生が、上半身をのぞかせてゐる。小さいが、實にゆたかな、たくましい彫刻である。うへに三角垂飾帯の一部がみえてゐる。(坐佛高 0.50 m)

Pl. 94. 主室 南壁 中央 供養六天像

南壁明窓のしたには、長押のやうな一帯があり、そのしたに、六體の供養天人を浮彫にしてゐる。長押やうの一帯は方形にしきられ、そのうちに六瓣、八瓣の蓮華があらはされてゐる。六瓣はなゝめ蓮華、八瓣は正蓮華で、それを交互に配されてゐる。そのしたのしぼられた帳幕は八つの弧をゑがき、その兩翼に二本の柱がたつてゐる。(Rub. II A, B) 帳幕のしたはふかく彫つて、横ながの籠となり、そのふかさだけの高さに供養天人の像を浮彫にしてゐる。天人は六體である。高髻で、簡単な板の頸飾をつけてゐる。左右から三體づゝシムメトリックに中心にむかつてゐる。いづれも片膝をたて、片膝をついて、いはゆる胡跪の姿勢である。西端の一體をのぞけば、いづれも合掌、または、それにちかい手相をしてゐる。この構成は、第八洞よりよほど靜止的であり、いさゝか形式的でさへある。しかし機械的な左右均整ではない。それは六體の顔のむきと視線とに、如實にあらはれてゐる。中心にちかい天人ほど、顔も視線も中心にむかつてゐるが、左右の端になるほど、正面にむいてゐる。この微妙な顔のむきと視線とは、彫刻家のこまかい心づかひを、ものがたる。どの天人も顔は優美である。姿態はおとなしい。さうして、幅のひろい天衣の起伏もやはらかい。いま、天衣や裳には着色があるが、むろん、もとのものではない。この六人の供養像をよくみると、むかつて左の二人はたがひによく似てゐる。右の二人もよく似てゐる。たゞなかの二人は、それほどよく似てゐないやうである。左の二人、右の二人は、それぞれ同一作者によつてつくられたとみてよいやうである。

六天像のした、拱門のうへには、奏樂の天人が彫つてある。左右三體づゝで、べつに樂器をもたぬ飛天が、左右に一體づゝとんでゐる。東からみると(1)箏篋、(2)堅笛、(3)排管(簫)、(4)螺貝、(5)横笛、(6)琵琶を奏してゐる。この寫眞

雲岡石窟第七洞

には、そのなかの四體がみえる。いづれも童子形で、まるい顔に特色のある頭髪をつけてゐる。上身は裸、下身にはながい裳をつけ、のびのびととんでゐる姿態はうつくしい。

樂天たちの中心には、六角形のマ＝寶珠 *cintāmaṇi* がある。こまかい火焰を線刻した光背と臺座がついてゐる。第七洞には天井にもマ＝寶珠 (Pl. 127) をもった飛天があらはされてゐるが、このやうに尊像のごとく中心においたものはめづらしい。これこそ第九洞門口天井にみるマ＝寶珠 (第六卷, Pl. 38B) の先蹤である。後代になると、この火焰光背が、いはゆる寶珠形として發達するのであるが、まだ雲岡では中心に六角形の寶石を包藏してゐる。それはマ＝寶珠の原始的な形式であつて、中央アジアのキジールからうけつ¹⁾たものである。門口のふちは、半パルメット並列文でかざられてゐる。(Rub. I F, II F) (龕高 1.80 m)

¹⁾ A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 48, 53, 123, 165, 275, 392.

Pl. 95. 主室 南壁 中央 供養六天像 東第一像

六供養天の東端第一の像である。下半身に龜裂をみる¹⁾が、そのほかは保存がよい。左膝をたて右膝をつけ、いはゆる胡跪の姿勢である。上體は自然にすこしまへかにみ²⁾な³⁾つてゐる。胸ではせした手には、蓮の蕾らしいものをいだいてゐる。下裳は足をおほひ、領巾が左肩から右腰にかいてゐる。天衣は背なかに大きくひろがり、まるい頭光のうしろになびき、その両端は腕にかいて大きくひろが⁴⁾つてゐる。それらのひだは、みな、たゞの刻線である。(像高 1.20 m)

Pl. 96. 主室 南壁 中央 供養六天像 東第二像

東より第二の像である。保存はきはめてよい。第一像とまったく同一の姿勢と造形をしめしてゐる。たゞこの像の方が一層豐滿で、ボウズが落ちついてゐる。(像高 1.20 m)

Pl. 97. 主室 南壁 中央 供養六天像 東第五像

東より第五の像である。實にうつくしい顔をし、微笑さへたいへてゐる。その表情が第六像、すなはち西端の像によく似てゐる。さうおもってみると、からだつきののびやかなところも、いくらか似てゐる。手の大きな表現も、この二像のあひだに共通性がある。したがつて、この二像が、同一作家によつて、つくられたことを暗示してゐるとおもふ。この像の装身具はめづらしく複雑である。手の釧と板のやうな頸飾は他とおなじであるが、そのほかに瓔珞の頸飾、獸

頭になつた頸飾をつけてゐる。おしいことに、左上膊に小破がある。(像高 1.20 m)

Pl. 98. 主室 南壁 中央 供養六天像 東第六像

東よりかぞへて第六、すなはち西端の像である。胸と腕の部分は、岩質がもろいために、破損してゐる。ほかの五體とちがひ、合掌ではなく、右手を胸にあて、左手は腰につけ手首をまげてゐる。さうして、この左手のあらはしかたは、このやはらかい像をつよくひきしめてゐる。腰や膝は實にやはらかさうである。天衣と裳には線刻のひだがある。しかし、この像のうつくしさは頭部にある。少女のごとき至純さが、眉目、鼻、やゝ反つた唇にあふれ、額髪や、額、頬、顎にまでかゞやいてゐる。そのうへに日光が、さらにこの効果をつよめてゐる。(像高 1.20 m)

Pl. 99. 主室 南壁 拱門上部 東脇天人

つぎの圖版に對應する奏樂天人である。そのあひだに Pl. 94 の樂天四體がある。門口の縁飾がみえ、よこには第二層佛龕の拱額がみえ、うへには第三層の波狀唐草文帶がみえる。そのあひだにできた不規則な空間に、二體の天人がたくみに彫りこまれてゐる。うへのは髻のある天人である。左手に顎のをせ、右手を腰にあてゐる。身體をたふしてとぶ姿であるが、足さきのさばきが實にうまい。したの⁵⁾は箏篋をひきながら立つてゐる。童子形で、腰衣をつけてゐる。箏篋を身體にくつとひきつけ、顔を樂器におしあてゐ、指さきはみごとに絃を弾いてゐる。(立像高 1.10 m)

Pl. 100. 主室 南壁 拱門上部 西脇天人

うへの天人は三角形のせまい空間に彫りつけられてゐる。右手をあげてなにかをさゝげ、左手を腰にあてゐる。右足は膝からつよくまげ、左足はまっすぐにのばして、とんでゐる。したの天人は琵琶を奏してゐる。首じめの部分⁶⁾がとくに大きいのがめづらしい。天人は顔をなゝめにむけ、右手に撥をもつてゐる。兩足はひらいて立つてゐるが、足のしたには柱頭の大きな半パルメットがある。かたはらにみえる龍は第二層拱額のものである。(立像高 1.05 m)

Pl. 101. 主室 南壁 上部 東半

Pl. 102. 主室 南壁 上部 西半

この二圖はたがひに對應する寫眞である。東がはにも西がはにも人像柱がたち、そのよこに第四層の龕、第三層の龕が上下にならんでゐる。それに側壁の傾斜、龕のふかさな

どがよくわかる。(明窓高 3.75 m)

Pl. 103. 主室 南壁 下部 東半

Pl. 104. 主室 南壁 下部 西半

Pl.103とPl.104とは相合して南壁の下半となり、Pl.101と102のしたにつらなる。拱門をなかにして、左右に第二層と第一層の龕があり、したは供養者立像の腰壁がある。壁面はしたほど破損がひどい。拱門わきの重層柱は三層からなり、根もとにはこれをさしあげた侏儒像がある。西に比して東の層柱は風化がはなはだしく、第一層以下はまったくみえない。Pl. 20—22参照。(拱門高 5.20 m)

Pl. 105. 主室 南壁 第四層 東龕

楯拱龕のなかに寶冠の菩薩交脚像を彫る。ひくい五成の須彌座にすわってゐる。腹部、腰部は後退し、兩膝がつよくまへにでい、つよい印象をあてる。交脚といふが、まじはってゐるのは踵で、足はながくのびて、蓮趺のうへをふんでゐる。(Rub. II c) 大きな右手をあげ、左手は半パルメットの葉形をもって俯手形である。龕内左右に小形の供養天人と飛天が浮彫にされてゐる。(龕高 2.05 m)

Pl. 106. 主室 南壁 第四層 東龕 菩薩交脚像

三面寶冠の正面圓板には、小坐佛を入念に彫る。(Rub. I1) 圓板のうへは弦月形がある。西龕の交脚菩薩の寶冠にも、おなじく小坐佛がある。第八洞南壁の交脚菩薩(本書、第五卷、Pl. 98, 111)にはこれがないのである。寶冠の兩わきからは、リボンがひるがへってゐる。彫りのない二重光背がある。そのうへ兩肩から腕にかけて、大きく天衣がひろがってゐる。端麗な顔の彫りは、ていねいに仕あげてあるが、手足になると、かなり大まかにすましてゐる。肩には頭髮がたれ、胸にはかざり板と獸頭がたれる。胸にあげた右手はひろげ、腹においた左手には半パルメットの葉形をもってゐる。(像高 1.60 m)

Pl. 107. 主室 南壁 第三層 東龕

天蓋のしたに坐佛の三尊を彫る。龕といふほどふかくはないが、それでも、天蓋のしたはふかく彫りくぼめられて、こゝに坐像を彫りだしてゐる。(Rub. I c) 本尊坐佛は大きく蓮瓣をたれさげた蓮座にすわる。大きな舉身光の兩わきには、片手に水瓶をさげた脇侍菩薩がたつ。脇侍の臺座は大まかな線刻の蓮瓣で、ほそながい花瓣が大きくうねってゐる。このやうな蓮瓣はほかにみないところである。この層

のうへには蓮瓣文帯、したには半パルメット波状文帯がはしてゐる。(龕高 2.42 m)

Pl. 108. 主室 南壁 第三層 東龕 佛坐像

坐佛はまる顔で、目が大きく、顎がふとい。右手は舉手形、左手は手首をたてゝ蓮の蕾をもった捻手形。衣はまるい身體に密着し、おほまかな、ひだをかるく刻線であらはしてゐる。ふとい大きな膝、四角なさんぐりときつた足、いかにも堂々としたかまへである。(像高 1.40 m)

Pl. 109 B. 主室 南壁 第三層 東龕 右脇侍

A. 主室 南壁 第三層 東龕 左脇侍

坐佛の左右にある脇侍はシムメトリックの姿態である。片手に水瓶、片手に蓮の蕾をもって立つてゐる。ともに豊富な肉つきで、腹が出、腰がふとい。天衣と下裳はびつたりとからだにつき、大まかな刻線のひだがながれてゐる。が、なにか重心のない、かるやかな身體つきである。足にも大して力がいってゐない。腰の力もぬけてゐる。へうぜんとして立つてゐる。そのうへ手や水瓶の、あらっばい、比例を絶した彫刻は、かへっていきいきとした活氣をそへてゐる。右脇侍の顔はまるく、口が大きい、左脇侍の方はやゝきゃしゃである。(各像高 1.28 m)

Pl. 110. 主室 南壁 第三層 東龕 蓮座と唐草文帯

本尊の蓮座は、實に大きな蓮瓣からできてゐる。ひらたい蓮華のしきもの(座褥)を、半分まへにたれたやうにみえる。そのやりかたが、いかにも大膽である。二つの肉にわかれ、さきのとがった雲岡獨特の蓮瓣である。瓣と瓣とのあひだから、したの瓣のとがったさきがのぞいてゐる。これに應じて脇侍の蓮座もかはってゐる。これはほそながい蓮瓣で、つよくはねまがつてゐる。なゝめうへからみたやうに、むかふの瓣がしたにかさなつてゐる。本尊蓮座と脇侍の蓮座とのあひだにも、小さい蓮華やうのものがある。

この層のしたの半パルメット波状文帯が、いきいきと彫られてゐる。蔓や葉はあさい。V字形の断面に彫られてゐるのが注意される。これによって、ひじやうにするどい印象をうける。葉の反轉、蔓のうねりも、節くれだつて、たくましい。

なほ、この寫眞で注意をひくのは、むかつて左端にみえる東壁の侏儒である。その浮彫の平面的であるとともに、その輪廓の彫りこみが垂直であることを注意されたい。この彫りと對蹠的な浮彫が、明窓の樹下比丘像である。Pl. 26,

27 参照。(唐草帯高 0.28 m)

Pl. 111. 主室 南壁 第二層 東龕

拱門のないめうへに見える第二層は尖拱龕であるが、文様帯におさへられて尖頂がなく、圓拱龕のやうに見える。坐佛は床上にちかに彫られてゐる。舉身光のわきには、二段になった供養天人が合掌跪坐し、一列になった飛天がたかくとんでゐる。拱額内には左右五體づゝの高髻天人が合掌跪坐してゐる。同形でありながらも、けっしておなじでない。おかれた位置もそれぞれちがふ。したがって、自由な、うごきのある構成である。拱梁のはしには龍身があらはされ、それは渦卷き柱のうへにたつてゐる。渦卷き柱は第八洞門口にもあるもので、上下に渦卷があり、中間に半パルメットの葉形がつくはへられてゐる。この圖版では、上縁と下縁の半パルメット文が、東壁にのびてゐるのがわかるし、また東壁の佛龕のふかさもよくうかがはれる。(龕高 2.02 m)

Pl. 112. 主室 南壁 第二層 東龕 佛坐像

右手は舉手形、左手は衣端をにぎって捻手形である。通例の坐佛像である。額の生えぎはが、かつらをつけたやうに、ふかく切りたつてゐる。眼が大きく、とくに肩がうつくしい。顎はひき、頸にはまんなかに刻線が一本はいつてゐる。頭部の彫りの入念さに比して、手と足の彫りはぞんざいである。しかし衣文の大まかな刻線とともに、かへってつよい印象をあたへる。(像高 1.33 m)

Pl. 113. 主室 南壁 第一層 東龕

南壁第一層は、東西とも、うへの層の佛龕とはちがひ、龕があさい。そのうへ東西同形でもない。ここでは維摩居士 Vimalakīrti と、文殊菩薩 Mañjuśrī の對問像をあらはすために、東に維摩居士を楣拱龕内に彫り、西 (Pl. 123) は文殊菩薩を天蓋のしたに彫つてゐる。維摩の楣拱龕は維摩のななめになった姿勢に應ずるやうに、左翼がかくれ、右翼だけがあらはされてゐる。維摩居士は下半身がとけてゐるが、おそらく床上に坐してゐるものとおもはれる。楣拱のしたには、弧形にしばられた帷幕が大きくたれさがつてゐる。右手をわきにつき、體をやゝそらして、あげた左手には小さな木の梨形の塵尾をもつてゐる。このふとい左手と、にぎった指とは、實に力づよい表現である。頭には、とんがり帽をいたゞき、みじかい顎に三角なりの鬚髯がつくられてゐる。眼は大きく、口もふつくりし、鼻は佛像にくらべてみじか

い。襟のたかくあがつた、ゆるやかな衣服が、大きな胸をつつみ、悠然たるかまへである。(像高 1.36 m)

Pl. 114. 主室 南壁 第四層 西龕

楣拱龕に交脚菩薩像を彫る。すべて東龕と同形式である。Pl. 105 参照。西壁が傾斜して天井にむかふほど、まへのしかゝってくるので、楣拱が不整形である。楣拱の中央が三つに區ぎられ、それぞれ飛天をおさめるが、左右はわづかに菱形部がみえるのみで、そこには合掌の蓮上化生 aupapāduka があらはされてゐる。柱はないやうであるが、帷幕が大きくたれ、西壁に接するところに大きな籐几やうの座があり、西壁の尖拱龕とともに、この楣拱龕をうけてゐる。上下に蓮瓣文帯 (Rub. II n) があり、そのうへの坐佛列像、三角垂飾、それから天井になるところがよくうかがはれる。(龕高 2.02 m)

Pl. 115. 主室 南壁 第四層 西龕 菩薩交脚像

龕の帳幕のしたに、大きくいっぱいに、交脚像が彫られてゐる。ひくい五成の須彌座に坐し、右手は舉手形、左手は捻手形である。東龕 (Pl. 106) と同形式であるが、左手の手首をまげて蓮の蕾をもつてゐるのがちがふ。圓光と舉身光にはなにも彫らず、肩のまはりに大きく天衣がひるがへつてゐるのと、頭の兩わきに三角形かざりのなれたのと、リボンのひるがへつたのが、光背のうへに線刻であらはされてゐる。光背にも、須彌座にも、なにも彫らないところが、この洞や第八洞の特色である。その點、第九洞、第十洞と大きなコントラストをしてゐる。(像高 1.55 m)

Pl. 116. 主室 南壁 第四層 西龕 菩薩上身

寶冠の中央に小坐佛を彫るのは東龕 (Pl. 106) とおなじである。顔はすこしちがひ、西の方がふつくりしてゐる。東龕では上脛に弧線をくはへ、眼策をはっきりさせてゐるが、西龕ではこの弧線が左眼にない。それに反し、下脛のふくらみは西龕の方がつよく、東龕はよわい。よく似てはゐるが、同一作者でないことは、その耳の表現のくせを比較すると、一目瞭然とする。身體の彫りにくらべて、頭部はとくに入念に仕あげてあることは、この像にかぎらないが、注意される。胸にあらはされてゐる頸飾のほか、耳朶につけた玉かざりが顯著である。(頭高 0.50 m)

Pl. 117A. 主室 南壁 第四層 西龕 右脇供養天

B. 主室 南壁 第四層 西龕 左脇供養天

西龕本尊舉身光の兩わきに、合掌した供養天人の跪坐像があり、そのうへに飛天が彫られてゐる。ごくあさい浮彫である。ゆたかな肉つきの、やさしい小像群である。可憐な、無造作なからだつきをし、ことに飛天はせまくるしいところに、あらはされてゐるので、随分無理なポーズをしてゐる。それにしても、この左右の小像が、別人によってつくられたことはあきらかである。わりにあけづりの無文の光背がのぞいてゐる。(跪坐像高 A 0.52 m, B 0.47 m)

Pl. 118. 主室 南壁 第三層 西龕

天蓋のしたをふかく彫って、たひらな舉身光をつくり、坐佛の三尊像をあらはす。まったく第三層東龕(Pl. 107)と同形である。とくに坐佛の、たひらな兩膝のかたちはよく似てゐる。しかし作者は別人である。舉手形の右手は破損するが、俯手形の左手はよくのこつてゐる。東龕の捻手形に對し、これを俯手形にしたものとおもはれる。右脇侍の蓮座は東龕とおなじく異例であるが、左脇侍の方は、かへつてふつうにみる蓮座をならべた蓮座である。だから、左右の臺座はそろつてゐない。(龕高 2.28 m)

Pl. 119. 主室 南壁 第三層 西龕 佛頭部

まことに威嚴にみちた顔容である。顔はていねいにみがいて仕あげてゐる。眉は線刻をくはへずに、面と面とのするどい稜線としてあらはし、眼はほそく、すこしつりあがつてさへゐる。頸はふとく、東龕(Pl. 108)のやうな刻線はない。ながい耳は、きはめて簡略にあらはしてゐる。(頭高 0.46 m)

Pl. 120A. 主室 南壁 第三層 西龕 右脇侍

B. 主室 南壁 第三層 西龕 左脇侍

兩脇侍は片手を胸にあて、片手を垂れ、たがひにシムメトリックの姿勢をとつてゐる。胸には三通りの頸飾がある。板狀の頸飾、玉をつないだ頸飾、虎頭のむきあつた頸飾である。この三種の頸飾はごく一般的なもので、東龕(Pl. 107)の脇侍にもあつたが、こゝのは天衣が肩にかゝつてゐないので、かうした頸飾がより顯著にみえるのである。下裳をしめる腰紐は、中央に圓環をとほしてをり、紐のはしをこゝでくゝつてゐる。左脇侍の寶冠には獸面がついてゐて、第八洞の南壁第三層と一致するが、右脇侍には獸面がない。東龕にも獸面がない。脇侍のもちものは右脇侍が水瓶、左脇侍が片方のとがつた鍔である。右脇侍の方は姿態の均衡がとれ、左脇侍の方は頭のわりに身體が小さい。(像高 A 1.28

m B, 1.31 m)

Pl. 121. 主室 南壁 第二層 西龕

尖拱龕のなかに、坐佛が臺座なしに、床上ちにすわつてゐる。舉身光が大きく力づくよく反つてゐるのがみえる。光背兩わきには下段に二體、中段に一體の跪坐供養像、上段に二體づきの飛天像が彫つてゐる。みなそまつな小像であるが、まるまるとし、可憐で活氣がある。拱額には八體の小坐佛がならんでゐる。拱端には龍がゐて、拱柱(Rub. III B)をふんでゐるが、西がははせまいので、西壁南龕の龍で代用してゐる。拱梁はふとく、なゝめの刻線がある。(龕高 2.03 m)

Pl. 122. 主室 南壁 第二層 西龕 佛坐像

坐佛は型のごとく右手を舉手形、左手を捻手形にしてゐる。眉はつよくあがり、刻線がある。頬ははり、唇は左右があがつてゐる。顎したにも、頸にも線刻があり、目と口もとに微笑がたゞよふ。顔にくらべると、身體の表面はいくらかあれてゐる。これはどの像にも共通するところである。とにかく、これもまた一人、別の作者によってつくられた像である。(像高 1.25 m)

Pl. 123. 主室 南壁 第一層 西龕

ほかの龕とちがひ、天蓋の龕である。彫りこみはわりにあさい。寶冠をいたゞき、圓光をつけ、頭を右にかしげてゐるのは、東龕(Pl. 113)の維摩居士に對應してゐるのである。右手は舉手形であるが、指さきに蓮の蕾をもつてゐる。左手は捻手形で、なにかまるいものをもつてゐる。また蓮の蕾であらうか。こゝでは、ふつうみるやうに如意をもつてゐない。下半身は破損してゐるが、片足をたれ片足をたひらにして、座上に腰をかけてゐる。たくましい上は悠々たるポーズで、まことに力づよい。天蓋のすこしゆれてゐるのは、文殊の來着をしめすものであらうか。その左右には天人がゐる。むかつて左には合掌跪坐の天人、右には右足をまげて飛來する天人、またそのしたの方に合掌する天人たちがゐるが、したの方は溶解してよくわからない。しかし自由な、型にとらはれない配置はみごとである。(龕高 1.94 m)

Pl. 124. 主室 天井 全景

主室の天井も第八洞とおなじである。(本書、第五卷、Pl. 117) 六つの格間にわけられるが、大小のちがひがある。北よりも南がはの格間がひろく、東西より中央の格間がひろ

い。したがって、格間のうちに四邊とも二體の飛天をもつものは、たゞ中南のⅤ區のみである。ⅡとⅣとⅥは二體づきの二邊と一體づきの二邊とよりなり、四邊とも一體づきのものは、東北區Ⅰと西北區Ⅲである。格間の中心に蓮華

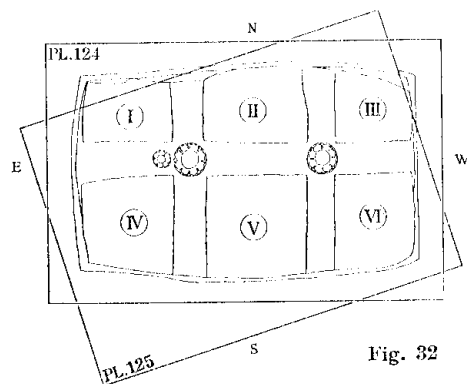


Fig. 32

があり、そのまはりに小さく、あさくたつた三角持送りがある。三本の梁は二個所の交叉點に蓮華文をもち、蓮華によってわけられた七つの部分に、それぞれ二體づきの飛天を彫つてゐる。それは千差萬別さまさまのポーズをし、方向もまちまち、たゞ頭を梁上の蓮華の方にむけてゐるといふ點でみな一致してゐる。それに反し、格間のうちの飛天は、みな腰をよこたへてとび、しかも左まはりで統一されてゐる。天井で左まはりといふことは、地上の右まはりにあたり、あるひは右繞の禮 pradakṣiṇa にあはせてゐるのかもしれない。天井の南には、大きな明窓アチの天井がみえる。また天井と東西南北四壁と接する縁に、三角垂飾がめぐり、そのしたに坐佛の列龕がある。(Fig. 32) (全長 6.70 m, 全幅 4.20 m)

Pl. 125. 主室天井 全景

南壁の方にむかってみた天井である。(Fig. 32) 格間のくぼみ、そのなかの飛天彫刻の角度などが注意される。なかんづく、各格間南がはの飛天が、おなじ方向にそろつてとんでゐるのが注意される。また各格間西がはの飛天をみても、おなじことが目につくであらう。こゝからみると、いくらかいたんだ北がは、東がはがみえないので、非常に保存がよいやうにみえる。(全長 6.70 m, 全幅 4.20 m)

Pl. 126. 主室天井 中北格間Ⅱ

東西にはしる梁があり、南北にはしる二本の梁との交叉點に、それぞれ蓮華文がある。二つの蓮華のあひだに一對の飛天があり、弓なりになつて蓮華の方にとんでゐる。したがつて、たがひに足の方が相ふれることになる。第八洞のやうに、香爐を中心にさゝげあつたのとは、まったく反對

である。(本書、第五卷, Pl. 118) 西の天人は左手に蓮の蕾をもち、右手はひらいてさしだしてゐるだけであるが、東の天人は左手になにかもち、右手でなにかをつまみあげたやうな調子である。南北の梁上にある飛天は、いちおう頭を蓮華の方にむけてゐるが、實に自由なポーズをしてゐる。構圖のうへの照應はない。中北格間Ⅱの内部はいくらか破損してゐる。北がはがひどい。けれども蓮華を中心にし、四邊に六體の飛天をめぐるしてゐる。いづれも弓なりになつて、おなじ方向にとんでゐる。ことに南がはと北がはは、二

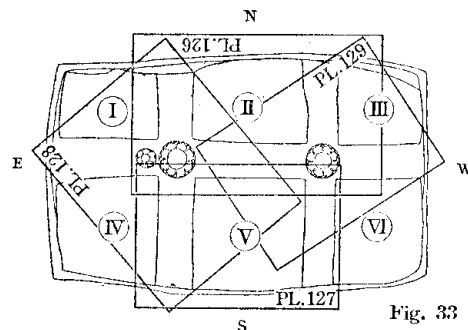


Fig. 33

體が相かさんつてとんでゐる。北がはに、北壁の三角垂飾帶と奏樂天人の列龕がみえる。(Fig. 32) (格間東西長 2.00 m)

Pl. 127. 主室天井 中南格間Ⅴ

Pl. 126 の南がはにある格間である。(Fig. 33) 蓮華をかこむ三角持送り、その四周には二體づきの飛天が、ならんとんでゐる。おなじ方向にむかつてゐるが、南がはの二體はマ=寶珠 cintāmaṇi をさゝげ、まへの方の天人は身をかがへし、右足をたてゐる。寶珠は雲岡獨特の、六角形を火焰でつゝんだものである。また東がはの二體は、蓮の華をいっしょにさゝげてゐる。左右の梁上の飛天はシムメトリイでない。頭を梁上の蓮華にむけながらも、その姿態は自由である。そのうち西梁南半の南の飛天は、合掌したまゝ立ちはだかつてゐる。その點、第九洞主室天井の天人に似る。(本書、第六卷, Pl. 83) 南がはに南壁の三角垂飾と坐佛列龕とがよくみえてゐる。(格間東西長 2.00 m)

Pl. 128. 主室天井 東部

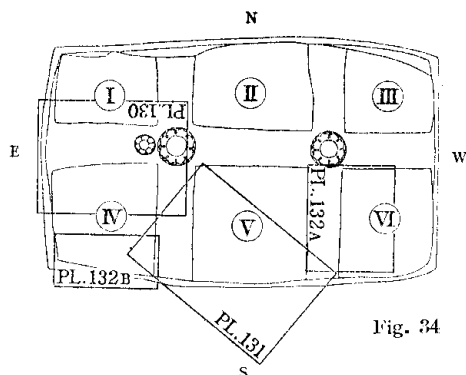
東の梁上蓮華を中心になゝめに東北部をみた寫眞である。(Fig. 33) 梁上の飛天たちは、それぞれ氣まゝなポーズをとりながらも、みな蓮華の方に頭をむけてゐる。たゞそれだけで、その他になにも嚴格な規律はない。數人の彫刻家が自由に陣どつて、いろいろの角度から仕事をしたものとおもはれる。(蓮華直徑 1.23 m)

Pl. 129. 主室天井西部

西の梁上蓮華を中心にして、なゝめに西北部をみあげてゐる。寫眞右方が西北格間 III で、左方は中南格間 V である。(Fig. 32) 天人配置のプリンスプルはなにもない。たゞ頭を蓮華の方にむけてゐるだけである。(蓮華直径 1.20 m)

Pl. 130. 主室天井中央梁 東部

むかつて左に東方梁上の蓮華がみえる。(Fig. 34) いま二體の天人は、東西梁の東端を西にむかつてとんでゐるのである。西の天人は弓なりにまがりながらも、上身をつよくおこし、左足をつよくまげてゐるのは特異であり、東の天人が兩脚をのばしながら、兩手をあげてゐるものかはつてゐる。風がはりなポーズであるが、肉體はやゝ貧弱であり、



動作がぎごちない。二體同一人の作であることはうたがへない。飛天と梁上蓮華とのあひだに、あさい七瓣の蓮華をはめてゐる。格間はくぼんだ曲面で、これに飛天を浮彫した手法がよくわかる。こゝにみえてゐるのは東北 I 區の南側の天人である。おしいことに顔面に破損があるが、ゆたかな肉體でたくましい。これは別人の作、むしろ、おなじ格間の西がは天人によく似てゐる。まへに空白をうめるあさい八瓣の蓮華がある。(梁幅 1.42 m)

Pl. 131. 主室天井中南格間 V

中南格間をなゝめにみあげてゐる。(Fig. 34) マ=寶珠をさゝげた二天が南がはである。蓮の華をさゝげたのは西がはである。蓮華をさゝげた手はうつくしい。どちらも素樸な、しかし、たくましい肉體をあらはしてゐる。格間の曲面にそつて彫られてゐる。三角持送りが形式的にあさく萎縮してのこつてゐる。中心のむつくりとした蓮華が、いたんでゐるのはおしい。三角垂飾のうへのなげしやうのものが、梁の部分にくひこんでゐるのは、構造的には不可解である。西梁南半の飛天、とくにその足もとをみよ。浮彫のふかさがよくわかる。したには南壁の三角垂飾と坐佛列龕がみえる。(格間東西長 2.00 m)

Pl. 132A. 主室天井西南格間 VI 東側飛天

B. 主室天井 東南格間 IV 南側飛天

A. 格間 VI の内部がみられる。(Fig. 34) この蓮華は小さく、三角持送りもあさく萎縮してゐる。格間の側面はひろく、凹面をしてゐる。こゝに六體の飛天がならびとんでゐる。前方のものは蓮の華を奉じ、足はうしろの飛天のためにかくれてゐる。うしろの飛天はふりかへり、右手をあげて蓮の蕾をさしあげてゐる。肉つきはたくましく、南がは、北がはにみえてゐる飛天とも、つよい一致がみとめられる。おそらく、この西南格間が一人の手になるのであらうか。(格間南北長 1.90 m)

B. 格間 IV の内部である。(Fig. 34) 身體をゆるく弓なりにまげてとんでゐる。無理のないポーズである。顔や手足がたくみにまるく浮きだし、胸の珠をつらねた環飾が目をひく。身體のうしろと、まへになびいた天衣の曲線は、力があり、うつくしい。まはりの空白に、四つのあさい蓮華が彫つてある。こゝには、南壁坐佛列像のあひだにある、合掌化生のかはいゝ顔がならんでゐる。(格間東西長 1.70 m)